

金華史誌

題
字

岐阜市長

蒔田
浩

金華史誌

『金華史誌』 発刊にあたって

金華自治会連合会会長

小林嘉美

岐阜市発祥の地金華校下は歴史上有名な言葉で

ある「美濃を制する者は天下を治める」と言われた、織田信長の「天下布武」の拠点になった故地であります。

標高三二九メートルの金華山を擁し、奥美濃の大日岳を源とする、鶉飼で有名な清流長良川の恩恵を懐一杯に受けたため生まれた土地柄だけに、斎藤道三をはじめ幾多の武将の活躍の舞台になったり、城下町岐阜の繁盛ぶりは、歴史上数多くの書物により紹介されています。

この立派な土地に生を享けた先人の事蹟を顕彰し、後世に伝えることは非常に有意義なことであり、このたび、金華自治会連合会（最初は広報会）は、発会四十周年の記念事業として、校下史誌編纂の計画を立てて、四十五周年目に完成を目指して作業を進めて参りました。

その内容は、校下七十二町内個々の現在までに埋もれていた、いろいろな出来事等を掘り起こし、さらに、活字離れの傾向がある世相を考慮して、写真を多く取り入れた、所謂「目で見る金華史誌」を構

『金華史誌』 発刊にあたって

想いました。

しかし、本の編纂には全くの未経験者たちが始めた仕事であるため、最初は何から着手したらいいのか、

暗中模索の日々を過ごしました。編纂事業が思うように進捗しないため、一種のいらだちさえ感じるようになり、大変なことに着手してしまつたと、悩むことも多々ありました。

しかし、何回かの編集会議を重ねるごとに気持ちも落ち着き、多くの資料や原稿が校下の皆様から寄せられたことから、史誌編纂のめどもつき始めました。そんな状況の中で、前金華小学校長・加納宏幸先生には顧問をお願いし、先生の永年にわたるご経験から数々のご示唆を受け、ここによりやく発刊の運びになりました。

全くズブの素人であった私たちが、何とか発刊までこぎつけられましたのも、スタッフの皆様の励ましや校下各位の各方面に亘る絶大なご協力の賜物と、厚くお礼申し上げます。皆様方にご熟読を願えれば幸いに存じます。



祝辞

このたび、地域の人々の手によって、待望の「金華史誌」が発刊されますことは、誠に御同慶にたえません。

私は、この企画、編集、執筆等にあたられました関係各位の御熱意、御努力に対し心から敬意を表するものであります。

清流長良川と緑したたる金華山を近くに持つ山紫水明、風光明媚な環境、心豊かな教育環境に恵まれたこの金華は、幾多のすぐれた文化人や、経済人を輩出してきました。

また、この永い歴史の中には、風雪あり、戦争あり、経済界の変動と厳しい時代もありましたが、これを乗り越えて来られたのも、この金華の持つすばらしい自然環境と地域住民の方々の並々ならぬ努力の賜であると考えております。

近年、各地でふるさとの正しい理解と祖先の労苦を忍び、ふるさとを見直そうというふるさと学習が

岐阜市長

蒔田 浩

展開されておりますが、地域の人々の協力と熱意を結集し金華の歴史、民俗、風習、さら

には人々の貴重な体験、教訓等あら

ゆる分野についての事柄が網羅された「金華史誌」

の刊行は、誠に意義深いものがあり、私は、これが地域の今後の発展の一助となるものと確信するものであります。

ここに、本誌がより多くの人々に活用されることを願うと共に、この金華地域が豊かな歴史と自然のなかで益々の発展を遂げられることを心から祈念し、発刊にあたってのお祝いのことばにいたします。



監修のいよば

昭和六十三年、私が岐阜県の歴史資料館長から金華小学校へ着任して間もなく、校下の連合自治会の役員様方から、金華自治会連合会四十周年の記念事業として「校下史誌」を編纂したい、というご意向をうかがいました。ちょうど私が住んでいる鷺山が、岐阜市合併五十周年記念に『鷺山史誌』を発刊した直後であり、私も地元住民として編纂に携わった関係上、この事業が金華校下にとつて非常に有意義なことだと思つて、満腔の賛意を著した次第です。

しかし、校務に終わられて十分なお手伝いもできません。数年が経過しました。その間、自治会連合会長様をはじめ、役員様方は血のにじむような努力を続けてこられました。ある会員様は、校下に何か催し物があれば、必ずカメラを下げてその状況を写真に治められ、写真ブックは十数冊にものほりました。また、他の役員様も旧家を訪ねられ、土蔵の中に眠っていた未公開の貴重な資料をかず多く発見され、それらの蓄積は書棚いっぱいになりました。これらの努力を私は傍観するのみで、時々質問にお答えする程度しかできませんでした。

その時いつも役員様方に私が言っていたことは、「退職しましたら、本格的にお手伝いしましょう」の一語でしたが、退職後の第二の仕事は『関市史誌』の編纂であり、とても『金華史誌』に専念できるような状態ではありませんでした。万止むを得ず、そ

監修のことば

の由を会長様や役員様方に申し上げた所、心よくご了解頂き、「できる範囲内で結構です。私たちでできるだけ頑張りますので、大局的な立場からご支援をお願いします」という温かいお言葉を頂戴しました。

しかし、度々の編集に関する会議は、できるだけ私の日程に合わせていただけだったので、夜の会には殆ど出席でき、史誌の編纂状況が手に取るように分かってきました。そういう中で、従来の『岐阜市史』をはじめ、金華校下に関する出版物からの引用はできるだけ省略し、新しく発掘された資料を数多く収載し、投稿原稿もそのまま活用できるように努めました。その結果、小林金華自治会連合会長の序にあるような、「目で見る金華史誌」の体裁になったのです。

私は、これからの地域史作成の行方として、その地に住む人たちが精一杯努力して作られた史誌の中には、学問的な面は乏しくても、地域住民の願いが込められており、地域の活性化・町づくりに寄与するものではなからうかと考えています。

ともあれ、編纂事業には素人の手による『金華史誌』ではあります。珠玉の部分も多くあり、校下の皆様や他地域の方々に、その意のある所をおくみ取り頂ければ有り難いと存じます。

前金華小学校校長

加納 宏幸

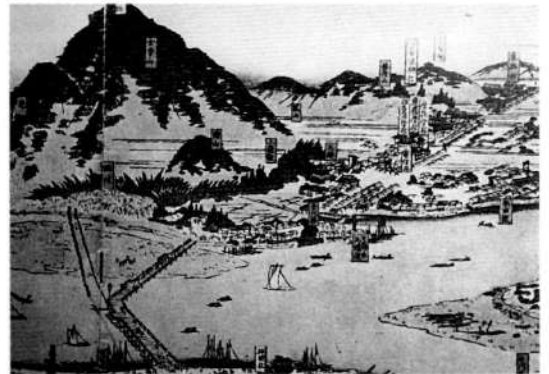


岐阜市発祥の地由来

岐阜市は明治二十二年（一八八九）七月一日に、県下で唯一の市として市制発足したと告示された。その根幹をなす地域の範囲は、旧岐阜町である。

岐阜町とは、米屋町・桜町・万力町・白木町・常盤町・笹土居町・扇町・松屋町・愛宕町・末広町・靱屋町・大和町・中竹屋町・釜石町（現本町三丁目）・布屋町・本町・加和屋町・魚屋町・上新町・久屋町・上竹屋町・中新町・蜂屋町・大工町・珠城町（現矢島町一・上）・間之町・加茂町（現矢島町一・中）・相生町（現矢島町一・下）・榊町（現伊奈波通二・三松屋町四ツ辻あたり）・矢島町・栄町・木造町・堀江町・若松町・上ヶ門町（現本町七丁目）・七曲町（現本町六丁目）・車道（現本町五丁目）・鍛冶屋町（現本町四丁目）・下新町・下大桑町・中大桑町・上大久和町・西材木町・東材木町・北今町・上今町・中今町・下今町・達目洞・伊奈波神社境内の五十一町内を指す。そして岐阜町をとりまく今泉村・小熊村・富茂登村（明治八年一八七五古屋敷新田・中川原新田合併）・稲束村（明治八年忠節村・明屋敷村合併）・上加納村の一部（町邸金園西

岐阜市発祥の地由来



邸高岩柳ヶ瀬と神室のうち金神社裏作道以東及び長住町のうち鉄道路線以北を指した）

戸数五・一五十戸 人口二五・七五十人。明治二十二年十月二十五日、市役所を今泉西野町開設。明治二十四年濃尾大震災にて倒壊。小熊の願正坊を仮庁舎とし明治二十七年白木町新庁舎に移転する。『ぎふ市制一〇〇年記念誌より』。故に岐阜市の歴史は金華校下の歴史である。

金華山の植物

五月の初め、金華山は淡黄色のツブラジイの花で色どられます。紐状の強い香りのある花をつけます。シイの林は丸く盛り上がった樹冠が重なり合っています。秋、小さな丸い実を付けることから、ツブラ（丸い）ジイと呼ばれます。

金華山は現在国有林で営林署が管理していますが、



ツブラジイの樹相

牧野 潔 (梶川町七)

江戸時代に幕府が天領として山林を保護してきましたので、都市にありながら照葉樹林の自然な姿を、今に残す貴重な山です。

シイやカシなどに代表される、固くて丈夫な艶のある葉を持つ照葉樹は、昔は日本の大部分に存在し、自然林を作っていました。現在では全国で限られた所にしか残っていません。

金華山の北斜面は年間を通して薄暗く、瞑想の小道には、シシラン、ヒトツバなどのシダ類が多く、ホウノキ、ヒノキなどが見られます。山麓には、樹皮が鹿の肌のようにはげるカゴノキやアカシデなどが見られ、夏には絶好の散策の道になっています。

馬の背道は急な尾根道で、アカマツやドングリの実をつけるアベマキ、コナラなどが見られます。

金華山登山道で最も代表的な道は、県の歴史資料館や営林署の前を通る大手道（七曲り）でしょう。ドライブコースにも出ることのできる堀割りまでは、なだらかで日陰の多い道で、ドングリをつけるアラカシ、ツブラジイやネジキ、モチツツジなどの樹木



シシラン (シダ類)



ヒトツバ (シダ類)



アベマキの樹皮



カゴノキの樹皮



ミツバツツジの花

金華山の植物

やコシダ、ウスノキなどが見られます。

堀割りから頂上までは道も急になり、樹皮がコルク層になっていてアベマキやコナラなどが多くなります。春、葉のない時期に淡紅色の花をつけるミツバツツジも、素晴らしいと思います。

金華山の南斜面は比較の日当たりが良く、達目洞には湿地があり、コウホネ、スイラン、シモバシラ、ワレモコウなどが見られますが、最近、開発が進み住宅や道路が山麓まで入ってきました。

金華山は日本の代表的な照葉樹林の姿を、今に残す貴重な「ふるさとの森」です。私たちの生活環境を浄化したり、生活にうるおいを与えてくれる金華山を大切に守り、積極的に生活に生かしていきたいものです。

金華山は、保安林、鳥獣特別保護区に指定されています。

①草木を折ったり、取ったりすることは禁止されています。

②ゴミやタバコの吸い殻を、捨てないようにしましょう。

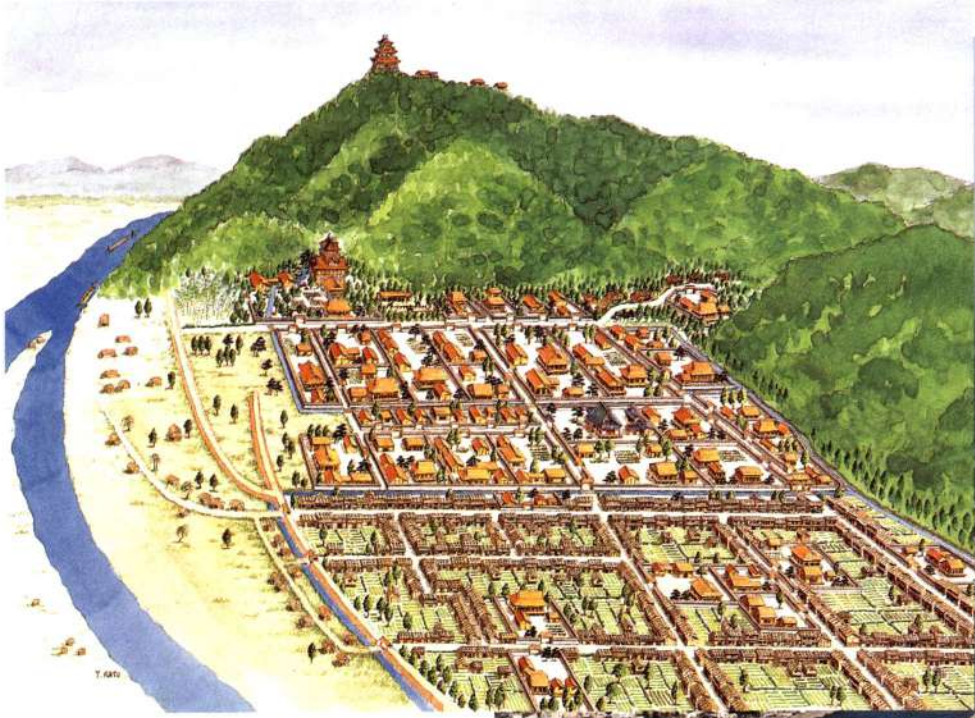
③山火事は大敵。火の取扱いには十分に気を付けましょう。

金華校下



金華校下の全景（昭和63年頃）

信長時代の岐卓城下町（復元図）

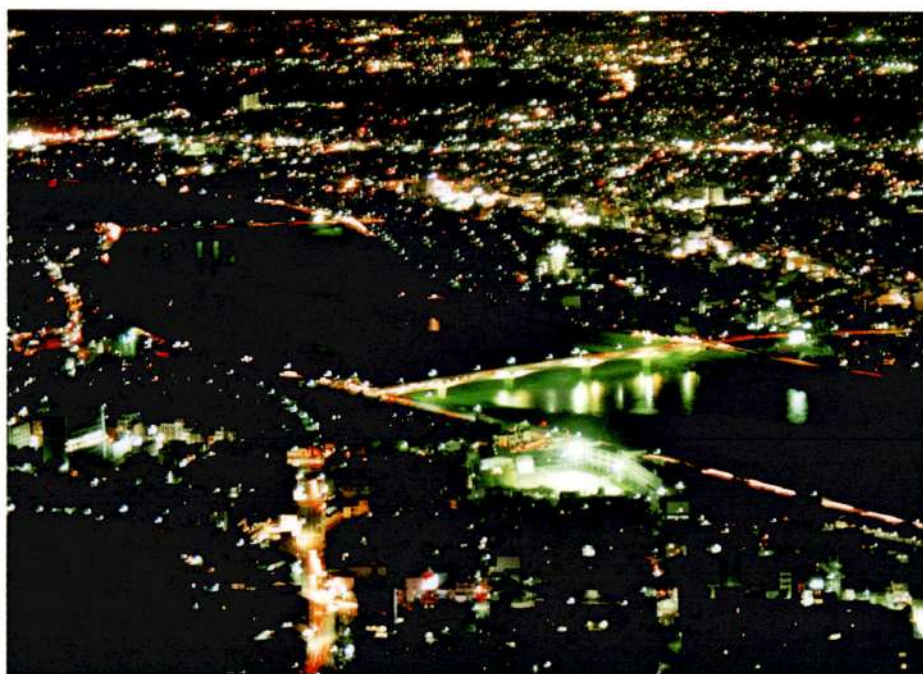


金華校下





雨後の金華山



金華校下の夜景



新装なった金華山ロープウェー（平成四年）

写真が語る金華風物史



コミュニティ水路



長良川の名物 花火





岐阜城

写真が語る金華風物史



市電



長良川鶺鴒

昭和天皇巡幸

鶺鴒の説明を受けられる昭和天皇



万松館前にて



皇族方の鶺鴒見物



目次

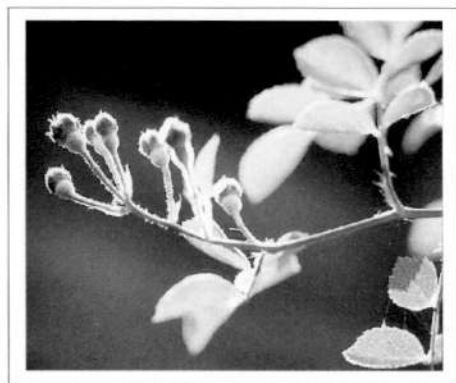
金華史誌

題字 表紙・扉	岐阜市長 蒔田浩		
「金華史誌」発刊にあたって			
金華自治会連合会会長小林嘉美	2		
祝辞	岐阜市長 蒔田浩	3	
監修のことは	前金華小学校校長 加納宏幸	4	
岐阜市発祥の地由来		5	
金華山の植物 牧野潔		6	
口絵写真 金華校下		8	
写真が語る金華風物史		10	
昭和天皇巡幸		14	
自治会			
湊・上材木・御手洗町	18	玉井町	20
元浜町	22	川畔町	24
大宮町一丁目	26	大宮町二丁目	28
木挽町	30	山口町	32
益屋町	34	上茶屋町	36
下茶屋町	38	今町一丁目	40
今町二丁目	42	松下町	44
松山町	46	夕陽ヶ丘	48
夕陽ヶ丘県営住宅	49	松ヶ枝町北組	50
松ヶ枝町南組			52
大仏町	56	今町三丁目・今町四丁目	54
東材木町	60	梶川町	58
上大久和町	64	西材木町	62
久屋町	68	中大桑・蜂屋町	66
上新町	72	魚屋町	70
大工町	76	中新町	74
下新町	80	甚衛・下大桑町	78
本町一丁目	84	布屋町	82
本町三丁目	88	本町二丁目	86
ユーハウス岐阜	91	鞠屋町	90
新桜町	94	末広町北南西組合同	92
中竹屋町	98	上竹屋町	96
間之町	101	大和町	100
伊奈波通一丁目	104	米屋町	102
万力町	108	伊奈波通二丁目	106
常盤町	112	白木町	110
栄扇町	116	松屋町	114
矢鳥町一丁目中組	120	矢鳥町一丁目上組	118
伊奈波通三丁目	123	矢鳥町一丁目下組	122
本町五丁目	126	本町四丁目	124
本町七丁目	130	本町六丁目	128
		矢鳥町二丁目	132

啓運町……………	134	木造町東組・西組……………	136
【イラスト】 金華史今昔物語……………		服部みちを……………	138
【写真】 古書……………	140	引札（古い広告）……………	142
しにせ……………	144	金華山焼……………	144
伊勢湾台風……………	145		
【地図】 金華校下図……………			
自治会連合会……………	146		
金華自治会連合会四十五年のあゆみ……………	148		
平成四年度 行事計画……………	154		
伊奈波神社 山車金華校下奉曳当番表……………	155		
金華校下歴代各町広報自治会会長名……………	156		
金華校下歴代広報自治会連合会役員名……………	174		
岐阜市金華自治会連合会規約……………	181		
各種団体・教育機関……………			
金華公民館……………	184		
岐阜中地区交通安全協会金華支部……………	188		
岐阜市金華校下消防の沿革……………	190		
金華水防団あゆみ……………	195		
金華婦人会……………	197		
岐阜市社会福祉協議会金華支部……………	202		
金華民生児童委員協議会……………	204		
金華小学校とPTA……………	205		
伊奈波中学校とPTA……………	208		
金華青少年育成市民会議……………	211		
金華子ども会育成連合会……………	213		

金華クラブスポーツ少年団……………	216
金華老人クラブ連合会……………	217
金華体育振興会……………	219
金華母子福祉会……………	220
赤十字奉仕団金華分団……………	221
財団法人岐阜県身体障害者福祉協会金華支部……………	223
金華児童愛護会……………	224
金華のまちづくり協議会……………	225
名所・旧跡……………	
【写真】 岐阜公園……………	228
岐阜城・ロープウェイ……………	232
長良橋・金華橋……………	233
コミュニティ水路……………	234
鶴飼納涼台・金華山トンネル……………	236
忠節用水……………	237
岐阜祭り・大佛フェスティバル……………	238
市内電車……………	239
伊奈波神社由緒……………	240
岐阜護国神社……………	242
権現山鐘・鏡岩水源地……………	243
年譜……………	
年譜……………	246
跋……………	248
編集委員会……………	249
編集委員会風景……………	250

自
治
会





湊町 清影車

湊・上材木・御手洗町

●湊町

長良川の左岸に位置し、もとは富茂登（ふもと）村のうち字湊町・字御手洗の一部。湊町の由来は、江戸時代から長良川の河港であったことによる。

岐阜町の玄関口として栄え、紙・材木・炭などの問屋が多く建ち並んでいたが、長良橋架橋や東海道線、高山本線の開通等により、商業の中心は岐阜市の南部に移った。

鶉飼の中心地で、松尾芭蕉の「十八楼記」で有名な十八楼址がある。昭和二九年、新しい長良橋の建設により、当町は道路下になった。

戦争を免れたため、往時の家並や白壁の倉が現存し、多くの旅館街がある。

●御手洗町

町名の由来は、地内金華山の麓に伊奈波神社参拝の時に手を清めた御手洗池があることによる。

地内の大半が岐阜北公園に入り、近年、岐阜市との友好提携都市・中国の杭州市に因んで、杭州門やミニ西湖が造られた。

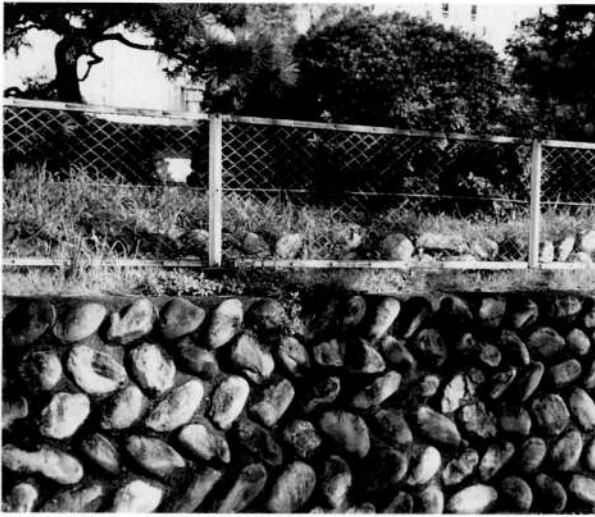
●上材木町

町名の由来は、昔長良川の筏流しによる材木業者が多くいたことによる。

鉄道の発達により、材木業は岐阜市南部に移転し、現在は長良川旅館街の一角をなしている。

●富茂登小学校跡の石垣

金華小学校の前身のその又前身であった富茂登小学校は、現在の湊町東組（長良橋より上流側）にあった。



湊町 富茂登小学校跡の石垣 平成4年10月に取り壊して現在はなし

湊・上材木・御手洗町●自治会



湊町 旧岐阜城と前の長良橋

現在は民家・旅館・県知事公舎・NTT会館などが立ち並んで往時の面影はなくなってしまったが、周囲の石垣だけは残っている。

この石垣で昔の姿を残すのは、NTT会館より北へ長良川迄の間に建っている白壁民家の石積みみだけである。

平成四年四月現在の世帯数九〇。

●長良川水運の基地

江戸時代、当町筋は町の中心として交通（長良川の水利）の要所にあり、川を上下する舟ならびに筏等の通行料、また木造の長良橋の通行料徴収のため、水奉行が設置されていたという。

その昔、厚見郡富茂登村中川原と呼ばれ、その後川原町通りとなり、川の流れに沿って上の方より湊町・玉井町・元浜町と区分された。

町筋は、紙・木材の集積地として発展し、それぞれの問屋（卸業）が集中し、銀行（十六銀行・富茂登支店）や郵便局が開設されていた。また、市議会議員も多数輩出していた。（大正一〇年、昭和初期頃）

戦後、元浜町は世帯数の関係から一部が川畔町として独立し、現在は四町内・四自治会となった。

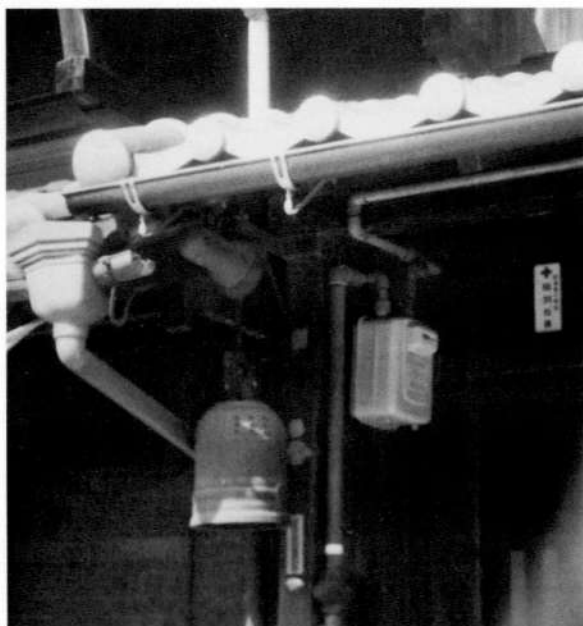
●玉井町のからくり山車

湊町・玉井町・元浜町と三町内の時代に、山車を各町内が一台ずつ保有し、祭礼には町毎に奉納祝をした。また、玉井町の山車はからくり山車で、謡曲

玉井町



玉井町の町並み



玉井町の非常時を知らせる鐘

「玉ノ井」を奉納した。

濃尾震災により各町内の山車は消失したが、玉井町の人形と衣装類は難を逃れて保存され、後に三町内協議の上、残されていた人形・衣装類を主体に新しく山車が建造され、山車の呼び名は「清影車」と決定され、毎年三町内交替で奉納祝をしていた。

戦後、三町内交替で二回ほど奉納祝を挙行していたが、伊勢湾台風（昭和三四年九月二六日）による被害や人手不足のために管理面で問題があり、伊奈

波神社へ備品（人形・衣装・太鼓等）とともに寄進された。

●玉井町の風習・行事

町の行事としては毎年七月一六日に四町内交替（湊・玉井・元浜・川畔町）で伊奈波神社より神官を迎えて「川祭り」を、湊町の秋葉神社にておこなっている。

玉井町の町名の由来は不明だが、当町内は以前より観世流の謡曲をたしなむ人々が多かったところであり、謡曲の「玉ノ井」と玉井町にはなんらかの因果関係があるかもしれない。

平成四年四月現在の世帯数三〇。



玉井町の古い町並み

玉井町●自治会



美登里橋（昭和29年3月竣工）から見た元浜町の町並み

元浜町

●江戸期

江戸時代、霞、緑両橋以北をすべて河原町と称していた。元浜町、玉井町、湊町の諸街は、長良川に沿っていて水運の便が良く、舟で武儀郡武芸谷へ製紙原料を送り、郡上方面から木材が運ばれてきた。

●明治期

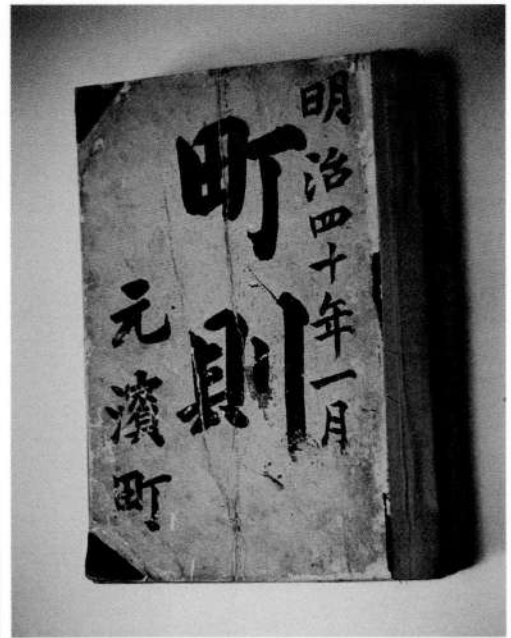
幕末から明治にかけて、河原町には和紙問屋が増加し、昭和一八年の企業整備の時には、多数の和紙問屋があった。

明治四〇年一月に作られた町則によれば、世帯数四七で一等から九等に分けて町費が徴収されていた。戦前には山車を有し、明治四一年四月の岐阜例大祭に当番で山車を奉曳した記録が残っている。

●昭和・平成期

当町は長良川と湊コミュニティ水路に囲まれた静かな街である。

昭和元年には三七世帯に減ったが、終戦後の昭和二年には六二世帯に増え、平成四年三月現在四五世帯である。



元浜町の町則（明治40年～現在まで）

元浜町 ● 自治会



元浜町（コミュニティ水路）

川畔町

●昭和二十四年

戦後元浜町より分離し、川畔町の名称で発足した。金華広報連合会発会時の川畔町初代会長は、宮崎三次郎氏で、二八年、大橋金利氏、三三年、八田孝氏が務め、以後は一年交替で会長を務めた。

●昭和三十四年

三四年当時、一班一三、二班二一の合計二四世帯であった。

伊勢湾台風をはじめ、三五年、三六年と三年連続して台風水害に襲われ、全世帯床下上浸水したが、町内が一致協力して復興に当たった。

●昭和四三年

四月、岐阜祭礼に川畔町子供会本神輿を出し、地区全域から伊奈波神社そして柏森神社、柳ヶ瀬などを担ぎ歩いた。

●昭和五一年

六月中旬の梅雨時、異常な長良川の出水により、幼児が長良川への取付道路（川畔町地内）坂道の上より、ベビーカーごと転落して流された。金華水防



川畔町として子供が一番多かった頃に繰り出した祭りみこし
(昭和43年の岐阜祭り)



川畔町 古地図

川畔町●自治会

団に救助捜索を要請し、一五時頃から翌朝一〇時頃まで夜を徹して総動員で捜索したが、幼児を発見できなかったためやむなく解散した。

この際には町内婦人会が河原にて炊出し活動を行った。後日、幼児は川下の四ツ谷下で発見された。後に、このような事故の再発を防止するため、防護柵が作られた。

●昭和五八年

四月、岐阜祭礼で山車清影車を金華校下一地区湊・玉井・元浜・川畔の四町内で奉曳する。川畔町の全世帯が参加した。各町にビデオ一卷と写真ブックを残す。

平成四年四月現在の世帯数は九。



金華山頂上から見た大宮町1丁目全景

大宮町一丁目

● 稲葉山城の変遷と共に

岐阜公園は大宮町地内であり、公園の歴史を見過
ごして大宮町史を語ることは出来ない。

当町は、その昔、「此地史実に見えたるは白河帝
の承暦三年（一〇八〇）源頼光の孫美濃守国房稲葉
山に城を築きたる時代よりにして当時井ノ口と称す
る寂々たる一僻地に過ぎざりしが如し：」と古文書
にあるように、鬱蒼とした藪と疎林の荒涼とした地
であった。鎌倉、室町と戦国時代にかけて稲葉山城
は幾多の変遷を経たが、家康により遂に慶長六年
（一六〇一）廃城となる。

その後、明治四三年五月一五日に模擬城が落成し
たが、昭和一八年二月一七日に消失。昭和三二年七
月二五日、三層四階建ての今の岐阜城が完成した。

● 岐阜公園の誕生

明治初期、稲葉山山麓は平安期と同様、人家はま
ばらであった。明治六年一月に太政官布達方一六号
が発布されたのを機に、小川汲三郎、近藤伊三郎
（岐阜の三紳士）の両名他がこの地域の公園化構想

を計画した。

同七年一〇月、皇太神宮分霊鎮守・金刀比羅社・秋葉神社を合祀し、皇祖天照大神を奉る神々の核たる神導教場中教院等を山麓（現板垣退助銅像のある地と思われる）に建設した。

明治一五年頃になると山岳信仰の由緒ある地となり、人の往来も活発で景観にも勝れており、公園の指定条件を満たしていることから、公園化の好機到来として工事に着手した。岐組（消防団）の協力で同二年一月一日に丸山公園として開園し、同二年八月一日に岐阜市に移管し「岐阜公園」と改称された。

その後、管理が放置されて狐狸の巣となる時期もあったが、大正期に入って本格的再整備が行われ、今や岐阜公園は年間三〇〇万人の人出で賑わっている。ちなみに同布告による主な公園には、偕楽園、後楽園、兼六園、東京上野公園等がある。

中教院は神仏教導職の廃止で明治一七年九月二〇日に廃止されたが、神官建部志那雄（元大宮町民）等が私財を投じて再興し、大正七年には志那雄の嗣子松三郎がこれ等を市に提供した。

大宮町一丁目●自治会



板垣退助の銅像（大正7年建立、昭和25年4月現在地へ）

●大宮町に改称

明治三二年七月一日の市制施行で、富茂登村字裏町は大宮町と改称された。当時山から来る谷水が南側の家並みの裏を細流となって通っており、流水へ「あひる」を放し飼いにし、夏は縁台を張り出し納涼したという。

平成四年四月現在の世帯数は四〇。

当町は二地区二班からなり、岐阜公園正面入口の左右、向い側に軒並二三軒、アパート二棟、三二世帯を有した町である。隣りは大宮町一丁目、木挽町、益屋町、松ヶ枝町、大佛町と五町内に接し、人情に富んだ町である。町内の中には一般に良く知られていない名和昆虫所と万松館そして歴史博物館等がある。

【名和昆虫博物館】

明治二九年（一八九六）京町にて創立された研究所を、当地に明治三七年（一九〇四）に移転されたもの。以来世界的な昆虫のメッカとして知られ、見学に訪れる人も多い。現在の所長は四代目。建物の一棟は明治四〇年（一九〇七）に建築された赤レンガ造りの欧風様式の建物として、近年市の重要文化財に指定された。

【歴史博物館】

昭和六〇年（一九八五）に開館され、市の企画によって豊富な催事が行われている。岐阜の歴史と文化に触れられる展示類がある。

大宮町二丁目



大宮町2丁目の町並みとシンボル・歴史博物館

【万松館】

「古く市制施行頃、稲葉山麓に沿って、数万の松樹を栽えて風致最も幽玄なる庭を有し、官民の饗宴を供て歴々繁栄を経て、現在万松館の名称を伝え継がれています」と『岐阜市史』に述べられている。

その他、町内の中心地に三叉路の広場があり、交通の緩和と観光面を調和させて信号機とフラワールポールが建てられている。花壇と樹木が植え込まれ、市民をはじめ来訪する人々の目を和ませる憩いの場となっている。この地下には、地震時の火災に備えて耐震貯水槽が設置され、昭和五五年一月一日に完成した。

平成四年四月現在の世帯数は三三一。



大宮町2丁目の町並み（奥は大仏殿）

大宮町二丁目●自治会



名和昆虫博物館



木挽町

木挽町

●木挽職人の町

古屋敷新田村の内・南北に延びる両側町である。明暦元年（一五五五）の成立といわれ、町名の由来は、当時木挽職人が多かったことによるという。

（岐阜市史）

西に上茶屋町が平行して延び、東は金華山山際、北は岐阜町惣構堤に突当り、南は山口町に至る。享保年間（一七一六～三六）のものと推定される町絵図（徳川林政史研究所蔵）に、当町の町名がみえる。

同一〇年には八一軒の家があり、間口合計二七九間半、奥行はほとんどが一五間で、間口は三間が四六軒と一番多く、広いものでは一〇間以上の家が三軒あった。（間口帳・徳川林政史研究所蔵）明和五年（一七六八）の大火で町内の全戸が類焼している。（増補岐阜志略）

平成四年四月現在の世帯数は五六。



木挽町 奈良ドリームランド

木挽町●自治会



岐阜祭り 第2.3地区安宅車奉曳



●金華山の上り口

古屋敷新田村の内、木挽町の南に続く南北の両側町である。南端は、東西の町並である山口横町に接する。同町を東に向かうと金華山への百曲口に至り、西に向かうと上大久和町に至る。

町名は百曲口に最も近く、御山（金華山）への登り口にあたることから名付けられたという。

享保年間（一七一六～三六）の作製と推定される町絵図によれば、大桑町（大久和町）から東に延びる東西の道筋に山口丁と記されており、その道筋の南側に御鯨所と寺二軒が描かれている。

寛政六年（一七九四）の町絵図では、木挽町の南に続く南北の町並が山口町で、東西の町並は山口横町とある。

『濃州徇行記』によれば、同横町には木戸があり、岐阜町方手代、地方手代、同心の屋敷や御鯨元河崎喜右衛門、河崎九兵衛屋敷があった。明和五年（一七六八）の大火で町内の全戸を類焼した。

平成四年四月現在の世帯数は一六。

山口町



山口町の町並み



白壁の土蔵とレンガ造りの建物（濃飛倉庫跡）

山口町●自治会



七夕まつり（山口町子供会 昭和54年）



白壁の土蔵が残る益屋町の町並み（北側）

益屋町

● 中世から昭和初期まで

益屋町は歴史の古い町内である。昔は、古屋敷新田村の内にあつて、明治初期までは山口横丁と呼ばれており、東西約四〇〇メートルの街筋であった。金華山の百曲口に連なっていることから、この町名がついたという。

町内にある覚林寺は元和元年（一六一五）に建立されたもので、当時は付近に五軒の民家があつたにすぎなかつた。この覚林寺と同じ時期に「御鯨所」が設けられ、徳川家をはじめ、各地へ鮎鮓を送るようになった。なお、この御鯨所の河崎家は、明治時代に大阪にて商売で財をなし、昭和五年（一九三〇）頃に、下茶屋町の南から大仏町に至る約二〇〇メートルを道路用地として市に寄付された。それより南の部分で常在寺が同様に寄付されたことにより、下茶屋町から梶川町に通じる道路ができあがり、人々は感謝を込めて「新道」と呼ぶようになった。

● 強制疎開

太平洋戦争末期、民家を強制的に打ち壊して空間

を拡げることによって、戦火による延焼をくい止めるための、強制疎開が全国の都市で行われるようになり、当町でも、昭和二〇年（一九四五）八月一日に南側の主家を取り壊された。軍部の命令とはいえ、佐藤家や河島家などの立派な屋敷が無残にも引き倒されていったのは、かえすがえすも惜しまれてならない。これにより、道路巾は倍となって現在の広さとなった。

●戦後から現在

昭和四〇年代から五〇年代にかけて、市による道路整備が進み、町内住民の協力によって、当町も立派な町並みとなった。現在、岐阜市は当町一帯の近代化の整備を進めており、新しい近代的な道路と昔の面影を残す家並みを上手に調和させた町並みになるものと期待が寄せられている。

平成四年四月現在の世帯数は三八。

●秋葉神社

町内にある秋葉神社は、明治時代に河崎家によって寄進されたもので、町内の防火防災の守護神として大切にされている。一棟の木造瓦葺きで、中に神棚と後部に倉庫を備えている。

益屋町●自治会



益屋町の町並み（南側）

●救世観音

町内後藤家の一遇にあり、寛政一〇年（二七九八）に造られたと言われている。高さ約四〇センチの御影石に彫られた由緒ある観音様で、昭和一八年（一九四三）に当町へ引っ越してこられ、世界平和と人類の幸福を成就して下さる観音様として信仰を集めている。

●町の沿革

明暦元年（一六五五）に古屋敷新田村より成立したといわれ、南北に延びる両側町。西に今町通り、東に木挽町が並行して延び、南は下茶屋町に至る。北端は茶屋口と呼ばれ、岐阜町惣構堤を越えると中原新田村となる。

寛政六年（一七九四）の町絵図に当町の町名があり、惣構堤南側から東に延びて木挽町に至る横道が描かれている。貞享三年（一六八六）の大火では町内全戸を類焼した。

享保一〇年（一七二五）には、上・下を併せた茶屋町に五六軒の屋敷があり、間口合計二二九間余りで一軒平均四間余であった。間口は二間から二間五尺の家が一二軒、三間から三間四尺が二七軒。奥行は多くの家が一四間四尺で、最も広いのは中島茂庵の屋敷地で、間口三二間、奥行一五間あった。その後、明和五年（一七六八）の大火、安永六年（一七七七）の下茶屋町からの出火した火事により、当町全部が焼失した。

上茶屋町



上茶屋町の町並み



上茶屋町の町並み

当町には女郎屋があり、明和六年（一七六九）に近隣町民との間で騒動が起こったが、北方代官所が裁許を下している。

敗戦直前に、数軒の間引疎開があったが、幸い戦火を免れ、現在三〇軒の昔通りの町並で、住民の方々も昔から住みついている人達であり、平穏な住

上茶屋町●自治会



上茶屋町の秋葉神社

みよい町内である。

●秋葉神社

特筆すべきものは、町内の北端にあって、町内守護の神である秋葉神社である。岐阜市でも数少ない格式ある社とのことで、境内もある立派な神殿にご神体を祀りしてある。町民が毎日御神酒をお供えし、又町内婦人会で境内、ご神殿を毎月清掃を行っている。さらに修繕管理費として予算を計上し、管理に当たっている。

平成四年四月現在の世帯数は三三三。



下茶屋町の町並み

下茶屋町

●町の沿革

明暦元年（一六五五）の成立。上茶屋の南側に続く両側の町並みである。

平成四年四月現在の世帯数は三一。

●町火消「三堅組」

旧富茂登村、古屋敷新田、現在の上茶屋町・下茶屋町・木挽町・山口町・益屋町の地区に、天明七年（一七八七）組織された、庶民の自治消防組織である町火消「三堅組」について、結成当時よりの古文書が保存されている。それには江戸時代の町火消の組織活動状況などが刻明に記載されており、当時の町火消を物語る文献として岐阜消防史上最古の貴重な記録である。

また、三堅組のシンボルとも言うべき「三堅組銅鑼」は、大阪城所在のものであったが、大阪夏の陣に使用され、その際徳川方の手に渡った戦利品で、京都にて保管されていたものを三堅組が譲り受けたと伝えられる由緒ある記念物である。（岐阜市歴史博物館に保管中）



下茶屋町の町並み

下茶屋町●自治会



下茶屋町子供みこし

昭和三年（一九二八）三月一日、五町内（上茶屋町・下茶屋町・木挽町・山口町・益屋町）代表者並びに旧庄屋松橋氏、町総代会代表深尾氏が相集い、覚書を作成して永久保存することになり、現在に至っている。

●戦前までの町の沿革

当町は戦国時代の英雄・斎藤道三と織田信長が居城を構えた時代に誕生した。岐阜町の北東端にあり、南北に延びる両側町で、北方に長良川が南西に流れる町である。岐阜町四四町の一つで、寛政六年（一七九四）の町絵図には今町上之切と記されている。

又『岐阜由緒書』によれば、上今町と記され、現在町内在住の杉山氏宅に保存されている古い大福帳に、上今町と記載されているものがあるという。

昔から奥（現在の関・美濃市）とを結ぶ交通の手段として長良川を利用し、船筏をもって美濃和紙・木材等を運び、帰途には、帆をかけて和紙原料及生活用品等を運んだ。

従って昭和初期までは商家が多く、当時の商家を上より順に紹介すると、坂井医院・豊田古着店・井上菓子店・木村紙店・栗本鍛冶屋・竹勘大沢米店・杉山商店・大野紙店・稲葉足袋店・篠田洋雑貨店・鷺見だんご屋・山田提灯、高橋茶碗店・栗本ローソ

今町一丁目



今町1丁目の町並み

ク店・海老名質店等で、軒先には馬車を結ぶ石が置かれてあり、馬車がよく通っていた。

当時の町内には子供も多く、遊び場所が近くにあり、霞橋も木橋で、下を流れる忠節用水は長良川の増水時には遊船の退避場所に利用されていた。土盛りの堤には桜・楓等が連なり、四季それぞれに風情があった。

●町の高齢化が進む

市の中心部が南に移るに従って町も変化し、現在は当時の繁栄の面影もなく、住人も減少し、高齢化が進んで町全員の四〇%近くまで達したが、最近は親子二世帯同居が徐々に増え、活気が出て来たように思われる。

平成四年四月現在の世帯数は一九。

今町一丁目●自治会



今町1丁目南より北を望む



今町2丁目の町並み

今町二丁目

●活気があった昭和初期

昭和初期、今町二丁目には三三戸約一六〇名の人
が住み、三三戸のうち八戸が紙を商う店であった。
紙問屋の他に紙の原材料店・提灯屋・薬屋・下駄
屋・染料店等、多くの商店が軒を並べる賑やかな町
であった。

町の中を荷物を運ぶ馬車が何台も往来し、今町四
丁目の仕出し屋「かわらや」の前で馬車を止め、馬
車挽達が昼食をして賑ったものである。

●町の中の過疎

今では戸数二五戸、八七名の住む町となり、商店
も五軒程となってしまった。子供に至っては、わず
か四名となり、反対に老人（六五才以上）は二五名
と、全体の三割近い老人と過疎の町になった。

戦後昭和三十一年の岐阜祭に子供御輿を出した時に
は、町内だけで約三〇名の子供達が御輿をかついだ
ものである。今では小学生三名、幼児一名という、
全く町の中の過疎の町になってしまった。

平成四年四月現在の世帯数は二六。



今町2丁目の町並み

今町二丁目●自治会



昭和30年冬の大雪



昭和31年4月祭りみこし

●秋葉神社社殿の移設

個人の地内にあった社殿が、地主の申し入れで移設の必要が生じ、当時の広報会長早矢末吉氏（故人）の尽力により、市・県・建設省の各関係筋への陳情が受理され、現在の排水路上に設置が認可され現在に至っている。（一般には、なかなか認可されないものらしい）

また、順廻りになった山車奉曳に、第四地区町内として参加している。

●営林署官舎跡地利用問題

昭和五八年（一九八三）五月、営林署官舎跡地に一般駐車場新設計画が持ち上がったが、地域各町内として左記の理由で反対を申し入れた結果、住民の要望条件を受け入れた上、市職員専用と決った。

反対理由

①現在でも大雨の際、山の水が一度に溢れ、松下、松ヶ枝、梶川、各町内に被害があり、まだその根本的対策が進んでいない現在、アスファルトで整地した場合、一層の被害が出る恐れがある。

松下町



明治末期の松下町



第4地区 山車奉曳

松下町●自治会

② 不特定車輛の出入りにより、管理面の不備に伴う山林火災の恐れが多分にある。

③ 一般車の駐車場とした場合、従来の狭い道路に直角に駐車しなければならず、その上、急傾斜の道での車の出入りが頻繁になり、事故多発の恐れが多分にある。

④ 風致地区としての自然が阻外され、更に周辺住民は、車の騒音・排気ガス等の被害を受ける。(以上当時のパンフレットより抜粋)

● 岐阜公園内車輛通行計画に反対

金華山トンネル開通に伴う岐阜公園内の車輛通行計画に対し、地域ぐるみで反対。新聞に大々的に報道される程になり取止めとなる。

● 周辺整備計画について

歴史博物館建設に伴う周辺整備計画の内、公園南側駐車場を廃止し遊歩道にする計画は現在以上の交通混乱を引き起こすことが火を見るより明らかであるため、中止を申し入れて従来のままと決る。又、博物館建設に伴うテレビ電波障害に対し、市側と協議の結果、関係町内と対策・運営組合を結成して現在に至る。

平成四年四月現在の世帯数は三五。



松山町の町並み

松山町

松山町はもとは、藤右衛門洞の一部であったが、宅地化が進んだため、昭和六年（一九三一）字名を改正したものである。金華山の七曲り登山道の登り口にあるドライブウェイの入口に位置している。

昭和十三年（一九五八）四月に、松山町町内会八世帯の内より一四世帯を分離して夕陽ヶ丘町内会を分町した。昭和四〇年（一九六五）四月の世帯数は八一戸で人口は三〇二人であった。

平成四年四月現在の世帯数は五六。

●秋葉神社社殿の移設

社殿が個人の敷地内にあり、地主より移設の申し入れがあり、昭和六〇年（一九八五）一二月に現在地に移設した。

●岐阜縫製加工協同組合

昭和三十三年（一九五八）に創立され、事務所を昭和四一年（一九六六）一月二二日に当地に移設され、現在に至っている。

●防火用水の設置

町内付近及び山林火災に備えて、当時の町内会長

長屋松五郎氏が防火用水の必要性を重んじ、市へ設置方陳情を行った結果、昭和三八年（一九六三）七月竣工。当時の市長松尾吾策氏自筆の防火用水と記したものが完成し、現在に至る。



松山町の回状箱



金華山登山口

松山町 ● 自治会

当町は金華山七曲登山道の中間に位置し、自然景観に恵まれている。

●世帯数

昭和四五年（一九七〇）には三〇世帯あったが、次第に減少傾向をたどって、平成四年四月現在、一三世帯となっている。

●主な建物

○岐阜県歴史資料館

昭和五二年（一九七七）

四月 県警察学校跡地に開館。県の歴史・行政及び民俗に関する資料を収集保存、研究し、県民に利用されている。

○岐阜営林署

以前は市内青柳町にあったが、昭和六二年（一九八七）一月に当町へ新築移転した。



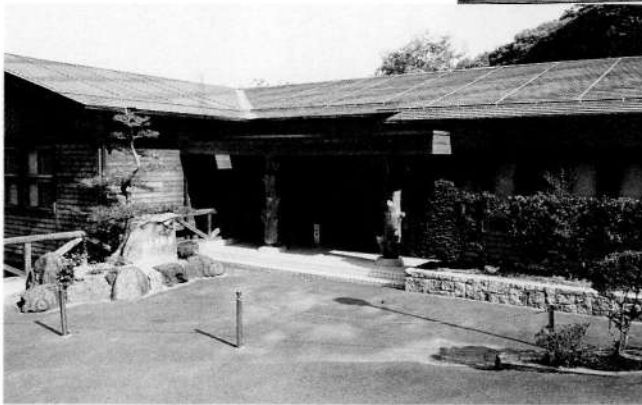
営林署官舎

夕陽ヶ丘

夕陽ヶ丘●自治会



岐阜県歴史資料館



営林署（夕陽ヶ丘）



夕陽ヶ丘県営住宅

夕陽ヶ丘県営住宅●自治会

夕陽ヶ丘県営住宅



黙山前の広場

現在は夕陽ヶ丘県営住宅が建築されている

当町は金華山七曲登山道の登り口にあり、警察学校（後に県消防学校）の運動場の跡地に県営住宅が建設された。

平成元年四月より、単一町内として金華自治会連合会に加入した。

平成四年四月現在の世帯数は三〇。

昭和三四年（一九五九）九月二五日から二六日にかけて、伊勢湾台風により松ヶ枝町北組の全世帯が床上浸水の被害を受けた。

昭和二〇年代（一九四五～一九五四）は、戦災を受けなかったために町内会は七六世帯（二階を借用した人達も多くあった）もあったが現在では三五世帯となった。

昭和五一年（一九七六）九月の台風により、またもや全世帯床上床下浸水の被害を受けた。

町内道路は、三〇年中頃までは、西側が用水であり、道路の中心に桜の大木があつて、花見を楽しんだり、初夏にはホタルが飛ぶ静かなまちであつた。しかし三〇年中頃から、用水にふたをして道路化され、一方通行自動車道となったために、排気ガスや騒音公害が多くなってきた。

平成四年四月現在の世帯数は三五。

松ヶ枝町北組



明治末期の大仏殿裏通り（松ヶ枝町北組）



伊勢湾台風（昭和34年9月26日）の
災害大仏殿の裏通り（松ヶ枝町北組）



伊勢湾台風災害（松ヶ枝町北組）

松ヶ枝町北組●自治会



松ヶ枝町北組町並み



松ヶ枝町南組の町並み

松ヶ枝町南組

●鎌倉から江戸時代まで

松ヶ枝町は当時の町民の意思により大正末期頃に南組、北組に区分されたが、法制上では松ヶ枝町と一括されている。岐阜市の市制施行前に富茂登村の一部として存在し、町名の由来は、金華山麓一帯に手平松が自生していたことによる。松ヶ枝町の付近には、松に関する町名が多い。

当町を貫通する七曲口は、稲葉山城が金華山に鎌倉時代初期建仁元年（一二〇一）に建造されて以来の古道で、土岐氏の時代には当時の守護代永井藤右衛門の屋敷（黙山）等があり、天文三年（一五三四）斎藤道三が本格的に稲葉山城の大改築を行ったときに、東西の道筋二本（七曲口、百曲口）も井ノ口の町作りとして新設された。

織田信長の入城によってさらに道路や町が整備され、松ヶ枝町一帯も当時の武家屋敷の一部となり、工事施工のため金華山登り口道路（七曲口）より南へ山麓にいたる間は、古地図によると土取跡と記録されている。町建設のために、かなりの土砂が採取

されたために、その後池となり、江戸時代には古屋敷新田村の一部にて逐次埋立てが行われて現状となった。斎藤・織田時代の華やかな主要道路も、江戸時代には寂しい僻地であったものと想像される。

●戦時中

町内の南の山から稲荷山、藤右衛門洞（黙山）までの北面の山斜面に茂るうっそうとした自然林は、戦時下に薪不足に悩む岐阜市民のため、翼賛壮年団員と市民の奉仕により、薪補給として伐採されて丸裸の山になった。現在は次第に元に戻りつつある。終戦直前（昭和二〇年前半）米軍の空襲による火災等の被害を僅少に止どめるために、金華校下各地に建物疎開が実施された。当町の七曲口である主要道路幅の五メートルを一三メートルに拡巾するために家屋の取壊撤去が行われた。現在は何れも旧に復し、新しい建物が建っている。

岐阜空襲による羅災家族の多数を町内へ迎え、一時は一五〇世帯前後の町内となったが、現在は約六〇世帯となっている。

●戦後

金華山より流れている町内の水路は、江戸時代の古図にも記載されており、町の西側を流れる水路も

松ヶ枝町南組●自治会

古くからある。寛永一三年（一六三六）より京町校下の四ツ屋町地内から、岐阜町の南部工業用水として引水され、利用されていたが、長良川河床変更によって引水の効果が少なくなり、現状の様な金華校下を流れる忠節用水として代替工事が昭和九年（一九三四）に竣工した。

昭和三四年（一九五九）の伊勢湾台風（浸水は道路面より一、二メートル位）、第二室戸台風、九・

一二豪雨等、床上、床下浸水等の水害の被害が一部にあり、その不安を取除くことが今後の課題である。

平成四年四月現在の世帯数は五七。



松ヶ枝町南組の町並み

●今町三丁目

●かつてのメインストリート

その昔、今町は金華校下のメインストリートであった。美濃の奥から和紙が長良川まで舟で送られてきて今の川原町の湊町や元浜町で荷上げされた。川原町には紙の間屋がたくさん集まり、問屋からは馬車で今町を通過して地方へ運ばれていた。時にはあばれ馬が走り抜けていったこともあるという。

平成四年四月現在の世帯数は一五。

●今町四丁目

●商人の町

今町通りは、岐阜城の大外濠のすぐ西側にあり、早くから商人の町であったと言われている。

文政五年（一八二二）、岐阜奉行所に提出された下今町（現在の三・四丁目）宗門改帳（控）によると、当時は、家屋敷持ちの者二二世帯八四人（男三八人・女四六人）、借家の者三世帯四人（男二人・女二人）、計二五世帯八八人（男四〇人・女四八人）であり、所属宗派は、禪宗六世帯、法華宗一世帯、

今町三丁目・今町四丁目



今町3・4丁目の町並み（西側）



今町3・4丁目の町並み（東側）

今町三丁目・今町四丁目●自治会

浄土宗三世帯、浄土真宗一五世帯であった。（林文書より）
 以後、町内は昭和一五年（一九四〇）一九世帯、八二人、昭和五二年（一九七七）一七世帯六五人、平成三年（一九九二）一一世帯三一人と、世帯、人口とも減少の道をたどっている。
 平成四年四月現在の世帯数は一一。



林 春男氏宅のうだつ（明治3年10月に松屋町の渡辺基吉氏宅を購入し現在地に移築。うだつの一枚瓦は平瓦6枚分の大型瓦）



伊奈波神社祭礼で5地区にて山車奉曳
(昭和59年4月4～5日)

●町の沿革

大仏町は、正法寺大仏殿を中心に、北に一三軒、西に一四軒と、合計二七軒が、かぎ形の町並みを形成している。借家借地が多く、出入りも多小はあるが、昔から殆ど変わっていない。

大仏町

最近では子供が成長して外へ住居を移し、年寄りの二人住まい、一人住いが増えつつある。家並みは大部分の家が建替えが行われて、昔のような格子戸の家並みは見られなくなった。

昭和五十一年(一九七六)に岐阜祭協賛で山車奉曳をした頃は、まだ若い人がたくさんいて、にぎやかに山車を引くことができたものであった。それでも五六年(一九八一)には大仏町で大黒様のつくりみこしをかついで、全町あげて老いも若きもにぎやかにコンクールにも参加することができた。

昭和六三年(一九八八)から、毎年夏休みはじめの土、日曜日に「大仏フェスティバル」を行い、近隣町内合同であんどん祭り、三世帯交流、バザー盆踊り大会等を催して町の活性化に寄与している。

●正法寺・大仏

金華山の西山際にある。天和三年(一六八三)の創建。本尊の通称、籠大仏は、一一世の中惟が大釈迦牟尼仏の造頭を思い立ち、大変な努力を重ねたが完成半ばで死去。それを継承した一二世肯宗が天

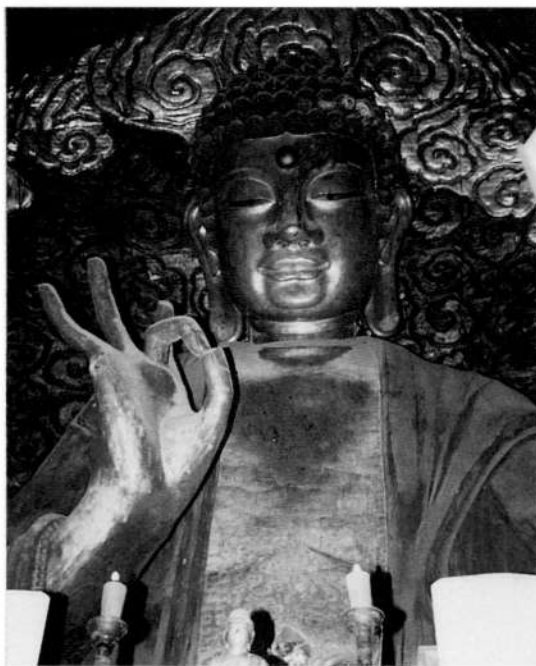


大仏町の黒様神輿（昭和56年4月4～5日）

保三年（一八三二）に完成。実に三八年の歳月がかかった。この大仏は周囲一・八メートルの大銀杏材を心柱とし、骨格を木材で組み、外部は竹材で編み、粘土で塗固め、その上に経文を張り、漆を施し、金箔で仕上げたものである。高さ一三・六三メートル、顔の長さ三・六三メートル、目の長さ六六センチ、手の長さ二・一一メートル、鼻の高さ三六センチ。県指定重要文化財である。

平成四年四月現在の世帯数は二六。

大仏町●自治会



大佛殿

梶川町

●町の沿革

梶川町の歴史を種々調べたが、確固たるものは判明しなかった。『濃州徇行記』によれば当初は「古屋敷新田村」と呼ばれていたようである。現在の大宮町・上茶屋町・木挽町・山口町・益屋町・大仏町・梶川町・松ヶ枝町・松下町・松山町・夕陽ヶ丘・小推谷・千畳敷下・大道西・鏡岩などが含まれる。その後、織田信長時代に岐阜町ができ、明治二二年（一八八九）に中河原新田村、明屋敷村、小熊村、今泉村、忠節村など五、六村が合併して岐阜市となった。

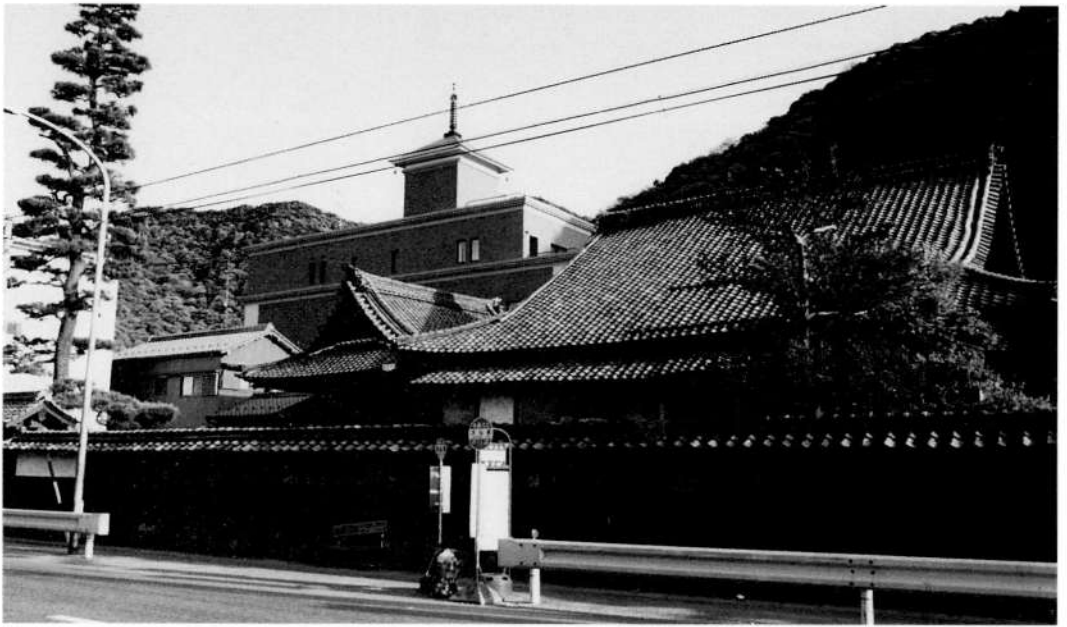
明治初期にできた富茂登村には現在の松ヶ枝町、大仏町、松山町、松下町、梶川町、大宮町、益屋、山口町等は含まれていたが、くわしい事はわからない。

●町名の由来

町名の由来について、『岐阜市史』『岐阜志略』『岐阜県の地名』『岐阜之図』等により調査したところ、「金華山七曲登山口より西へ上ヶ門町に至る



梶川町の町並み



妙照寺の白壁塙

梶川町●自治会

までの戦国時代以来の本町筋（大手通）中央付近に
加和屋町が位置し」とあり、当時まだ梶川町の地名
はなく、加和屋町より東に位置した大手門の中では
なかったかと思われる。

加和屋の始まりは、地図で見ると今の今町あたり
から西のようであった。「岐阜県の地名」によって
住所線を引くと、現在の梶川町・松ヶ枝町・松山
町・松下町・大宮町はなく、その他の町内は殆ど現
在位置と変わりなく全部引く事が出来る。したがっ
て梶川町を含むこれ等の町内は、大手門の中にあっ
て、岐阜城落城後に造られたものと推察される。

別紙織田信長時代の古絵図でも、梶川町の殆どが
妙照寺と常在寺にて占められており、当時は他に武
家屋敷が五、六軒あった程度ではないかと察せられ
る。町名の由来については、常在寺付近に梶川弥三
郎の屋敷跡があったと『岐阜志略』には記されてお
り、この人物の名前を付したのではないかと推測で
きる。

平成四年四月現在の世帯数は四四。



東材木町の町並み

東材木町

●明治以前

古文書によれば、鮎鮎等を製造する河崎家の御鮎所と御塩蔵があったが、町内のために火事の心配があるとして、古屋敷新田村の河崎家の屋敷内に移された。明暦二年（一六五六）岐阜町の延米会所があったとも言う。岐阜町の北口の一つである。織田信長の岐阜町建設によってできた町である。（天正年間・一五七三〜九二）

●明治以後

町の北部を東西に走る長良川の堤防は、現在のよ
うな幅広ではなく、俗に言う草の茂った「堤」で、
小幅であった。町の見取図に見る蘇原銀行はその後
取り付けで倒産し、その跡地に十六銀行材木町支店
が営業されて現在に至っている。

当町は川原通り（元浜、玉井、湊）より下り、大
桑、久屋へ行く中間にあり、岐阜の商業界の集まっ
た所であった。美濃紙を中心とした紙屋、紙原料屋、
紙加工製品等が、電車の通る八間道路を挟んで軒
を連ねていた。

町の北部で小川にかかる橋（美登里橋）の袂に「火の見櫓」があった。これは立派な鉄骨組で、先端には半鐘があり、火災等を住民に伝えた。

●馬糞交番

火の見櫓のそばに「馬糞交番」と呼ばれる交番があった。どうしてこんな呼ばれ方をしたかというところの辺は道が急坂になっており、材木や紙、雑貨を積んだ荷馬車がこの坂道を登る時、馬が踏んばって糞をしたために、交番所の前が馬糞だらけになっていたからという。この坂道は馬車にとっては大変難儀な所であり、重量物を積んだ車を曳く馬が足を滑らせて転倒するようなこともしばしばあったし、坂の途中では、後戻りしないように後輪に滑べり止めなどをしたという。

主な商家には、油紙製造の合羽屋、（ユトン畳の上に敷く和紙を貼り合わせ柿シブを塗り、さらに薄い漆を塗った敷物）、傘の頭甲紙等の紙加工業が多かった。変わったところでは電線工場があった。さらに料理屋もあり、鰻を焼くいい匂いが漂ったという。

平成四年四月現在の世帯数は三八。

東材木町●自治会

東材木町の町並み



東材木町の町並み

●長良川水運の拠点

町名の示す通り、古くから材木の商いが盛んに行われた所から付けられた町である。

奥美濃の山々で切り出した原木を筏に組んで、長良川の水利を活用してここ西材木町まで運び、陸揚げした。陸揚げのために工夫をこらし（古く織田信忠のお墨付き「舟木座」を得たと言われる）、西材木町北側を走る堤防の基部をくりぬいて水門を拵えて陸揚げし、堤防内部側堤に隣接する製材工場に運びこんだもので、現在では想像も及ばぬ事が行われていたのであるが、効率のよい水利を使った訳で、領けないこともない。

原木の陸揚げのために造った「水門」も利用度が逐次減少し、未使用のまま大戦中頃まで残っていたが、輸送機関の革新と共に、水害につながりかねないとして、新しく大補修強化された。これによって、今日まで大事に至らず、ことなきを得ている。

後の伊勢湾台風など三年続きの大水害にも、長良川の異常増水による地下溢水のため、「連通管」の

西材木町



第6地区山車奉曳（昭和54年4月）西材木町の皆さん

形で堤内にある西材木町は浸水で大騒ぎしたことがあった事はまだ記憶に新しいところである。

●町の沿革

織田信長による岐阜町建設のとき、尾張国清須の



西材木町の町並み

西材木町の町並み



西材木町●自治会

材木商人が移住して当町が成立した。今の東西材木町を併せて材木町と称されたという。古文書によると、岐阜町四四町の一つで「承応絵図」にその名が見える。

当時の西材木町の屋敷地は、西側一・二間、東側六・二間余りで家数三九。丹羽氏は町代、岐阜町の六人役、寛政当時は長良川役所付の椋問屋を勤めた。享保（一七一六〜三六）の頃、材木屋新兵衛は郡上地方の材木を扱い、西材木町で木材を陸揚げして製材した。この他に、薪、紙、紺屋、蕎麦切、煮売商売を営むものがいた。

文政二年（一八一九）町の市十郎による願書によると、天正年間（一五七三〜九二）織田信長が岐阜城の頃に、薪座株をもっていたものが一二人おり、慶長五年（一六〇〇）払米五石を上納していた。その後商売手薄となり、元禄八年（一六九五）には薪座株は三人になっている。町年寄は天野家が勤めていた。

明和五年（一七六八）の大火で類焼した。文政一三年（一八三〇）の「岐阜持丸相撲鑑写」に紙屋伊三郎、米屋佐助の名が見える。

平成四年四月現在の世帯数は三一。



第6地区の山車奉曳時の上大久和町の皆さん（昭和63年4月4日）

上大久和町

●町の沿革

明治の中頃まで上大桑町とも称した。

町名の由来は、斎藤道三が城下町建設にあたり、旧城下の山県郡大桑から町人を移住させたことにより町名が付けられたという。（旧岐阜市史）

岐阜町四四町の一つで、町の長さ七九間、家数三七。文政一三年（一八三〇）の「岐阜持丸相撲鑑写」に酒米を扱った神村甚助、米を扱った丹羽又右衛門、村上屋源四郎など商人の名がみえる。

寛保三年（一七四三）の大火で町内全戸が類焼した。明和五年（一七六八）にも類焼している。（岐阜市略）明治二四年（一八九一）一〇月二八日の濃尾地震により、家屋が全半壊焼失する大きな被害があった。古老の話によれば、濃尾震災で焼けた所（平田橋以北）が、昭和二〇年（一九四五）七月の岐阜空襲では戦災から免れたと言われる。

寛政期の家数は三七戸（県地名大事典）、大正七年（一九一六）三八戸、昭和五年（一九三〇）三五戸、昭和三二年（一九五七）五五世帯、昭和六〇年



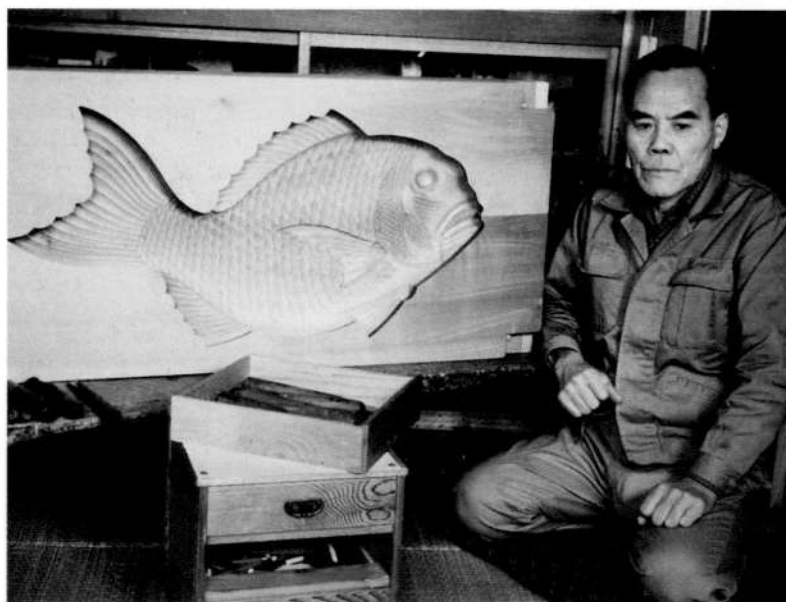
第6地区の山車奉曳（昭和63年4月4日）

（一九八五）三七世帯、平成三年三二世帯と推移しており、戦後疎開により、世帯数が一時増加していたが、現在は昔と余り変っていない。

岐阜祭り伊奈波神社例大祭の山車奉曳当番として昭和五四年（一九七九）四月に、安宅車、を奉曳し、昭和五六年（一九八一）に新しく伊奈波神社山車金華校下奉曳当番表が決まり、再び昭和六三年（一九八八）四月に第六地区各町挙げて市文化財安宅車を奉曳した。

平成四年四月現在の世帯数は三二。

上大久和町●自治会



お祝い用菓子（大鯛）の木型（昭和62年製作）

●「陽」を心に「陰」を彫る 足立勝美さん

一五才の時から木型彫刻の世界に入り、文化財瓦の修復、干し菓子や羊かんなど和菓子の型など木型彫刻の道六〇年。この技術を伝える人は現在東海地方では足立さんだけである。

●中大桑町

岐阜町四四町の一つで、中大久和町とも記す。町名の由来は、斎藤道三が城下町建設にあたり、旧城下の山県郡大桑から町人を移住させたことによる。寛文二年（一六六二）頃まで三品甚兵衛などの武家屋敷が残っており、現在は真宗大谷派真光寺や浄安寺になっている。

浄安寺には斎藤道三・義竜父子の資料があり、明治二四年（一八九一）の濃尾震災にも倒壊寺院の下から焼失寸前で取り出された。

●蜂屋町

中大桑町の西端に蜂屋町がある。町名は岐阜町が城下町であった頃、蜂屋兵庫の屋敷があったことによるといわれる。寛保三年（一七四三）の大火では、中大桑町とともに全戸が焼失した。

平成四年四月の世帯数は両町合わせて三一。

中大桑・蜂屋町



中大桑町の町並み



蜂屋町の町並み

中大桑・蜂屋町●自治会



蜂屋町の町並み



戦前の岐阜祭り時（久屋町）

久屋町

●戦前の町並

長良橋筋本町のや、食い違った四辻を北に入った、金華山を正面に望む南北に走る町で、岐阜町形成時の四四町のひとつとして歴史は古い。承応町絵図には久屋丁と記されている。

町名の由来は不明で、魚屋町・鞆屋町等の同一生業の集合からきたものでも、また門前町のように寺社からきたものでも無さそうである。

往時は、長良川の湊に近く、笠松街道として、また真近かに末広町や伊奈波の繁華街を控えて、商店街として結構繁栄していたようであるが、寛保三年（一七四三）と、明和五年（一七六八）の二度の大火で全町が類焼にあい、明治二四年（一八九一）の濃尾大地震でも全町が焼失しており、繁華街が南へ移って行くとともに、町の性格もだんだんと変貌した。

町内に最も大きな影響を与えたのは、第二次世界大戦である。昭和六年（一九三一）の満州事変以来、打ち続いた戦争による物不足から、統制経済への移

行、食料繊維製品等の配給制の実施に伴う各種企業組合の設立による企業合同によって、一〇軒程あった町内の商店も次々と店を閉じられ、住宅だけの町となった。（現在一店内のみ）

●戦後の町並

岐阜市が壊滅的な打撃を受けた第二次世界大戦の空襲の被害から幸いにも免れたが、空襲による延焼の防止、また避難の確保の為、間引き疎開によって建物を強制的に取り壊された家や、隣家との境の裏庭の塀の一部を切り取らされた家もあった。

大戦末期の昭和一九年（一九四四）頃からは、名古屋や岐阜で戦災に遭った親類縁者が、仮住居を求めて数ヶ月から一、三年に渡って当町に同居され、一時的に町内の居住者が大幅に増えた時期があった。戦後は度重なる地震や台風にも目立った被害はなかったが、小火が二回と火事が一回あった。しかし、大火にならなかつたのが不幸中の幸であった。

高齢化社会は当町内にも押し寄せ、住民の三〇％以上が六〇才を超え、全金華校下の特色を如実に顕わしているのが現状である。『増補岐阜志略』によれば、家数二六、昭和五年（一九三〇）一八戸、同四〇年（一九六五）二五戸、平成四年現在の世帯数

久屋町●自治会



第7地区山車奉曳の久屋町の皆さん（平成4年4月5日）

は一五。

●信長の城下町づくりで誕生

岐阜町四四町の一つで、織田信長の岐阜城下町づくりの時、尾張清洲の町人に岐阜移住を命じ、材木町・鍛冶屋町・魚屋町など、大工、左官、魚屋、菓子屋などが住む町ができ、商工業が盛んになった。

●岐阜大火と魚屋町

貞享三年（一六八六）三月八日、今泉村から出火。五二ヶ町一九二軒焼失。死者二名。

元禄一年（一六九八）七月五日、下矢島町から出火。二二ヶ町八〇三軒毀家一一軒焼失。

寛保三年（一七四三）四月六日、七軒町から出火。四三ヶ町一五一三軒、寺院七ヶ寺毀家一四軒、死者一名。魚屋町焼失。

明和五年（一七六八）七月二日、一九ヶ町三七四軒毀家四軒、死者三四名、重傷者六名。

以後明治七年（一八七四）まで大火はなかった。

●町民の生活

正徳四年（一七一四）一月の定めによると、諸祝の際町内へ出す振舞代は家の間口割りであった。町

魚屋町



平成4年 7地区清影車奉曳

内の諸行事の費用の出し方も間口割であった。たとえば、魚屋町橋の入用は魚屋町西側と本町北側に割賦された。

当町の加藤龍三氏によると、魚屋橋の手前に木戸があり、本町通りの水道管ガス管敷設の際、多数の



魚屋町町内会びわ湖めぐり S.32.6

魚屋町●自治会

素焼の土器や木戸の残柱が出土したという。

魚屋町は、寛政年間は土地一反六畝四歩、家数一九軒、南北四五間だった。

平成三年一〇月現在の魚屋町は、家数二〇軒、世帯数一五、人口五三名。(男二二名、女三一名。八〇代四名、七〇代七名、六〇代六名、五〇代一二名、四〇代七名、三〇代三名、二〇代四名、一〇代一名)

平成四年四月現在の世帯数は一五。



子供会遠足

上新町



上新町の秋葉神社
(昭和58年5月建立)

●町の沿革

上新町といえは、何処の町にもある、本町筋に対する新町筋であり、その上中下の上新町である。

明治二四年（一八九一）の濃尾大震災では、金華地区は全壊全焼し、残ったのは一部の土蔵位のものであった。古老の話によると、焼けた後の姿は一面焼けた林であり、「焼ける前にはこんなに各家に木があったものか」と異様に感じたという。

昭和一〇年（一九三五）の火災の後、時の町内会長山田甚兵衛氏は、当時野田酒屋と道路との狭い空間に、それまで小さくて貧弱だった秋葉宮を立派な社に建て直すことを計画され、町議を重ね山田甚兵衛氏と東隣の奥住魚屋さんとの間が道路より比較的空地が広いのを利用して、用地を借地して本格的な秋葉宮の造営をされた。

当時は近隣の町内にも無い、台座の石積四尺角台座の上に廻廊を造り二尺四方の本殿に昇る階段をつけ、屋根は、銅板葺きの総檜造りの立派な社殿が完成した。

町民は毎日輪番で御神酒を供え、朝夕参拝して町の安全を祈禱した。毎月一日と一五日には当番で清掃した。もちろん年一回の一月の祭礼も全町民が出て行うことになった。

昭和四五年（一九七〇）三月に到り、この社を移転せざるを得なくなった。時の町内会長鍛冶谷政平氏が町の協議を重ねられたが、廃宮に忍びず、とりあえず鍛冶谷家の内庭に遷宮されたその時、立派な廻廊石積の台座は廃棄されてしまった。

昭和五四年（一九七九）に到り、鍛冶谷政平氏が他界されたことよって、秋葉宮の問題で難行し、遷宮か廃宮かで町議が重ねられて、廃宮することになったが、時の長老堀江平八郎氏が庭に一時預かって、引続き秋葉宮問題を根本的に解決することになった。

ところが、昭和五八年（一九八三）四月一五日夜と翌年昭和五九年（一九八四）四月二三日夜、二年続いて火災が発生した。いずれもかなりの類焼があり、特に昭和五九年の火災では堀江平八郎家は全焼に近い被害を受けたが、堀江家の庭の秋葉宮はまったく被害なく焼失からまぬがれた。同じ場所ですら三回も火災が発生した事は、因念めいたものを感じ

上新町 ● 自治会



上新町東面の通り

ざるをえない。

しかし上新町としてはいよいよ秋葉宮の問題を根本的に解決せねばならなくなった。町の議決は廃宮して社殿の本宮本体を岐阜公園の禅林寺に移宮することになり、昭和五八年五月九日に移宮して現在に至っている。その年の六月、町内全員で静岡県秋葉本宮に参拝奉告して町内の安全を祈願した。

平成四年四月現在の世帯数は二九。

●侍屋敷町として出発

新町は、岐阜町四四町の一つで織田信長による岐阜町建設のとき成立した。

中新町は上新町の西に位置し、東西に延びる長さ六四間余り、家数一六。町代は堀田与平治が勤めた。
(増補岐阜志略)

織田信長は家臣を多く城下に集住させる方針をとったため、侍屋敷が金華山麓一带に建てられ、中新町にも西南角に春日丹後守の屋敷があったように伝えられている。(岐阜市史) 寛保三年(一七四三)の大火により全焼した。(岐阜志略)

文政一三年(一八三〇)の「岐阜持丸相撲鑑写」(遠藤文書)には、酒・米を扱った堀田茂左衛門、酒・紙を扱った前田七右衛門、酒を扱った津島屋与平治、柿を扱った神戸与左衛門などの商人の名がある。

弘化三年(一八四六)から明治五年(一八七二)まで寺子屋があった。教師は矢鳥作吾で、生徒数九〇名。また慶応元年(一八六五)医師・高木真蔭に

中新町



中新町の町並み



第7地区山車奉曳の中新町の皆さん（平成4年4月5日）

中新町●自治会

より私塾が開かれた。「桃廬舎」（もものや）と呼ば
び、皇国学を中心に教えた。明治三年（一八七〇）
当時隆盛を極めたが、同九年（一八七六）廃された。
（岐阜市史）

昔より近年まで家数の変化はあまりなかったよう
に思われるが、昭和六二年（一九八七）一五世帯に
岐阜社会保険公務員宿舎ができて一二世帯が加わっ
た。

平成四年四月現在の世帯数は二八。



大工町の町並み

大工町

●町名の由来と沿革

大工町は、織田信長が岐阜城建設後の城下町の中で、大工職人の住居場所としたもので、町名もこれに由来する。

大正五年（一九一六）頃でも、なお大工職が五軒あって、そのうち数寄屋風（丸太普請）やお堂、お宮のできる人や借家などの安普請を得意とした人なお、建前までと、仕上げの造作だけを主とする人などあったという。しかし、現在では皆無である。濃尾震災で大工町も全焼し、南側は次第に復興したが、北側は東部にあった三分の一度が復興したものの、永らく焼跡のままであった。

金華小（元岐阜尋常小）が米屋町より移転（明治四三年）するまでは、北側中央部に武井商会という輸出向ナフキンの大きな製造工場があったが、明治四三年（一九一〇）閉店した。

長良川堤防添いに復興していた下大桑町も北側のみで、その南側は一向に復興せず、大工町側からよく見通しすることができた。焼跡の堀井戸がそのま

までであったので、風上げに夢中の子どもたちが落ち込む事故が度々あった。

大正一三年（一九二四）に北側は、東角まで立ち退くことになって現状に至っている。なお、大工町の明治時代より在住の家は五軒である。

●銀杏の大木

金華小学校の校庭に残る銀杏の大木は、樹齢二五〇年といわれているが、これは昔「護持舎」という寺院の境内にあったもので、その付近は子どもたちのよき遊び場所であり、下駄ばきで本堂の縁側を走り回って坊守の婆さんに叱られていたものである。

平成四年四月現在の世帯数は一六。

大工町●自治会



大工町の町並み

「金華校下は岐阜市発祥の地である」と、故後藤連合会長がよく口にされていたように、城下町として町並みが整理され、それにふさわしい町名が現在もなお残されていることは周知の事実である。

●甚衛町

当町は、記録によると慶長年間（今から約四〇〇年前）に織田家の旧臣である林甚右衛門の邸址で、その名を残すことになった。

以前は甚衛町も下大桑町も一〇戸前後の戸数であったが、交通量の増加に伴う道路拡張の都市計画や戦中の疎開によって戸数が激減し、広報会が自治会と改称してから二町内が合併して甚衛・下大桑町となった。

●下大桑町

金華校下には、上・中・下の大桑町があり、金華小学校の西辺り一带に、以前は十数戸を数えたが、都市計画の道路整備のため一時は散り散りになり、現在四戸で形成されている。

ひと頃は町名を削除して大きい町内に統合しよう

甚衛・下大桑町



甚衛町の町並み

下大桑町の町並み



甚衛町の町並み

甚衛・下大桑町●自治会



下大桑町の書類

役員名と支払明細



という風潮があったが、町名を無くすことには反対の声が強く、二、三年前に当局の指導に依り、甚衛町と合併して、町名を甚衛・下大桑町と称することになった。

平成四年四月現在の世帯数は両町合わせて九。

下新町



下新町の守護神・秋葉さま

●町の沿革

当町は四〇世帯ほどの小さくて地味な町だが、織田信長の、清州越ミで成立した町として、歴史は古い。

町の目印になっているのが法光寺境内に聳える銀杏（いちちょう）の大樹。樹齢二五〇年の巨木で、晩秋の頃一気に眩しいほどの黄金色に移る様は正に壮観である。

寛保三年（一七四三）の岐阜の大火で全焼し、明

治二四年（一八九一）の濃尾地震でも全滅したが、太平洋戦争末期の岐阜空襲（一九四五）では奇跡的に災禍を免れた。したがって、随所に明治の面影を残し、格子づくりの町屋風の家屋が並んで静かな風情が漂う。

明治中期までは長良川の舟運に密接に関わり、回漕や荷役の問屋もあり、裏の川には荷物運搬船や鶴飼屋形船が係留されていたが、次第に舟運の便も閉ざされ、砂利採集の職業に変化した。

明治一八年（一八八五）の記録によると典型的な職人町に変化している。

大工一三 日雇い一三 左官五 桶職五 青物業四
荷車曳き三 指物職三 仕立物職二 竹渡世二 舟
乗渡世二 其の他一一 計六三

明治二四年（一八九一）一〇月二八日の濃飛大地震によって、全町焦土と化した。銀杏の大樹が境内に立つ法光寺だけは水煙を吐く銀杏によって救われ、建立から二五〇年の由緒ある伽藍を現在に残している。

現在では、職人町からサラリーマンの住宅地へと変容し、徳川末期から世襲して定住しているのは約一〇世帯で、法光寺のほか大工職だった徳田氏（一六代）と左官職を続けた加藤氏（二一代）が最古の住人である。現在は様々な企業に勤める世帯が多く、自営は約一〇世帯であり、公共施設は金華保育所があり、町内の秋葉神社が約七坪の町民共有地に鎮座している。

●町内会の移り変わり

当町には下新町家並帳（寛政一二年・一八〇〇、申正月作成）戸籍帳（明治五年・一八七二）、改戸籍帳（明治一八年・一八八五）、切絵図（明治八年・一八七五）、沽券地改正丈量帳、地価帳（明治一一年・一八七八）等、戸籍固定資産の内容を明細に記載した書類の外、明治三三年（一九〇〇）から町内の重要記録として保存されている金銭台帳、金銭積立帳、金銭出入帳などがあり、町内の歴史や会計事情が明らかにしている。

当初、下新町町内会と称し、町総代を選んで運営し、次いで隣組（隣保班）広報会、自治会と名称は変わっても古くからの「下新町町内会」の名を實質的に継承しており、町内会会則も不文律に依って運

下新町●自治会

金華橋南詰めの下新町歩道橋

町内唯一の公共施設 金華保育所



伊奈波神社祭礼奉賛山車曳記念 金華第8地区奉賛会 S47.4.5

営されていたが、昭和五二年（一九七七）一月に現在の会則を最終的に定め、現在はこれによって町内の運営をしている。
平成四年四月現在の世帯数は四〇。



布屋町の町並み

布屋町

●伊奈波神社へ神輿を寄付

織田信長による岐阜町建設のとき成立した町である。伊奈波神社境内の「明轎庫」と名付けられた倉に、享保二十一年（一七三六）に造られた立派な神輿があるが（道具箱に墨書があり）、それは当町の保有のもので、伊奈波神社の祭礼の当日には必ず扉を開き、飾り付けをして参詣者に見てもらっていた。しかし、神社より、「この様な場所にあるのは不自然に付き、町内へ持帰るか、神社の方へ寄付せられたし」との申入れがあり、小さな町内には移転する場所もなく、町内全員にて相談の上、昭和十九年（一九四四）に神社に寄付をした。なお大正六年（一九一七）四月の祭礼には、布屋町と大工町と合同してこの神輿を吊って氏子中を廻った。

現長良橋の前の橋は、大正四年（一九一五）五月一六日に開通式があり、翌一七日にはその御祝の打上花火大会があり、その最中の午後七時頃、金華小学校（当時は岐阜尋常小学校）より出火して、校舎二棟が焼失した。

平成四年四月現在の世帯数は一三。



布屋町子供会遠足

布屋町●自治会



神輿明轎庫

●町の沿革

資料によると、享保年間（一七一六―一三六）の斉藤道三による町づくりの際、メイン通りとして造られたという。本町を中心にいろいろな町名が作られ、産業が栄えた。古地図に蠟燭を扱った伊勢屋嘉右衛門（後楽荘）、藤野平左衛門の名がある。町内には、今も伊勢何何という名が残っているが、これもその時代のものでしょうか。

各町内に神社があるように、本町にも八幡神社がある。古老に聞けば神社の祭礼には、屋台、出店があり、金魚屋、飴屋等が出て賑わったとか。又神社の下には川があり、小池があつて魚を取った。本町より伊奈波神社に通ずる南北に抜ける通りも、食物屋、旅館があつて賑わったという。

●大きく変わりつつある本町

今一番変わりつつあるのは本町ではないかと思われる。長年親しまれてきた市電がなくなり、本町のカーブを曲がるキーキーという音と共に目をさました事が昨日のようである。

本町一丁目

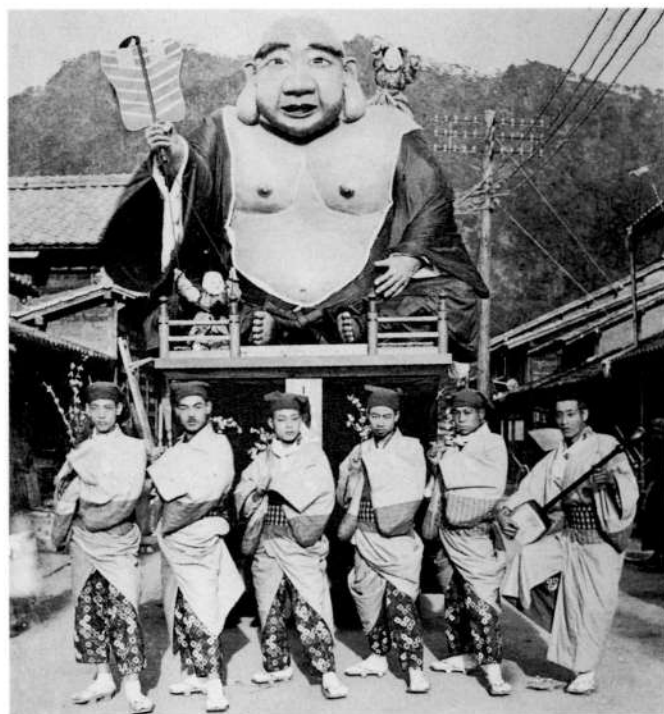


本町1丁目の町並み



本町1丁目の町並み

本町一丁目●自治会



本町1丁目大正5年山車

本町より東にのびるジャリ道がアスファルトになり、長良橋通りの道の拡張による立ち退きと、それに伴う流出により、世帯も減少してきた。時代の流れと共に、風呂屋、ふとん屋、和菓子屋、下駄屋、金物屋などの店も転職していった。時代に一番敏感なのは本町かもしれない。

平成四年四月現在の世帯数は六二一。



岐阜祭りの本町2丁目子供会の作りみこし（昭和33年4月）

本町二丁目

●昔の本町

その昔、本町では表通りで雪合戦やキャッチボール、或いは独楽廻しが何の心配もなく出来た。通るものは荷馬車と自転車が主役であった。

バラエティーに富んだ活気のある町並みであり、薬局、魚屋、旅館、鋸屋、印刷所、菓子屋、指物屋、運送屋、乾物屋、和装小物屋、呉服屋、瀬戸物屋、お茶屋、食堂、床屋（理髪店）、自転車屋、ラジオリ屋、帽子屋、提灯屋等々、今風に言えば、「本町商店街」の様相であった。若干時期が前後するかもしれないが、八百屋、印鑑屋、機械工具店に弁護士事務所、更には市議員さんやおまわりさんも住人の時代があった。

平成四年四月現在の世帯数は二一。

●当町に残る古文書

一・鎮火祭執行心得（秋葉神社のお祭り）が明治九年（一八七六）より昭和三〇年（一九五五）迄

一・布達簿（町内に回覧して知らせるもの）が昭和一六年（一九四一）より現在迄

一・金銭出納簿が昭和一〇年（一九三五）より現在迄

一・町規約（大正九年（一九二〇）に改訂、その後一部改正。大正九年以前は不明）

一・町帳簿（昭和一七年（一九四二）頃）

●町内のおもな出来事

明治一五年（一八八二） 本町だけで、丁目はなかった。

昭和一五年（一九四〇）一月 紀元二六〇〇年に金一八円也を寄付す。

昭和一七年（一九四二） 家庭防護団結成（団長・平光竹二郎）

昭和三三年（一九五八） 国民体育大会アジア競技大会で広報会長大塚俊一郎が聖火リレー伴走者として出場。

昭和三五年（一九六〇）四月 ふたば子供会が子供みこしを出し三等賞受賞。

昭和五三年（一九七八）四月 道路拡張工事の陳情書を関係官庁へ提出。（関係町内一緒に）

平成二年七月 道路拡張により秋葉神社を伊奈波の秋葉神社に合祀する。

平成三年一〇月 伊奈波の秋葉神社を修繕。

本町二丁目●自治会



岐阜国体聖火リレーに出場したランナー達（昭和40年）

●町の沿革

当町内は昔金華山に居をかまえた斉藤道三による城下町建設に際して成立したという。その時の町名は釜石町と言い、町の長さは六二間余り、家数二六戸。宿屋・問屋等が立ち並び、呉服・紙・味醂等を扱った当時の豪商もこの町に居を構えていた。

昭和初期には、本神輿、子供神輿があり、岐阜祭りには町内こぞって盛大に参加していた。又町内に祀ってあった秋葉神社の御礼を、毎年代表者三人が静岡県周知郡秋葉山本宮秋葉神社まで受けに行っていた。その時には町内全員で見送り、恒例の町内行事になっていた。

昭和四〇年（一九六五）頃までは、子供の数も多く、毎年五月五日の子供の日を祝って、バス一台を借り切って、町内遠足もにぎやかに行なわれていた。

●新しい町づくりめざして

昭和四一年（一九六六）一〇月、「街を明るくする運動」に当町内も参加し、町費と有志者の協力を得て水銀灯六基を設置して現在に至っている。

本町三丁目



本町3丁目の町並み



本町3丁目子ども会（昭和36年5月5日）

本町三丁目●自治会

昭和六二年（一九八七）に、本町一丁目から三丁目、魚屋町の一部の拡幅工事が始まり、同時に本町開発連盟が組織された。拡幅のため平成二年、町内の秋葉神社も伊奈波神社境内にある秋葉神社に合祀された。現在も本町開発連盟を中心に、新しい町づくりが進められている。

平成四年四月現在の世帯数は二〇。



韮屋町の町並み



韮屋町

韮屋町 ● 自治会

● 町の沿革

本町筋中央付近から南に延びる両側町で、織田信長による岐阜町建設に際して設けられたという。享保年間のもと推定される町絵図に、韮屋町の名が記されている。

当時は岐阜町の繁華街として、商家が立ち並び繁栄していたが、明治四四年（一九一一）市内電車が敷かれ、町の中心部は次第に電車通りに移り変わっていった。

大東亜戦争で甚大な被害を受け、その復興とともに岐阜市全般の様相が大きく変化し、市の中心部が次第に南に移っていった。

その後、創設当時の町並みが大きく変化し、車社会を迎えて本町筋の市内電車も廃止され、近年一二階の高層ビルも出現。時代の流れと共に町並みも大きく変化しつつある。

平成四年四月現在の世帯数は四〇。



ユーハウス

ユーハウス岐阜●自治会

ユーハウス岐阜



ユーハウス

ユーハウス岐阜は分譲マンションとして、平成二年二月着工、平成三年一〇月に竣工し、その後入居が開始された。鉄筋コンクリート一二階建て、分譲数は三三戸。現在はほぼ全世帯の方が入居。入居者は岐阜市内に居住されていた方が岐阜出身の方がほとんどで、金華に近い所に居住されていた方もいる。やはり環境の良さに魅かれて入居された方が多い。平成四年四月より一町内として金華自治連合会に入会した。

平成四年四月現在の世帯数は二六。



本町1丁目より見た末広町北組

末広町北南西組合同

●町の沿革

明治初年に米屋町より分離独立することになり（岐阜町奉行所見取図）、奉行所跡より北へと、馬場（南北長さ二町巾八間）通りを南組と北組とし、奉行所跡及び西廻りを西組とした。

韮屋町、米屋町と横道により結び、東は稲荷山に至る。稲荷神社も奉行所の稲荷として参拝されて来たが、奉行所跡を末広町に分離するに及んで、同町の持ち分となり、毎年二月八月に祭典されている。

●芝居小屋が並んだ繁華街

明治六年（一八七三）頃末広町には末広座、花角などの芝居小屋や、各種遊興場、飲食店、芸妓屋が軒を連ね現在の柳ヶ瀬を思わせる賑わいであった。明治一四、五年頃（一八八一～八三）には末広座へ市川団十郎、市川権十郎、尾上菊五郎、市川左団次等のそうそうたる役者が来ていた。明治一五年（一八八二）頃より震災前までが最盛期であった。

平成四年四月現在の世帯数は、北組三三、南組五〇、西組三四。



伊奈波神社祭礼奉賛山車奉曳記念 末広町北南西組合同（平成元年四月）

末広町北南西組合同●自治会

●町の沿革

延享（一七四四～一七四八）年間には、新桜町一帯は御殿御屋敷であった。

明治維新の頃は新桜町は同心屋敷であった。明治四三年（一九一〇）に岐阜尋常小学校が大工町へ移転するや、その跡地に道路を南北に新設し、町とした。

大正三年（一九一四）一月、伊奈波通り一丁目が、当時桜町と称していたため、町名として「新桜町」とした。現在面積は千坪。

大正初期に、「指新」という建具製造者が新桜町の空地に工場を新築した。

昭和一三年（一九三八）頃まで、当町に岐阜尋常小学校のテニスコートがあった。

平成四年四月現在の世帯数は一九。

新桜町

新桜町●自治会



新桜町の町並み



信長まつり（岐阜公園にて）



上竹屋町の町並み

上竹屋町

●町名の由来と沿革

岐阜町四四町の一つで、承応期（一六五二〜一六五五）の絵図に「上タケヤ丁」の名がある。布屋町の南に位置し、南北に延びる両側町で、南は中竹屋町に続く。町の北端は本町筋に直行し、町の南端を東に折れると東けぬき横町、西に折れると西けぬき横町へと続く。

町の広さは、『岐阜由緒』（小林文書）によると、地子免許地反別四反九畝余とあり、『増補岐阜志略』には、町の長さ六六間、家数三三とある。

承応三年（一六五四）の『家並改書』（徳川林政研究所蔵）によれば、板屋三九軒があり、うち二三軒が高持であった。そのほかに、米蔵・酒蔵など二〇棟が並んでいたという。

当町には米屋をはじめとして酒屋、油屋、紙屋、鉛屋などの商家が軒を連ねており、屋敷の間口は一間から五間であり、二間から三間間口の家が多かった。

住民の数は、男一〇三人、女一〇七人で、文政一

三年（一八三〇）に発行された『岐阜持丸相撲鑑写』（遠藤文書）の中に、絹や米を扱った浅野彦左衛門、縮緬を商った鯛屋惣右衛門などの商人の名がのっている。

寛保三年（一七四三）には、大火によって町内全



上竹屋町の町並み

上竹屋町●自治会

戸が類焼している。（岐阜志略）
明治五年（一八七二）の家数は二四戸、うち家持一〇、借家一四で、人数は、男五二人、女五四人（岐阜市発展史）であった。

平成四年四月現在の世帯数は二〇。



岐阜護国神社建設時の町内勤労奉仕団（昭和15年）

岐阜町四四町の一つで、上竹屋町の南に位置している。

●第十六国立銀行本店所在地

明治一〇年（一八七七）に松屋町で開業した「第十六国立銀行」（現・十六銀行）本店が、明治二九年（一八九六）三月に中竹屋町へ移転し、以後昭和六年（一九三一）四月に神田町へ移るまで、当町にあった。

第十六国立銀行の発足時の資本金は五万円で、発起人となったのは、初代頭取となった渡辺甚吉他七名で、ほとんどが岐阜町の出身であった。

本店移転後は、竹屋町支店となり、戦後昭和四六年（一八七二）一〇月に新築されて現在に至っている。また、翌年には、同行の事務センターが当町に完成した。

●日下部信託株式会社

大正九年（一九二〇）に、日下部信託株式会社が日下部久郎によって当町に設立された。その後、大正一五年（一九二六）に岐阜信託株式会社に社名を

中竹屋町



中竹屋町の町並み



中竹屋町の町並み



設立当時の十六銀行

中竹屋町●自治会



中竹屋町の町並み

変更し、昭和二年（一九二七）に神田町一丁目へ新築移転したが、太平洋戦争末期に十六銀行へ合併された。

日下部信託株式会社の建物（赤煉瓦造りの丸型屋根が特徴的であった）は、終戦後、倉庫会社が借りていたが、昭和四二年（一九六七）にアパート建設のために取り壊されてしまった。

平成四年四月現在の世帯数は二九。



大和町の秋葉神社



飛行機献納のために町内会で文房具やパン等を売る（大和町）

大和町

大和町 ● 自治会

● 町名の由来

織田信長による岐阜町建設の時に成立し、当時は東鋤横丁（ひがしけぬきよこちょう）と言われ、けぬき（キリ）を作る職人・坪内弥右衛門が居住していたことが町名の由来とされている。（旧岐阜市史）岐阜町四四町の一つで、承応期の絵図に「ケヌキヤヨコ丁」、寛政六年（一九七四）の町絵図にも「東けぬき町」と記されている。

● 町の沿革

『増補岐阜志略』によれば、町の長さは、東西に四一間、家数八戸と記されている。

明治五年（一八七二）に、現町名「大和町」と改称され、同年の家数六戸、人数は、男五人、女一〇人であった。（岐阜市発展史）

創業一六〇年の生麩業「麩兵商店」は昭和五九年（一九八四）一〇月に、工場・売店を、隣の米屋町へ移転した。井上医院（内科）は昭和三六年（一九六一）に開業し、現在に至っている。

平成四年四月現在の世帯数は五。

●町の沿革

織田信長による岐阜町建設のとき成立した町とされる。岐阜町四四町の一つで、承応期の町絵図に「西横町」、寛政六年（一七九四）の町絵図に「けぬき町」とあり、家数二〇で萱屋が多いとある。寛保三年（一七四三）の大火で町内全戸が類焼した。

（岐阜志略）

明治五年（一八

七二）に間之町と改称され、その時の家数は一五戸。

（岐阜市発展史）

戦後になって、

昭和二五年（一九五〇）に一八戸、昭和五十年（一九七五）一五戸と人口が減少している。平成四年四月現在の世帯数は七。



昭和48年第11地区安宅車奉曳間之町の皆さん

間之町

間之町●自治会



昭和48年第11地区安宅車奉曳



米屋町の町並み

米屋町

●中世

かつて米屋町附近は政治と商業の中心であった。今から四二〇有余年前の永禄五年（一五六二）、当時の稲葉山城主斉藤龍興がこの地に米倉を建築し、農民より年貢を米にて取りたてて、米倉に納めたことから人はこの地を「米屋町」と呼んだという。

●近代

歴史の町米屋町は岐阜市の産業の発祥地であり、市の発展により市街地の東北端となり、中心部に位置するものとなった。

●現代

最近は古い建物の老化が目立ち、改築や近代的建物の新築が進んでいる。近くの隣町内には「マンション」等も出来、町並みもすっかり二一世紀を目前にして近代化が進み、夢ある町づくりが進められている。

●神社

当町に関係のある神社は、伊奈波神社、東照宮、稻荷神社、秋葉神社の四社である。毎年四月五日に

祭礼があり、当町内会も昭和五七年（一九八二）四月の祭礼には伊奈波神社の「山車」を出した。次回



12地区で山車奉曳した米屋町の皆さん（昭和57年4月4～5日）

米屋町●自治会

●米屋町の誇り
の当町内会の当番は平成九年の予定である。

当町は岐阜市に於ける金融や産業などあらゆる方面の発祥地である。米屋町の居住者は今後とも各自が自省してこの尊い歴史と名誉ある町をいつまでも保っていくことが望まれている。

平成四年四月現在の世帯数は四〇。



昔の面影を残す赤レンガ造りのモダンな建物（唐長）

●中世

伊奈波通りは当初齋藤氏が米倉を建てた為に米屋町と言われたのがはじまりで、この米屋町から明治七年（一八七四）に末広町、大正三年（一九一四）に新桜町、同四年（一九一五）に伊奈波通が分離したものである。

江戸時代初期は徳川幕府の天領（直轄地）として美濃国代官所がおかれ、その後尾張徳川家の支配を受けて、岐阜奉行所が置かれた。

江戸時代から明治初年にかけて、岐阜町は長良川の水運をバツクに発展し、その後は材木、紙の各問屋のほか商人宿、飲屋、料理屋、芸者置き屋などが繁盛をささえた。

●明治期

明治七年（一八七四）、市内最初の芝居小屋が末広町に『末広座』として誕生。その後伊奈波広場の北側に「国豊座」、南側に「相生座」が出来、当時伊奈波三座と呼ばれた。国豊座はその後明治座→岐阜劇場と名が変わっていった。

伊奈波通一丁目



伊奈波通1丁目の町並み



伊奈波通1丁目の町並み

明治二七年（一八九四）、白木町に市役所がおかれ、大正八年（一九一九）に美江寺に移るまでの二五年間、市政の中心となった。

明治二四年（一八九一）一〇月二八日の濃尾大震災で伊奈波周辺の大半が焼失した。

岐阜市の繁華街は伊奈波神社一帯がその始まりで、昔城下町として発展し、沢山の寺が出来、宗教都市の性格を強めたが、これが経済的な状況にも一役買ひ、一時は岐阜の中心的な存在であった。しかし明治二〇年（一八八七）に東海道線が開通したことや、濃尾大震災により、商業娯楽の中心は次第に南に移っていった。

●現代

昭和二〇年（一九四五）八月の大空襲により岐阜市の八〇%が焼失したが、金華校下は大半が焼け残った。

昭和三四年（一九五九）九月、伊勢湾台風により市



伊奈波通1丁目の広場

伊奈波通一丁目●自治会

内の八〇%の家が水につかった。このため、翌年に水防団が結成され、その後伊奈波神社前の広場に地下貯水槽が設置された。

平成四年四月現在の世帯数は六五。

●伊奈波神社

中世には美濃国三宮と称したといい、天文八年（一五三九）斎藤道三が伊奈波山城を築城する時、椿原から現在地に移され、永禄一〇年（一五六七）に織田信長によって衰微していた祀典の復興が行なわれた。明治二四年（一八九一）の濃尾震災により焼失。現在の建物は昭和八年（一九三三）に再建されたものである。

●善光寺

天正一〇年（一五八二）織田信長が長野善光寺の阿弥陀如来の分身を移し、当地に善光寺を建立したことに由来するとされる。同寺はのち廃寺となり、その跡に小堂が建てられ如来堂と称された。なお、永禄一二年（一五六九）京都の公家山科言継が善光寺如来に二度参詣しており、信長整備以前に同寺は存在したものとみられる。明治二四年（一八九一）の濃尾震災で焼失。現在の堂宇は大正六年（一九一七）に再建されたものである。



伊奈波通 2 丁目の町並み

伊奈波通二丁目

●町名変更

かつて「愛宕町」という町名であったが、明治三一年（一八九八）に、「伊奈波通り」に町名変更された。

●伊奈波夜間青物市場

伊奈波通り近辺は、明治から大正初め頃まで岐阜市の繁華街の中心であったが、次第に南部の柳ヶ瀬方面に中心が移っていった。

昔の賑わいを取り戻すために、伊奈波通り二丁目元町総代（嵯峨誠吉）の努力により、昭和五年（一九三〇）に岐阜市と伊奈波郡及び羽島郡の連合農会が伊奈波夜間青物市場を開設した。

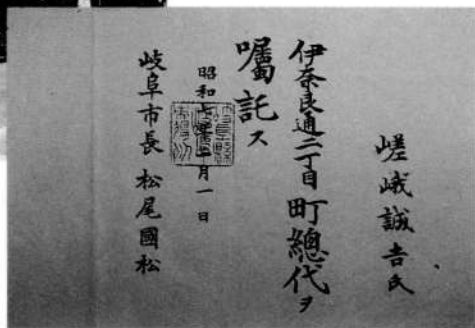
●伊奈波通り道路舗装

伊奈波通りは昭和の初めに岐阜市で最初に歩道と車道の舗装工事が進められた町であり、商業上でも、交通上でも、重要な通りであった。

平成四年四月現在の世帯数は一六。



伊奈波通 2 丁目の町並み



町總代依囑状(昭和 7 年 2 月)

伊奈波通二丁目●自治会

伊奈波通 2 丁目の町並み



伊奈波通 2 丁目の町並み



●町の沿革

明治八年（一八七五）岐阜町に常盤町・末広町・堀江町とともに誕生した。町名の由来は、当町を開いた矢島町加藤代三郎の家号が万力であったことによる。場所は、金華山の西南に位置し、西は、伏越が南北に走る。伊奈波神社参道入り口南に当たり、神社の祭礼には大いににぎわった。町内には稲荷神社・浄土宗大泉寺がある。

明治七年（一八七四）頃に「末広座」が誕生し、明治一四年（一八八一）頃、伊奈波に「国豊座」、明治一六年（一八八三）頃、万力町に「相生座」が誕生し、明治一〇年代、これらの劇場は「伊奈波三座」と呼ばれ、岐阜の娯楽の中心となり、岐阜一番の繁華街として栄えた。

明治二〇年代、特に濃尾震災（明治二四年）後、今沢町・今小町・泉町に繁華街が移っていった。

明治二二年（一八八九）、岐阜市に所属。明治二七年（一八九四）、町の西側（現在の県営アパート所在地）に岐阜市役所の新庁舎が完成した。

万力町



万力町の町並み



昭和初期に再建された大泉寺（万力町）

万力町●自治会

昭和二〇年（一九四五）七月九日、岐阜大空襲の戦災を免れる。

昭和四五年（一九七〇）一月八日、町の南にあった極東木工が火災で焼失し、その跡地に一〇戸の住宅が建ち、現在の町並みとなった。

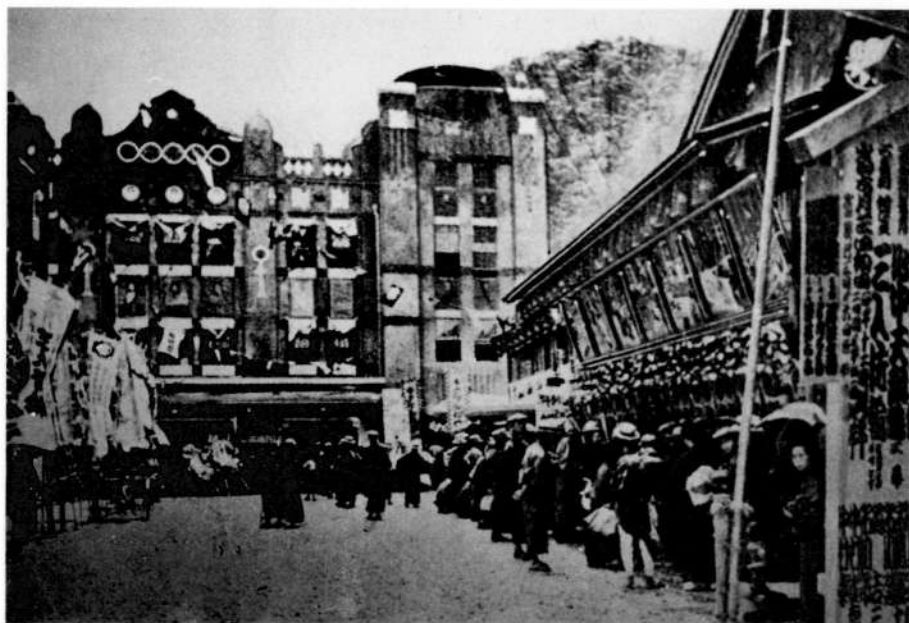
●町内の行事

秋葉様 一月一五日、五月一五日、九月一五日

お地藏様 八月二三日

昭和五年（一九三〇）の戸数三六戸、人口一三二人、昭和四〇年（一九六五）の世帯数三〇戸、人口一四二人。平成三年の世帯数は三三戸、人口は七九人。

平成四年四月現在の世帯数は三〇。



昭和初期の松竹館・松竹座

白木町

●町の沿革

白木町は、信長の時代に岐阜の南口として作られたと言われている。

白木町には、明治大正時代には市役所（現在の県営住宅）があり、その後、市役所が移転し、跡地に「松竹座」という芝居小屋が出来た。その隣に「松竹館」（現在の白木町公園）という赤レンガ作りの映画館があり、大正より昭和の初め頃は、岐阜市の中心商業地として伊奈波神社界隈とともに大変賑わっていた。

当時は新しく町内へ入居するには、身元引受人が二名以上必要で、町内の有力者の許可が必要であったと聞き及ぶ。

「松竹座」は木造三階建の先尖がドーム状で非雷針がついている、当時としては大変モダンな建物であったため、戦時中に空爆の目標になるということ。昭和二〇年（一九四五）初めに取り壊された。その年の七月に大空襲となり、町内の南の方が一部焼け、道路に掘ってあった防空壕でも直撃を受けて

一部の方が亡くなった。

「松竹館」は、柳ヶ瀬が焼け野原となったために、戦後唯一の娯楽映画館となり、昭和二五―六年頃（一九五〇―五二）迄大変賑わっていた。



白木町の町並み

白木町●自治会



白木町の町並み

昭和六三年（一九八八）に白木町公園地内に県営アパートが建設されて二四世帯が入居し、校下最大の世帯数を持つ町内である。

平成四年四月現在の世帯数は一〇五。

●町の沿革

常盤町は、金華校下の一番南に突き出たところに位置しており、東は通称権現山（台帳面では駿河山になっている）に接し、西は京町校下の上竹町と並んでおり、北は白木町、南は、京町校下の笹土居町に続いている。

昭和二〇年（一九四五）の戦災により全町内が焼けだされてしまった。現在の戸数は四〇戸で、戦災前からの住民は約半数と思われる。戸数は戦前も四〇戸程であった。

常盤町は明治の頃は「上笹土居町」と呼ばれていたが、途中で「常盤町」に改称された。

なお、常盤町の「盤」は、皿だと割れるから、石の「磐」が正しいとされている。その証拠に写真の中にある町旗は「常磐町」となっている。しかし、現在は戸籍面上、常盤町と書く。

平成四年四月現在の世帯数は四〇。

常盤町



伊奈波神社参拝（昭和16年）



常盤町の町並み



常盤町 ● 自治会



伊奈波神社例大祭における
第13地区奉賛会（常盤町）



伊奈波神社例大祭の山車奉曳の常盤
町の皆さん（昭和61年4月）



松屋町の町並み

松屋町

●町の沿革

松屋町は金華校下地域では南部に位置し、南北に長く、その延長は一八九メートル、戸数は六九戸（岐阜市史より）。比較的商家が少なく、落ち着いた街といえる。

明治二四年（一八九二）の濃尾大震災では、全町が被害を受けたといわれており、更に昭和二〇年（一九四五）七月の大東亜戦争の大空襲による戦災では、町の南半分以上が戦禍を受けている。（岐阜市全体としては五一・七％に当たる二〇四二六戸が被災）

その後、町も復興し、家々が軒を連ねて往時の姿に復帰したが、昭和五〇年代（一九七五〜八九）にはいり、高層マンション、アパートが建設され、また自動車の急激な増加に伴ってガレージが設けられるなど、町並みは大きく変貌しつつある。

平成四年四月現在の世帯数は五〇。

●当町出身の偉人

松屋町出身者で、社会的に活躍された人としては、

「織甚」の屋号で絹織物業を営み、政界財界に大きな足跡を残した渡辺甚吉氏を挙げることができる。氏は明治一〇年（一八七七）に松屋町において第十六国立銀行（現在の株式会社十六銀行で、その後中竹屋町に移転、更に本店は神田町九丁目に移転）を創立して永年その頭取となり、またその間岐阜商工会議所会頭にも選ばれた。一方政界にあつては、明治二二年（一八八九）岐阜市制施行初代の市会議長となり、更に明治二三年（一八九〇）に貴族院議員、明治三五年（一九〇二）には衆議院議員に選ばれている。

このほか、岐阜市議会議員としては、明治二二年（一八八九）岐阜市制施行最初の議員として横山孫蔵氏が、また大正一四年（一九二五）には稲葉芳雄氏が選出され、岐阜市政に貢献している。

松屋町●自治会



松屋町一角にある旧渡辺甚吉氏宅の玄関塀

●町の沿革

昭和二〇年（一九四五）七月九日に、戦災で全町内を焼失した。戦後まもなく栄町の世帯数は一〇戸、扇町八戸で、別々の町内であった。

その後、世帯数が少数であるため、当時の町内会長同士で合併の相談合意が成立し、昭和二八年（一九五三）に「栄扇町」と改町されて現在に至っている。

当時は、東西に流れる灌漑用水にはきれいな水が流れ、フナやウナギがよく釣れた。用水際には桜や柳が植えてあり、夏の夕方には縁台将棋の姿があちこちに見られた。

しかし、昭和四五年（一九七〇）に用水にコンクリートの蓋がなされ、広い道路となった。

平成四年四月現在の世帯数は一七。

栄扇町



栄扇町の町並み



昭和52年4月 十三地区伊奈波
神社安宅車奉曳



バラックの前で（戦災直後）

栄扇町●自治会



昭和61年4月 栄扇町伊奈波神社安宅車奉曳町内の皆さん



矢島町1丁目上組の町並み（東側）

矢島町一丁目上組

●大正末期から昭和初期の矢島町界隈

道路は現在の様な歩道もなく、道幅も狭く、土の上に時折細かい砂利を敷いて、その上を歩いていた。矢島町のことを、かまいし、とも言っていた。

道の中央を市電が走っていたが、電車は黒色の時も赤色の時もあった。自動車はほとんどなく、人力車が走り、馬がひく馬車で子供が馬車の後に跳び乗っては喜んでいた。

家並も現在の様にビルが建ち並ぶこともなく、格子造りの家が多く、洋館といえば、伊奈波の角の安藤証券と武山医院の赤煉瓦の建物ぐらいであった。住んでいる人々も、その頃いた人達は現在では殆ど他所に移り、新しい住民が今商売をしている。

町内には新愛知新聞社の岐阜支局があり、当時洋服姿は珍しかったが、ここにはハイカラな新聞記者が入入りし、新聞社の前には当日の新聞がはり出している。これを読みに来る人もいた。

新聞社の隣には、製材所があり、朝から木を切る音が響いていた。また、箱屋もあり、朝早くから折

箱を作る職人が板の上でご飯を棒で根気よくねって、のりを作っていた。上組のはずれには古着屋が黒い暖簾をたれていた。この隣が十六銀行で今の様なビルでなく、黒い土蔵造りであった。

矢島町から竹屋町の銀行に通ずる小道は、からたちの木が植えられ、花の咲く頃は蝶がとび、子供の遊び場であった。

また、料理屋では、朝早くから沢山の料理人が表で忙しく組板で切る音がこつこつと聞こえていた。理髪店もあり、五、六人の職人が世間話をしながらお客の髪を刈って、出来上がると愛想よく送り出していた。

平成四年四月現在の世帯数は二一。

矢島町一丁目上組●自治会



矢島町1丁目上組の町並み（西側）

●町の沿革

現在の町名になる前には、中矢島町・加茂町と称していた。現矢島町上組の珠城町・同下組の相生町の名称とともに、昭和の初期頃までは日常生活にすっかりとけ込んでいた町名であった。

町を南北に走る道路（今や主要県道の一つ）は、明治三六年（一九〇三）から四〇年（一九〇七）にかけて、道路拡幅工事が行なわれ、その後名鉄市電の線路が敷設されて、明治・大正・昭和の三代にわたり岐阜市民の貴重な足として長く親しまれ利用されてきたが、モーターゼイションの到来と交通渋滞の解消の目的のため、昭和六三年（一九八八）五月、昭和時代の終りを予言するかのようになんげ線撤去となった。

県道はその後、昭和四七年（一九七二）から岐阜市都市計画の一環として行なわれ、第三次拡幅は一〇年近くの歳月を要して五〇年代末頃に漸く完成した。歩道の新設によって車道との区画が明確となり、街路街の植樹によって街並の景観も一新されて今日

矢島町一丁目中組



矢島町1丁目中組の町並み（東側）



矢島町1丁目中組の町並み（西側）

矢島町一丁目中組●自治会

に至った。

なお明治五年（一八七二）当時の町内戸数は二三戸と記されているが、平成四年四月現在の世帯数は三九。

●法華寺

古史実によれば、矢島町（旧中矢島町）には織田信長の家臣氏家ト全の屋敷があったと記されているが、町内にはその屋敷跡と目される場所に日蓮宗法華寺がある。

同寺は美濃日蓮宗寺院の宗門再興の道場として、代々濃州寺院の触頭に任ぜられた。初め尾張の国（現愛知県清州町）清須にあったが、開基本覚院日陽が信長の崇敬をうけ、信長の岐阜城入城の折り、祈願所として移築建立されたと伝えられる。

町内にはこの他に同宗の現正寺・長照寺がある。なお、法華寺境内には「織田信長お手植えの松」と称される、樹形見事な松の大きさが偉容を誇り、歴史の深みを偲ばせていたが、現在、寺内には昔の松の面影にかわり、桜の大きさが一〇数本あって、春になれば見事な花を咲かせている。



道路拡幅前の町並み



矢島町一丁目下組●自治会

矢島町一丁目下組

●町の沿革

矢島町南北に延びる中ほどに位置する町で元禄十一年（一六九八）と寛保三年（一七四三）の大火でいずれの時も町内全戸が類焼した。（岐阜志略）

明治五年相生町と改称され、昭和初期頃現在の町名を使用する様になった。明治三六年から四〇年にかけて道路の拡幅工事が進み、のち電車線路が敷設された。（現在撤去）

古書の部に掲載されている新選組近藤勇と親交のあった水野家後裔も居住されている。

平成四年四月現在の所帯数は一九。



伊奈波神社入り口のある北側の町並み

伊奈波通三丁目

伊奈波通三丁目●自治会

●町の沿革

明治一五年（一八八二）頃は伊奈波横町と称していた。その後榎木の枝を伊奈波神社へ奉納するようになってから、町名は榎町となった。

当時は道幅三間の狭い道路であったが、明治三八年（一九〇五）頃大通（八間通）に広げられ、その時伊奈波通り三丁目がうまれた。

その頃は、市役所が白木町にあったために、伊奈波通、末広町は大いに賑わったが、第一次大戦後から次第に寂びれ、昭和二〇年（一九四五）の敗戦と共にさらに活気がなくなっていた。平成四年四月現在の世帯数は一四。



伊奈波神社入り口のある南側の町並み

●江戸期

大正五年（一九一六）までは、鍛冶屋町と称していた。織田信長による岐阜町建設によって誕生した四四町の一つである。

江戸期は美濃国厚見郡岐阜町のうちであり、金華山七曲り道から長良川の舟の出入りする上げ門（あげもん町）に通じる市街路の中央にあり、南に名古屋街道が続いていた。当時は鍛冶屋や商店が建ち並んでいた。鍛冶屋町の由来は織田信長による岐阜城建設のとき尾張国清洲（愛知県西春日井郡清洲町）の鍛冶職人が当地に居住してきたことによる。

承応期の町の絵図に町名がみえ、『増補岐阜志略』によれば、町の長さ七二間余で、家数四〇。寛保三年（一七四三）の大火により町内全戸が類焼している。

文政一三年（一八三〇）の「岐阜持丸相撲鑑写」（遠藤文書）に、紙を扱った吉田喜平治、三角屋彦助（貝崎彦助）などの商人の名がみえる。又、三階建の倉もあったが、濃尾地震で焼失した。

本町四丁目



本町4丁目の町並み



●明治期

明治三二年（一八八九）岐阜市に所属し、大正五年（一九一六）に本町四丁目となる。現在は商業地ではあるが閑静な住宅街となっている。

昔は山車があり、その彫刻は諏訪のわしろの作。現在もその時に作られた仏壇が当町内の家に残っている。伊奈波神社参道両脇の石灯籠は、寛政四年（一七九二）の疫病流行の際に平癒祈願のため奉納されたものである。

濃尾大震災の時、本町四丁目西端北側にあった「あめ屋」より出火、東方に類焼していったが、下新町の「法光寺」は大きな「银杏の木」が水を吹いて類焼をまぬがれたという。

●昭和期

昭和初期は人口も多く、しかも若い人の割合が高く、色々な行事が盛んに行なわれ、岐阜祭りには多数の人々の参加によって作り神輿を出したりした。又、夏の夜ともなれば、遅くまで縁台を家の前に出し、打水をし、蚊取り線香をたき、うちわをおおぎながら夕涼みをする光景がふつうであった。

大東亜戦争中にはバケツによる消火訓練大会に優勝し、皇族が当町内に防火演習を視察されたことも

あった。

●現在

現在は古い家を取り壊されて空地が増してきた。人口は減少し、しかも老人が増加して、行事を行なうにも支障が生じる様になり、自然と沈滞ぎみになってきた。

平成四年四月現在の世帯数は三一。

本町四丁目●自治会



戦時下の防火訓練



伊奈波神社例大祭山車奉曳の本町5丁目の皆さん

本町五丁目

●町の沿革

当町はかつて「車之町」と称していたが、大正五年（一九一六）に、現在の「本町五丁目」と改称された。その間、寛保三年（一七四三）の岐阜町大火により町内全戸が類焼している。

明治五年（一八七二）の家数は五二戸、うち家持ち三七、借家一四、人数は男一一六人、女二一人（岐阜発展史）であった。

昭和初期の本町五丁目には、米屋、魚屋、豆腐屋、味噌たまり屋、ゆば屋、酒店、饅頭屋、製粉工場、砂利屋、指物屋、染物店、釣り道具店、葬具店等があり、近郷近在より多くの人が買物に訪れた。

世帯数は、昭和一七年（一九四二）四月七七戸、昭和三七年（一九六二）四月七九戸であったが、平成三年一月には四六戸と次第に減少している。

現在の町内人口は一五三名（男六三名、女九〇名）で、六〇才以上は三八名である。

平成四年四月現在の世帯数は四七。

●伊奈波音頭

昭和二年（一九二七）二月野口雨情が泊まり、その折りに「伊奈波音頭」を作詞された。作曲は藤井清水。

「岐阜の伊奈波さま

五穀の護り（ハイヤドンドドドン）

五穀みのれよソラ

世は穏やかにハリヤヨイヨイドンドドドン」

（二番～五番省略）

●山車

当町が所蔵する山車は、嘉永年間（一八四八～一八五四）に造られたもので、建造様式は江戸幕府の初期中期末期の三様式を備えたものといわれている。古くは安政大地震（一八五五）の時に大破したというが、修復を加えて例年伊奈波神社の祭礼に奉仕してきた。

明治二十一年（一八八八）には、大改修を加えるとともに弁慶義経の、人形からくり山車に改装し、「安宅車」と呼ばれるようになった。明治二十四年（一八九一）の濃尾大地震では、当時二〇数輛と言われた他町内所有の同僚山車はことごとく焼失したが、安宅車のみが焼失を免れることができた。

しかし、昭和十九年（一九四四）に、戦争完遂の

本町五丁目●自治会



本町5丁目の町並み

ための家屋の強制疎開によって、山車の格納庫を失い、以後雨にさらしとなって、往時の面影を失ってしまった。終戦後、仮格納庫を急造して保存に当たったが、台風などにいたためつけられ、修復されることもなく荒廃する一方となった。

昭和三十三年（一九五八）に岐阜市文化財民俗資料第一号として指定されるに及んで、ようやく山車修復と格納庫の建設の気運が盛り上がり、昭和三十七年（一九六二）三月に山車修復と格納庫建設工事が終了し、四月五日の伊奈波神社例祭に奉納することができた。以来、伊奈波神社の社宝として、受納されることになり、現在に至っている。

●明治・大正期の当町

明治三十二年（一八八九）に岐阜市制が施行されて、「七曲町」（今の本町六丁目）となった。その前は単に「七曲り」と呼ばれ、井の口村の西の入口で相当賑わった所だったという。

大正時代、上げ門（現在の本町七丁目）には運送の中心的役割をしていた「中牛馬」（運送店名）があり、その西の桑名屋裏の堤防から、揖斐行の乗り合い馬車が毎日出ていた。

また長良川では天気の良い時は白い帆掛け舟が上って行く光景が見られた。

七曲りにそった堤防にはたんぼほ、つくし、昼顔、葛の花等その時々草花が咲いていて、川には筏が沢山つながれていた。堤防には南側の傾斜に料亭もあり、明治の初めには政界の方々の出入りがあったという。

大正五年（一九一六）の町名変更で「本町六丁目」になったが、その時の戸数は約五〇戸、六〇戸であった。

本町六丁目



本町6丁目の町並み



本町6丁目の町並み

本町六丁目●自治会

その頃七曲町の河合甚松、神山憲治、藤井清八等
が中心となり「岐阜青年館」を組織して色々な活動
を行ない春の祭りには「にわか」を演じていた。

大正七年（一九一八）頃、シベリア出兵に町内か
ら幾人か出征され、町内の西と東に大きな日の丸の
旗が立てられた。第二次世界大戦が始まるや、町内
に「国防婦人会」が組織され、空襲防火のため、家
屋が何軒か曳き倒された。

本町六丁目には防火用井戸が東と西にあり、秋葉
神社の下は堤防まで非常用通路があった。

平成四年四月現在の世帯数は二二。



町内の馬頭観音

本町七丁目

● 町名の由来

昔の町名であった「上げ門町」は、当町が岐阜治安の要であった所から堤防の上に木戸があって、朝夕木戸が上がったり下がったりすることから、上げ門町になったという。

● 戦前の町の風景

かつては渡し舟で早田の岩倉や鷺山・則武方面へ道路が通じていた。町内は商人や家内工業、職人が多く、冬になれば造り酒屋の杜氏が朝早くから天秤棒をしながら寒の川水を運ぶ姿が見られた。

また、長良川には大きな川舟が海産物や奥美濃の山の幸を運んできて、陸揚げしたり、積み替えたりして、賑やかであった。このため、多くの牛馬が使われ、その馬の労苦をしのんだ「馬頭観音」が町内にあり、毎年八月一七日には町内総出でお祭りしている。

戦前は、夜遅く迄御詠歌の鐘の音が響き夜店もでて賑やかであった。また盆の送り火を焚いて精霊舟を送る夜に、忠節用水の取入り口あたりに、人影が



本町7丁目の町並み

遅くまで続いていた。

その当時、町内には鍛冶屋、製材所、養蚕具屋、桶屋、指物屋、味噌造り、酒造り、湯葉屋、石屋、石碑屋、大工の切込場、鑄造り、豆腐屋、餅屋、焼芋屋、八百屋等が立ち並んでいた。

今は昔の面影はなく、子供の声の聞こえない町になってしまった。

平成四月現在の世帯数は一一。

本町七丁目●自治会



町内の秋葉神社



嘉永5年建之の道標

●町のおこり

矢島町の町名の由来は定かではないが、慶長五年（一六〇〇）の土地寄進状（別記）と、承応三年（一六五四）の岐阜町絵図に矢島町の名がみえる。

○大嶋伝左衛門尉後家土地寄進状

下矢島町東町表の口拾六間之中、裏へ長さ町並の如く、本誓寺へ御寄進申候、永代御控あるべく候、誰々にもいらん申者あるましく候、たたし百姓之義ハ可為御寺次第候、為其二一筆如此候、仍後日之状如件

慶長五年 やしま町

霜月一九日 大嶋伝左衛門尉 後家（署押）

本誓寺さま

進上

（岐阜市本誓寺文書より）

●町有財産の「秋葉神社」

当町内には代々受け継がれてきた土地が、現在も町有財産として残されている。これは前述の参考資料寄進状がしたためられた時点に、本誓寺と同時に

矢島町二丁目



矢島町2丁目の町並み（西側）



伊奈波神社例大祭に粟津太鼓を迎えて奉納（昭和34年4月4日）

矢島町二丁目●自治会



矢島町2丁目南端忠節用水あり外堀でもあった。ここに土橋がかかっていた明治初め素封家平田藤左衛門氏私財を投じ青銅の擬宝珠付の木橋に架け替えた人徳をしのび平田橋と言った

町にも寄進されたものと思われる。
この安土桃山時代より引き継がれてきた宅地は、第二次世界大戦後の岐阜市の土地整理によって市有地となる場所であったが、矢島町二丁目秋葉神社所有として子孫に残すべく、当時の町会長や町役員諸先輩が努力され、当時の岐阜市長東前豊氏の絶大なご理解によって町内財産として残すことができた。

平成四年四月現在の世帯数は四一。



啓運町少年少女団（三田洞弘法前、昭和18年）

啓運町

●職人の町

歴史のある町ではないため、古いエピソードはほとんどない。職人さんが多く、大工、左官、印刷、製傘と色々な職種の人が住んでおり、小さな町特有の親密さがある。

戦時中は町内総代と称して時に応じた活動があり、少年少女日参団として出征兵士の名入り旗をもって伊奈波神社へ参拝したり、町内の清掃も「子供会」の行事であった。むろん、一般と青年団にも勤労奉仕があった。

戦後、町内行事は青年団と子供会が中心になっておこなっていた。当時、野球ブームが起こり、大日本本土の都市対抗優勝、丸物の健闘等の影響で、町にも「啓友クラブ」というチームが発足し、市軟式野球連盟に参加していた。ユニホーム等は町内の募金で作製した。

子供会は各クラス平均男女各四名～五名で総数四〇～五〇名。キャンプや一日バス旅行等を計画的に実行し活発な運営をしていた。



在郷軍人会のもちつきをする啓運町と木造町の人々（昭和初期）

昭和の四〇年代以後、次第に人口が減少した。
平成四年四月現在の世帯数は三四。

啓運町●自治会



伊奈波神社例大祭山車奉曳の啓運町の皆さん（昭和57年4月4日）

●町名の由来

寛政六年（一七九四）の町絵図によれば、「木造横町」といい、町名は織田信長の孫で岐阜城主・織田秀信の家来であった木造左衛門尉具政（康）の屋敷があったことによる。なお、百々越前守の屋敷もあったという。現在の蓮生寺が木造屋敷、即得寺が百々屋敷にあたると『岐阜志略』にある。

寛保三年（一七四三）、大火により町内全戸が類焼。明治五年（一八七二）に「木造町」となる。明治三二年（一八八九）岐阜市に所属し現在に至る。

明治五年の世帯数は一〇八戸で人口四一五人。

平成四年四月現在の世帯数は東組西組合わせて七七。

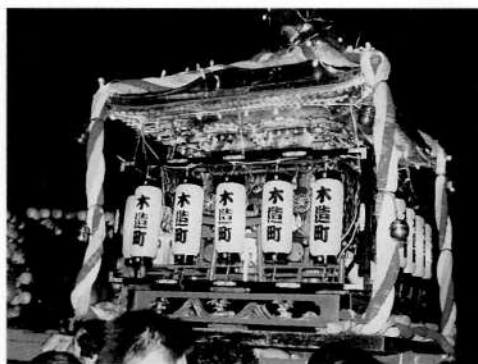
●木造町の町神輿

町の神輿は、町内の即得寺内に神輿蔵があり、文政一〇年（一八二八）作の黒漆金箔貼りの「本神輿」と、屋根に美濃和紙を桜色に染めて貼った黒漆の「花神輿」がある。その他に宝暦五年（一七五五）の作という獅子頭とその屋台があり、昭和の作の子

木造町東組・西組



木造町の宝「本神輿」（右）と「花神輿」（左）。町内の人々によって、毎年奉納される市内で一つの「町神輿」です。



供用本神輿が二台ある。神輿の内部や部品箱には、数多くの銘文や修理札が認められる。最も古いものは、部品箱に「安永三年（一七七四）戊八月」の墨書があり、鳳凰の翼とその箱に「文化一一（一八一四）戊八月吉日」の銘がある。

この江戸時代につくられた岐阜市内で一番古いであろう「町神輿」は、昭和六三年（一九八八）に自治会長伊藤泰雄らによって復活し、翌年から毎年岐阜まつりにつり続けられている。これらの本神輿、花神輿を二台連ねて町を練り歩き、江戸文化を次代に伝えていくのが、町民の粹であり、誇りであり、責任であろう。

●木造町の桜並木

木造横町の時代から木造町の時代に移り、新道が出来たのが大正一五年（一九二六）であり、その記念に桜が植えられたと思われる。当時は、旧道沿いに勝林寺、蓮生寺、正興寺の山門があり寺の境内を東西に新道が作られた。

太平洋戦争の時代には、この道に防空壕がつくられ、残った桜も昭和四〇年（一九六五）の岐阜団地で道路の完全舗装とともによみ返り、現在は、満開時には市内一の桜のトンネルとなる。平成四年には

木造町東組・西組●自治会

歩道がレンガ舗装となり、美しい町並みとなった。

●町づくり憲章の制定

美しい町並みと桜、歴史ある神輿と木造町の活力アップにつながる環境を町づくりとして、平成三年に、岐阜市で最初の「木造町まちづくり憲章」が制定された。町民全員が記名捺印し、平成三年四月一日から実施された。

この憲章は、木造町東組の住民一同が歴史と文化を大切にし、かつ、いかに良好な住民関係を育んでいくかを自分たちで考えるために制定された。

憲章 私たちは

- 一、自然と文化の調和したまちづくりをすすめ、豊かな環境を守る事を誓います。
- 一、社会生活の秩序とルールを遵守し、相互の調和と自由のもとに暮らします。
- 一、親、子、孫、誰でもが住みたいと思う住環境を考えていきます。
- 一、地域の環境と景観を破壊するような高層建築は認めません。四階（一三メートル）までを基準とします。
- 一、町内のコミュニケーション、人間関係を阻害する高層、投資分譲型、管理人不在のマンション等は、絶対に許しません。と規程している。

今日の世界の食べ物

アホなアホな
勝ち誇る
アホなアホな

住民大パーティー

台野サービス菓銘カキ



服部 みちを

史華金



わしも
ハイターに
いつてみる
かな

おあ
岐高
初優勝の
バッテリーも
来てくれたか

みどり
したたさ
きんか
ざんぐ

この連中もまた決
え愚連隊
当時のギャル岐高女
大和撫子
年くつても終情
なのでふるえて
ただ泣くのみ
理科室の
ガイツ君も
来てくれ
たか

奴を
ブッゴ
カゴイ
地獄
カゴイ



加藤捕手
特攻隊員
大和おの
たくせ

栄杯
さぶちん
さわらせ
合いた
か

板垣
死すとも
死なす
三ドリは
死なす
岐阜公園は
美しい!

おまはん
変り身
速いたも

当を向きの
セリフになつた

あんたは
これがこ
つた

争い
人闘
みだ

特別天然
記念物なん
だぞ!



さかれ
わしは
特別天然
記念物なん
だぞ!

理科の
池にいた
オオサン
ショウウカ
だわ!



ここじゃ
高級ペット
も影さす
ね



新選組よりの書状(二)

添触

一急御用状 壹通

右者、濃州岐阜矢嶋町役人江、宿々無
遅滞、弁附ヲ以繼立可申候、以上

新選組

七月十三日

調役 印

亥斉発

大津宿より

岐阜町迄

宿々問屋

役人中

新選組よりの書状(二)

此旨、水野弥太郎江御手紙繼立三、家
内之者江内分二而、弥太郎江相渡可給
候、右御足勞御座候、以上、勿々

七月十六日

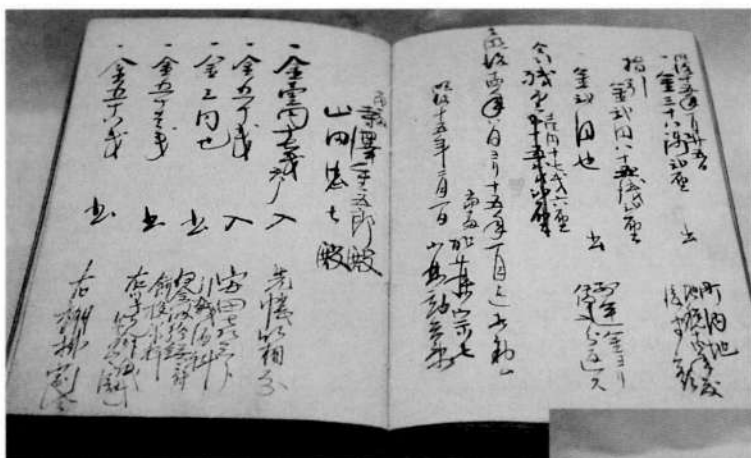
新選組

調役 印

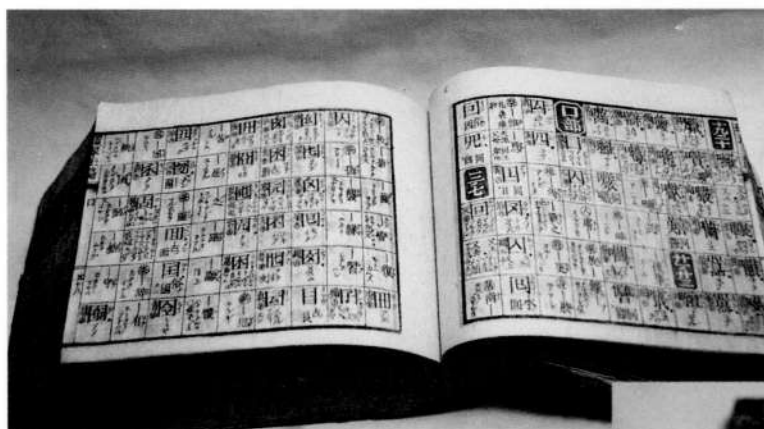
岐阜矢嶋町

町役人中





古書



引札 (古い広告)

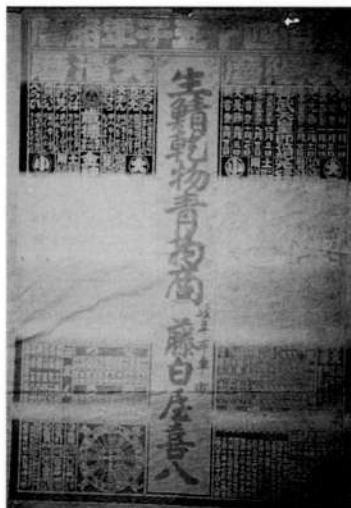


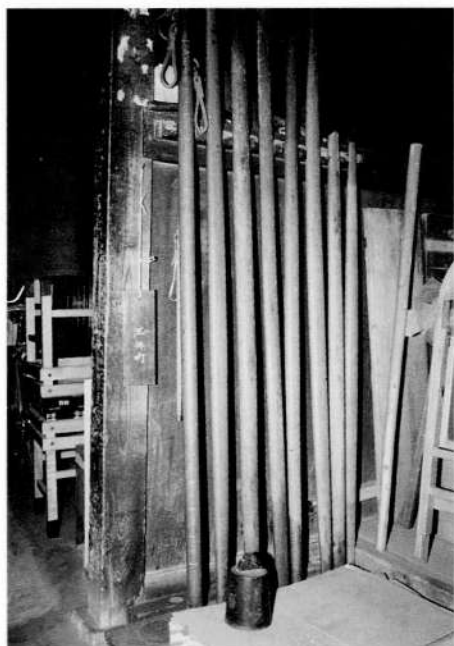


戦災を受けなかった、金華校下の倉庫・仏壇等に昔の広告が多く残っていてなつかしく拝見する事が出来る。しかし、その印刷には、相当苦心され、遠く大阪等にまでだされた物が多く見られる。



引札





天ピン棒
荷物を両端に下げて真中に肩を入れ倉庫へ運ぶ時に使用



玉井町深尾商店昔ながらの店内
1817年アメリカ生まれの柱時計 今も活躍本当によい
音色で時を告げると御主人(82)の話し
茶席にはかかせない利休懐紙の発売元



大正時代 貨物自動車



伊勢湾台風

昭和34年9月伊勢湾台風による遊船事務所前の浸水の様子 大人の膝がしらまで浸水し道路が川の様である



昭和34年9月伊勢湾台風による十八楼前の浸水の様子



昭和34年9月東寿司前伊勢湾台風による浸水の様子

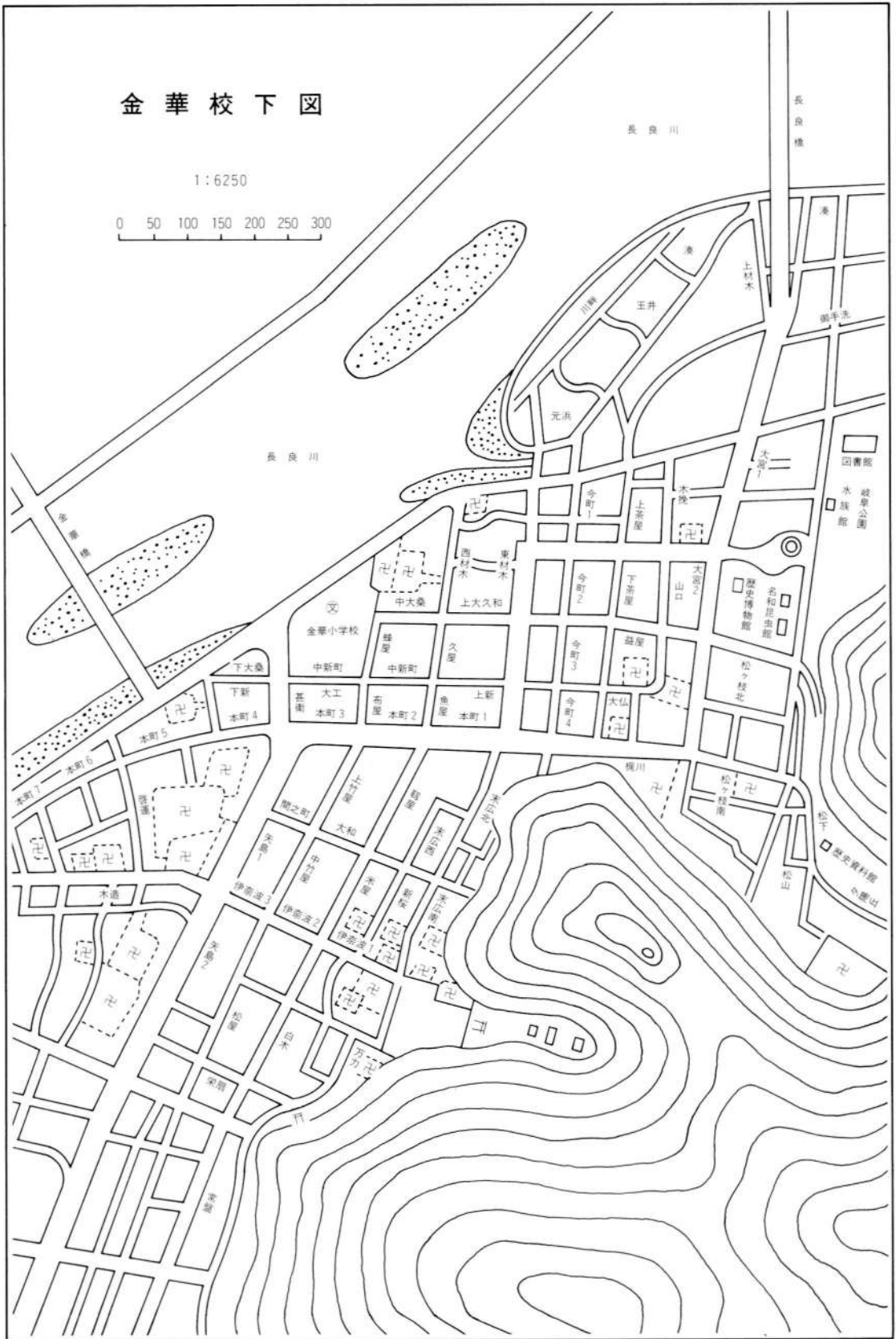


昭和34年9月伊勢湾台風による長良川の増水 橋まで水がきている

金華校下図

1:6250

0 50 100 150 200 250 300



自治会連合会



金華自治連合会四十五年のあゆみ



年	月	事項
昭和二四	九	金華弘報委員会（金華広報連合会の前名）設立、六八ヶ町、会長 後藤喜八
二五	一	校下成人式
	三	岐阜市広報委員協議会発足
二六	四	第一回金華校下市民大運動会
	七	金華校下市民大会（市民の集い）
二七	一〇	岐阜県災害救助隊金華分隊第一回総会
	五	第一回金華校下戦死戦病死戦災死者合同慰霊祭（勝林寺）
	七	住民登録法により広報会長全員調査員となり一斉調査
二八	一二	岐阜市金華橋架設推進委員会発足
	八	金華校下市民の集い
	九	金華校下敬老会
二九	一〇	岐阜市広報会創立五周年記念総会
	八	市民の集い



金華自治連合会四十五年のあゆみ

九	「広報きんか」発行	三〇
一	全市門松廃止、紙製門松配布	三一
九	広報会創立七周年記念総会	三二
一〇	国勢調査	三二
九	金華広報連合会“秋の歌の夕”開催	三三
四	金華広報連合会総会（金華消防開館）	三三
五	広報連合会主催“春の歌の夕べ”	三三
一〇	広報連合会対抗歌合戦	三三
五	広報連合会主催“春の歌の夕べ” 第三回アジア競技大会聖火リレー参加	三三
七	交通安全自治会結成呼びかけ	三三
一〇	広報会創立一〇周年記念式典	三三
三	創立一〇周年記念市民運動会	三四
六	町をきれいにする運動展開	三四
一〇	伊勢湾台風校下被害調査並びに救援物資配布、災害復旧用品（トタン、畳等）購入斡旋（伊勢湾台風校下被害状況：家屋半壊五〇世帯、二一八人、全壊七世帯三五人、床上浸水四七六世帯二、〇九九人）	三四



- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------------|-----------|-----------|------------------|---------------|------------------|----------------|--------------|-----------|-------|--------------|-------------|--------------------|------|-----|-------------------|--------------|---------|-----------|-------------------|
| 九 | 六 | 五 | 七 | 六 | 三九 | 四〇 | 一〇 | 九 | 六 | 五 | 一〇 | 八 | 六 | 三五 | 三六 | 三七 | 三八 | | |
| 岐阜国体夏期大会開会式 | 長良川堤防春の清掃 | 岐阜国体民泊打合せ | 金華校下愛市運動推進委員会発会式 | 長良川美化推進協議会結成式 | 岐阜市広報連合会一五周年記念式典 | 長良川刈清掃(三〇〇人参加) | 第一回長良川堤防一斉清掃 | 第一回校下一斉清掃 | 市民の集い | 第一八号台風校下被害甚大 | 集中豪雨被災世帯一九九 | 校下市民大運動会(去年より春に実施) | 国勢調査 | 壊四戸 | 床上浸水二一八戸床下浸水一一四戸半 | 一二号台風による水害被災 | 金華水防団設置 | 運動会野球大会中止 | 金華校下単独にて義援金を募集。市民 |



金華自治連合会四十五年のあゆみ

- | | |
|---|---|
| 四一 | 一〇 |
| 七
天皇皇后両陛下来岐万松館で宿泊
交通安全協会岐阜中支部金華分会発足 | 長良川堤防草刈り一斉清掃
岐阜国体国体旗、炬火リレー参加(隊長 後藤喜八)
国体民宿五三ヶ所四一〇人
第二〇回岐阜国体開会式
国勢調査 |
| 九
金華公民館開館式 | |
| 一一
広報連合会市施設めぐり
岐阜市長と語る会
長良川草刈り清掃実施 | |
| 四二
三
伊奈波神社例大祭の山車奉曳を校下四大地区持ち廻りにて輪番奉仕承認 | |
| 四三
三
創立二〇周年記念植樹(岐阜公園、伊奈波公園、金華体育館前) | |
| 六
広報会長社会見学 | |
| 一〇
二〇周年記念式典 | |
| 四四
一
本年より成人式各校下毎に実施(金華小学校講堂) | |



広報会25周年記念時計塔
(S 49) (岐阜公園)



広報会35周年記念時計塔 (S 58) (伊奈波神社広場)

四五	一〇	国勢調査
四六	一二	金華公民館新築落成式
四七	三	金華体育館西歩道橋完成 白木町公園開園式
四八	八	上松市長と対話の集い(金華小学校体 育館)
四九	一一	市指定文化財大仏奉賛会設立に協力
五〇	六	金華広報連合会二五周年記念時計塔設 置(岐阜公園)
五一	一	校下成人式(本年より伊奈波神社参集 殿にて)
五二	一〇	国勢調査
	九	台風一七号による集中豪雨で校下に床 上床下浸水被害(九・一二水害)
	一〇	校下にて見舞金を募集し見舞品を贈呈
	一〇	金華公民館創立一〇周年記念式典、第 一回文化祭開催
	四	金華小学校体育施設開放
	八	盆踊りの夕べ(金華小学校校庭)

九	蒔田市長等を迎え金華校下市政懇談会開催	五九
五三	三 公民館”きんか”創刊号発刊	六〇
	八 盆踊りの夕べ（金華小学校庭）	
五四	四 金華公民館増築工事竣工式典挙行	六二
	八 盆踊りの夕べ（金華小学校校庭）	
五五	三 金華社会福祉協議会第一回総会開催	六三
	三 金華広報連合会三〇周年記念として体育館前と岐阜公園に植樹	平成元年
	八 盆踊りの夕べ（金華小学校校庭）	
	一〇 国勢調査	
五六	九 岐阜市広報会野球大会にて優勝	二
五七	四 第一回防災訓練実施（金華小学校校庭）	
五八	四 伊奈波神社例大祭山車奉曳を別紙当番表の通り決定、本年第一地区が奉曳	三
	六 金華広報連合会創立三五周年記念事業として「岐阜市発祥の地、井の口の里」	
	伊奈波神社前広場に時計塔を建立竣工式典挙行	四
七	蒔田市長を迎え岐阜市政懇談会開催	

金華自治連合会四十五年のあゆみ

一〇	金華校下第二回防災訓練実施	
六	金華校下第三回防災訓練実施	
一〇	国勢調査	
四	広報連合会が金華自治連合会に名称変更	
六	第四回校下防災訓練実施	
七	伊奈波通り修景事業竣工式	
六	第五回校下防災訓練実施	
八	各種団体共催にてサマーフェスティバル開催	
六	県道本町一丁目―大宮町二丁目間竣工（街路樹にアメリカハナミズキ植栽）	
一〇	国勢調査	
六	第六回防災訓練実施	
八	「金華史誌」最終説明会大地区別に開催	
三	岐阜公園友好庭園開園式	

平成4年度 行事計画

金華自治会連合会 (平成4年4月1日)

新年度定時総会	4月1日	校下公民館の文化祭	10月18日(日)
春の全国交通安全運動行事に協力	4月上旬	年末定時総会	12月
母の日(カーネーション)	4月	成人式 場所(伊奈波神社参集殿)	1月15日 奨金12月
自治会長一日研修	5月	岐阜祭山車奉曳協賛会	3月
日本赤十字社員費募金	5月	社会福祉協議会 金華支部奨金	11月
校下市民体育祭	5月17日(日)	消防団・水防団後援費	随時
雨天の場合	5月24日(日)・5月31日(日)	年度末定時総会	3月
春の交通法令講習会PR並びに協力	6月中旬	臨時総会	
交通安全協会に協力金	6月	行事予備費(事務費)	
防災訓練	(6月 隔年)		
治水会費	7月		
校下子供育成の諸行事及び奨金に協力	5月		
敬老会該当事者調べに協力(婦人会に委嘱)	8月～9月		
秋の交通法令講習会・優良運転者表彰に協力	10月		
秋の全国交通安全運動行事に協力	9月下旬		
共同募金	10月		
合同慰霊祭 場所(普賢寺)	10月4日(日)		
年末助け合い運動	11月末日		

伊奈波神社 山車金華校下奉曳当番表

年次	西曆	大地区	小地区	町名	
昭和五十八年	一九八三	一	一	湊、上材木町、御手洗、玉井、元浜、川畔	清影車
〃五十九年	一九八四	二	五	今三、今四、大仏、梶川	安宅車
〃六十年	一九八五	三	九	本一、本二、本三、鞆屋	〃
〃六十一年	一九八六	四	十三	白木、常盤、松屋、榮扇	〃
〃六十二年	一九八七	一	二	大宮一、大宮二、木挽、山口、益屋	〃
〃六十三年	一九八八	二	六	東材木、西材木、上大久和、中大桑、蜂屋	〃
平成元年	一九八九	三	十	末広北、末広南、末広西、新桜	〃
〃二年	一九九〇	四	十四	矢島一上、中、下、伊奈波三	〃
〃三年	一九九一	一	三	上茶屋、下茶屋、今一、今二	〃
〃四年	一九九二	二	七	久屋、魚屋、上新、中新	清影車
〃五年	一九九三	三	十一	上竹屋、中竹屋、大和、間之	安宅車
〃六年	一九九四	四	十五	本町四、五、六、七	〃
〃七年	一九九五	一	四	松下、松山、夕陽丘、松ヶ枝北、松ヶ枝南	〃
〃八年	一九九六	二	八	大工、甚衛、下大桑、下新、布屋	〃
〃九年	一九九七	三	十二	米屋、伊奈波一、伊奈波二、万力	〃
〃十年	一九九八	四	十六	矢島二、啓運、木造東、木造西	〃

年度	町名			湊上材木御院	玉井	元浜	川畔	大宮1	大宮2	木挽	山口
昭和四五年	玉井 武	林 隆敏	野々垣国男	西川 衛	近藤 源吾	杉山 勝治	吉田 信次	岩田 和一			
昭和四四年	玉井 武	林 隆敏	畔柳 一雄	西川 衛	近藤 源吾	杉山 勝治	島 兼吉	森 德太郎			
昭和四三年	玉井 武	林 隆敏	大野 久一	大橋 金利	近藤 源吾	杉山 勝治	小島 貞一	森 德太郎			
昭和四二年	玉井 武	林 隆敏	久世 健雄	大橋 金利	松田 専一	杉山 勝治	末次 誠一	岩井 岩三			
昭和四一年	玉井 武	林 隆敏	木村 純造	梅田 修	松田 専一	杉山 勝治	富成 沢治	岩井 岩三			
昭和四〇年	玉井 武	林 隆敏	水谷 意啓	宮崎 和之	松田 専一	杉山 勝治	末次 正二	桐山 作市			
昭和三九年	玉井 武	林 隆敏	桜井 茂七	大橋 金利	加野 重夫	杉山 勝治	春見 金一	桐山 作市			
昭和三八年	玉井 武	林 隆敏	桜井 茂七	大橋 金利	加野 重夫	杉山 勝治	安藤 正三	桐山 作市			
昭和三七年	玉井 武	林 隆敏	花室 正平	長屋鉄馬留	加野 重夫	杉山 勝治	安藤 正三	加藤磯太郎			
昭和三六年	玉井 武	林 隆敏	久世 健雄	外山 虎一	加野 重夫	杉山 勝治	安藤 正三	加藤磯太郎			
昭和三五年	神山 鷹次	林 隆敏	久世 辰男	宮崎 和之	加野 重夫	杉山 勝治	瀬口忠孝一	加藤磯太郎			
昭和三四年	神山 鷹次	林 隆敏	野々垣国男	八田 孝	加野 重夫	杉山 勝治	瀬口忠孝一	加藤磯太郎			
昭和三三年	神山 鷹次	林 隆敏	花室 正平	八田 孝	石原 十力	杉山 勝治	鷺見 善治	武藤弥左エ門			
昭和三二年	神山 鷹次	林 隆敏	桜井 多市	大橋 金利	石原 十力	杉山 勝治	鷺見 善治	桐山 作市			
昭和三一年	神山 鷹次	林 隆敏	中村 二郎	大橋 金利	石原 孫三	山田 京一	鷺見 善治	松原久次郎			
昭和三〇年	神山 鷹次	林 隆敏	中島 春夫	大橋 金利	加野 重夫	山田 京一	瀬口忠孝一	武藤弥左エ門			
昭和二九年	玉井 武	林 隆敏	桜井 茂七	大橋 金利	加野 重夫	山田 京一	瀬口忠孝一	加藤岩次郎			
昭和二八年	玉井 武	林 隆敏	中村 二郎	大橋 金利	加野 重夫	山田 京一	瀬口忠孝一	小川精三郎			
昭和二七年	玉井 武	林 隆敏	桜井 多市	宮崎三次郎	加野 重夫	山田 京一	瀬口忠孝一	加藤鋭太郎			
昭和二六年	野須範一郎	林 隆敏	中村 二郎	宮崎三次郎	加野 重夫	稲葉 寿一	水野爲太郎	河田 市造			
昭和二五年	野須範一郎	林 隆敏	桜井 多市	宮崎三次郎	加野 重夫	稲葉 寿一	水野爲太郎	高橋光二郎			
昭和二四年	野須範一郎	林 隆敏	中村 二郎	宮崎三次郎	加野 重夫	稲葉 寿一	水野爲太郎	武藤弥左エ門			

金華校下歴代

各町広報自治会会長名

年度	町名	湊上材木御院	玉井	元浜	川畔	大宮1	大宮2	木挽	山口
昭和四六年	玉井	武	林 隆敏	木村 純造	野中 義昭	加野 重夫	川村 政一	瀬口忠孝一	岩井 岩三
昭和四七年	玉井	武	林 隆敏	外山幾三郎	山本一二三	加野 重夫	大野松太郎	鷺見 善治	村瀬 登
昭和四八年	玉井	武	林 隆敏	桜井 多市	中井純之介	加野 重夫	高瀬 憲一	滝沢 兼松	加藤 利治
昭和四九年	玉井	武	林 隆敏	小川 勇吉	北原 泰作	石原 奨	鈴木 幸雄	富田 勇	松原久治郎
昭和五〇年	玉井	武	林 隆敏	野々垣国男	桜井 悦次	石原 奨	河口 義男	藤本 武雄	加藤 博司
昭和五一年	玉井	武	林 隆敏	生月 義郎	大橋 昭三	石原 奨	茅野 勲	吉田 信次	森 政彦
昭和五二年	玉井	武	林 隆敏	桜井 多市	大橋 昭三	加野 正雄	名和 正博	吉田 信次	安田 正俊
昭和五三年	玉井	武	林 隆敏	大野 久一	神谷 英男	加野 正雄	山田 岩男	末次 正二	高橋 清治
昭和五四年	玉井	武	林 隆敏	小沢 勇吉	外山 浩	加野 正雄	名和 秀雄	末次 正二	浅野 明治
昭和五五年	玉井	武	深尾吉左衛門	野々垣国男	高橋 省三	酒井 博	鈴木 幸雄	安藤 正三	尾野 桂
昭和五六年	玉井	武	深尾吉左衛門	中村幸太郎	豊田 春雄	酒井 博	加藤 幸子	安藤 正三	中島 昌臣
昭和五七年	玉井	武	深尾吉左衛門	岩田 薫	大橋 昭三	酒井 博	岩崎 一照	鷺見 善治	後藤 勝利
昭和五八年	塩谷	義雄	深尾吉左衛門	後藤 喜八	豊田 春雄	堀 達夫	鷺見 章	鷺見 善治	水谷 利良
昭和五九年	塩谷	義雄	深尾吉左衛門	後藤 喜八	桜井 悦次	堀 達夫	杉山 章夫	鷺見 隆夫	木村 昭三
昭和六〇年	塩谷	義雄	深尾吉左衛門	後藤 喜八	外山 浩	杉本 金一	松永 義和	鷺見 隆夫	森 俊夫
昭和六一年	塩谷	義雄	深尾吉左衛門	後藤 喜八	葎谷 耕三	吉田 尚弘	鈴木 幸雄	安藤 正三	加藤 利治
昭和六二年	塩谷	義雄	深尾吉左衛門	野々垣孝照	大橋 昭三	吉田 尚弘	川村 千尋	安藤 正三	安田 正俊
昭和六三年	塩谷	義雄	後藤 市郎	野々垣孝照	大橋 昭三	吉田 尚弘	岩崎 一照	小森 静夫	高橋 清治
平成元年	塩谷	義雄	後藤 市郎	大野 久一	大橋 昭三	吉田 尚弘	杉山鉦一郎	小森 静夫	浅野 明治
平成二年	塩谷	義雄	堀江 克治	大野 久一	大橋 昭三	吉田 尚弘	杉山 章夫	杉村八三男	尾野 明治
平成三年	塩谷	義雄	堀江 克治	後藤 直剛	大橋 昭三	河村 富夫	名和 秀雄	杉村八三男	中島 昌臣
平成四年	塩谷	義雄	松原 邦芳	後藤 直剛	大橋 昭三	河村 富夫	山田 岩男	吉田 孝司	後藤 勝利

年度	町名	益屋	上茶屋	下茶屋	今町1	今町2	松下	松山	夕陽ヶ丘
昭和二四年		加藤 実鷹	日比野彦吉	中川好太郎	大野 善助	村瀬 吉助	名和 正	長屋松五郎	
昭和二五年		加藤 実鷹	斉場彦太郎	中川好太郎	大野 善助	毛利 鉄吉	名和 正	長屋松五郎	
昭和二六年		加藤 実鷹	斉場彦太郎	中村 貞三	栗本清三郎	毛利 鉄吉	名和 正	長屋松五郎	
昭和二七年		加藤 実鷹	斉場彦太郎	中村 貞三	栗本清三郎	木村 市造	堀田 祝一 保男	長屋松五郎	
昭和二八年		加藤 実鷹	斉場彦太郎	中村 貞三	栗本兼次郎	吉田 広	堀田 祝一 保男	長屋松五郎	
昭和二九年		加藤 実鷹	斉場彦太郎	中村 貞三	大野 善助	吉田 広	稲葉 範一	古川 素雄	
昭和三〇年		加藤 実鷹	斉場彦太郎	中村 貞三	広瀬 勇	木村 市造	名和 正	服部 芳夫	
昭和三一年		加藤 実鷹	斉場彦太郎	伊藤 爲一	栗本兼次郎	佐藤 勝三	名和 正	森 常治郎	
昭和三二年		山口吉三郎	斉場彦太郎	早矢仕十三	岩田卯三郎	吉田 弘	名和 正	林 完一	
昭和三三年		山口吉三郎	斉場彦太郎	中村 順三	集治 幸一	木村 市造	早矢仕末吉	入江雄太郎	
昭和三四年		山口吉三郎	斉場彦太郎	森田 繁雄	大沢 保之	家田宇吉郎	早矢仕末吉	服部 胤箴	
昭和三五年		河崎久四郎	谷川 鉄男	神谷 鉦三	岩田卯三郎	吉田 弘	早矢仕末吉	森 常治郎	
昭和三六年		永田 軍二	谷川 鉄男	梅原 英三	広瀬 勇	木村 市造	堀田 保男	早川 俊治	
昭和三七年		上松 恵助	谷川 鉄男	桑原藤十郎	栗本 政男	山田 良一	堀田 保男	横山 実	
昭和三八年		杉山千代吉	吉田 清吉	篠田 芳忠	篠田 範敏	林 謙吾	堀田 保男	長屋松五郎	
昭和三九年		後藤 啓一	吉田 清吉	梅原美喜夫	広瀬 勇	木村 市造	子安 祝一	長屋松五郎	
昭和四〇年		山吉 二郎	吉田 清吉	田中 英裕	大沢 保之	家田 一雄	子安 祝一	松川 五郎	
昭和四一年		中島 鉄男	吉田 清吉	浅野 松夫	篠田 範敏	村瀬 義吉	名和 正	松川 五郎	
昭和四二年		浅野 博	吉田 清吉	石原 光春	広瀬 勇	木村 市造	名和 正	村上 勘市	
昭和四三年		後藤孝次郎	吉田 清吉	河島 陽一	山田 新	河瀬 勇雄	名和 正	村上 勘市	
昭和四四年		山吉 二郎	吉田 清吉	笹河 雅世	篠田 範敏	松野 清	名和 正	松川 五郎	
昭和四五年		森島 勇	吉田 清吉	河合 光雄	広瀬 勇	伊藤 憲一	名和 正	長屋 季雄	
									中島 鶴雄

金華校下歴代

各町広報自治会会長名

年度	町名	益屋	上茶屋	下茶屋	今町1	今町2	松下	松山	夕陽ヶ丘
昭和四六年	岡	豊三	吉田 清吉	鎌倉 光孝	栗本 政男	家田宇吉郎	堀田 保男	長屋 季雄	原 徳治
昭和四七年	山吉 二郎	吉田 清吉	山田 秀夫	大野 寛二	吉田 正	子安 祝一	堀田 保男	松川 五郎	原 徳治
昭和四八年	山吉 二郎	吉田 清吉	栗野金次郎	井上 政秋	宮島 潤次	名和 正一	名和 正一	松川 五郎	原 徳治
昭和四九年	山吉 二郎	吉田 清吉	中村 貞三	山田 良一	山田 良一	名和 正一	名和 正一	山口 哲	武藤 六郎
昭和五〇年	山吉 二郎	吉田 清吉	笠原 芳成	大野 寛二	武藤 庄一	名和 正一	名和 正一	山口 哲	武藤 六郎
昭和五一年	山吉 二郎	吉田 清吉	佐藤市太郎	井上 政秋	吉田 周平	名和 正一	名和 正一	林 昇	川田 源一
昭和五二年	山吉 二郎	吉田 清吉	浅野 吉郎	鈴木邦之助	平野 宗一	名和 正一	名和 正一	林 昇	川田 源一
昭和五三年	後藤孝次郎	吉田 清吉	笹川 正行	岩田 一郎	村瀬 義吉	名和 正一	名和 正一	林 昇	鈴木 富夫
昭和五四年	後藤孝次郎	吉田 清吉	大島 寿夫	井上 政秋	木村 富造	子安 貞男	子安 貞男	長屋 季雄	中島 龍吉
昭和五五年	後藤孝次郎	吉田 清吉	金丸 稔	安藤 藤吉	河瀬勇治郎	子安 貞男	子安 貞男	長屋 季雄	早水 勝正
昭和五六年	山吉 二郎	吉田 清吉	早矢仕和彦	杉山 俊雄	松野 清	堀田 明男	堀田 明男	長屋 季雄	中島 龍吉
昭和五七年	山吉 二郎	吉田 清吉	暮石 文男	豊田 啓治	伊藤 憲一	堀田 明男	堀田 明男	長屋 季雄	鈴木 富夫
昭和五八年	山吉 二郎	吉田 清吉	森田 正巳	安藤 藤吉	桜井 栄一	名和 正一	名和 正一	長屋 季雄	鈴木 富夫
昭和五九年	山吉 二郎	吉田 清吉	浅野 松夫	藤田 幸雄	植村 勉	名和 正一	名和 正一	長屋 季雄	野原 猛
昭和六〇年	山吉 二郎	吉田 清吉	中川 和郎	山田 禎藏	安藤 春之	白木 静	白木 静	長屋 季雄	住田 吉忠
昭和六一一年	山吉 二郎	齊場 孝彦	伊藤 逸夫	松井 保次	国井 旭	白木 静	白木 静	長屋 季雄	住田 吉忠
昭和六二年	山吉 二郎	齊場 孝彦	神谷 鉦三	小林 康二	吉田 正	子安 貞男	子安 貞男	長屋 季雄	住田 吉忠
昭和六三年	山吉 二郎	齊場 孝彦	石原 猛志	宇野 昌	宮島 潤次	子安 貞男	子安 貞男	長屋 季雄	住田 吉忠
平成元年	山吉 二郎	齊場 孝彦	河島 陽一	松井 保次	家田 一雄	中村 徹	中村 徹	長屋 季雄	新田 善勝
平成二年	山吉 二郎	齊場 孝彦	山田 秀夫	松井 保次	武藤 庄一	中村 徹	中村 徹	長屋 季雄	住田 吉忠
平成三年	山吉 二郎	齊場 孝彦	梅原 保夫	松井 保次	吉田 周平	名和 正一	名和 正一	長屋 季雄	住田 吉忠
平成四年	山吉 二郎	齊場 孝彦	田中 啓一	松井 保次	佐藤 勝二	名和 正一	名和 正一	長屋 季雄	住田 吉忠

年度	町名	夕陽ヶ丘農営	松ヶ枝南	松ヶ枝北	今町3	今町4	大仏	梶川	東材木
昭和二四年		驚見宮三郎	羽田 献吉	驚見宮三郎	窪江 一雄	浅野 久蔵	山田 孝	北川 英進	田代良三郎
昭和二五年		驚見宮三郎	羽田 献吉	窪江 一雄	浅野 久蔵	山田 孝	皆谷 徳治	田代良三郎	
昭和二六年		驚見宮三郎	羽田 献吉	窪江 一雄	浅野 久蔵	山田 孝	岩田 弥作	田代良三郎	
昭和二七年		加藤 一	羽田 献吉	飯沼 兼吉	堀 隆二	山田 孝	岩田 弥作	田代良三郎	
昭和二八年		加藤 一	羽田 献吉	飯沼 兼吉	堀 隆二	山田 孝	岩田 弥作	田代良三郎	
昭和二九年		加藤 一	大西 勝一	村瀬 甚吉	田中賢三郎	山田 孝	北川 英進	田代良三郎	
昭和三〇年		加藤 一	大西 勝一	村瀬 甚吉	堀 隆二	山田 孝	北川 英進	田代良三郎	
昭和三一年		毛利 鉄吉	大西 勝一	村瀬 甚吉	浅野 久蔵	山田 孝	野村 正一	河村 政雄	
昭和三二年		毛利 鉄吉	河合慶太郎	村瀬 甚吉	田中賢三郎	山田 孝	岩田 孫作	高橋 成明	
昭和三三年		藤井 保	河合慶太郎	村瀬 甚吉	林 弘	山田 孝	岩田 孫作	松原 周助	
昭和三四年		藤井 保	河合慶太郎	村瀬 甚吉	井上金之助	山田 孝	岩田 孫作	奥田 利雄	
昭和三五年		驚見宮治郎	河合慶太郎	村瀬 甚吉	浅野 久蔵	小松 千里	高橋 武利	田代良三郎	
昭和三六年		藤井 保	河合慶太郎	村瀬 甚吉	田中賢三郎	小松 千里	高橋 武利	奥田 利雄	
昭和三七年		藤井 保	河合慶太郎	村瀬 甚吉	堀 隆二	小松 千里	高橋 武利	奥田 利雄	
昭和三八年		毛利 友光	河合慶太郎	村瀬 甚吉	浅野 久蔵	小松 千里	高橋 武利	奥田 利雄	
昭和三九年		藤井 保	河合慶太郎	村瀬 甚吉	田中賢三郎	山田 孝	岩田 孫作	奥田 利雄	
昭和四〇年		藤井 保	河合慶太郎	窪江 一雄	浅野 久蔵	郷 浩	酒井 修	奥田 利雄	
昭和四一年		安田 健蔵	河合慶太郎	窪江 一雄	浅野 久蔵	鈴木 俊光	北川 英進	奥田 利雄	
昭和四二年		安田 健蔵	河合慶太郎	窪江 一雄	浅野 久蔵	鈴木 俊光	北川 英進	奥田 利雄	
昭和四三年		藤井 保	河合慶太郎	窪江 一雄	堀 隆二	小松 芳雄	北川 英進	永井 忠雄	
昭和四四年		藤井 保	河合慶太郎	窪江 一雄	田中賢三郎	郷 浩	北川 英進	永井 忠雄	
昭和四五年		藤井 保	河合慶太郎	窪江 一雄	富田 富雄	西ヶ谷七郎	北川 英進	永井 忠雄	

金華校下歴代

各町広報自治会会長名

年度	町名	会長名
昭和四六年	夕陽ヶ丘県営	藤井 保
昭和四七年	松ヶ枝北	藤井 保
昭和四八年	松ヶ枝南	河合慶太郎
昭和四九年	今町3	窪江 辰雄
昭和五〇年	今町4	堀 隆二
昭和五一年	大仏	片岡 章
昭和五二年	梶川	北川 英進
昭和五三年	東材木	林 基吉
昭和五四年		北川 英進
昭和五五年		北川 英進
昭和五六年		北川 英進
昭和五七年		北川 英進
昭和五八年		北川 英進
昭和五九年		北川 英進
昭和六〇年		北川 英進
昭和六一年		北川 英進
昭和六二年		北川 英進
昭和六三年		北川 英進
平成元年		北川 英進
平成二年		北川 英進
平成三年		北川 英進
平成四年		北川 英進

年度	町名	西材木	上大久和	中大桑	久屋	魚屋	上新	中新	大工
昭和二四年	森	盛一	丹羽種二郎	清水 彰	酒井 真一	吉田和三郎	神山 謙治	川出 金作	藤野 忠六
昭和二五年	森 盛一	吉田伸次郎	清水 彰	酒井 真一	吉田和三郎	神山 謙治	笠原 文蔵	藤野 忠六	藤野 忠六
昭和二六年	天野政次郎	岩井勳兵衛	富成 沢治	酒井 真一	吉田和三郎	神山 謙治	笠原 文蔵	岩田吉次郎	岩田吉次郎
昭和二七年	森 盛一	梅田 多平	野田 鳳存	酒井 真一	矢島 謹一	神山 謙治	神山 謙治	笠原 文蔵	山田由兵衛
昭和二八年	天野政次郎	梅田 多平	清水 義雄	酒井 真一	矢島 謹一	神山 謙治	神山 謙治	今西孫太郎	山田由兵衛
昭和二九年	森 盛一	桑原 恒一	小倉 武雄	酒井 真一	矢島 謹一	鍛冶谷政平	鍛冶谷政平	関谷 万吉	山田由兵衛
昭和三〇年	天野政次郎	大橋 東平	安田 梅吉	酒井 真一	矢島 謹一	鍛冶谷政平	鍛冶谷政平	村瀬 市治	川口善一郎
昭和三一年	森 盛一	大橋 東平	野々村多蔵	酒井 真一	矢島 謹一	鍛冶谷政平	鍛冶谷政平	笠原 祐司	川口善一郎
昭和三二年	天野政次郎	丹羽種次郎	安田 梅吉	酒井 真一	矢島 謹一	鍛冶谷政平	鍛冶谷政平	野村 茂	青木 道雄
昭和三三年	森 盛一	桑原 恒一	清水 義雄	酒井 真一	矢島 謹一	鍛冶谷政平	鍛冶谷政平	村瀬 市治	田中 幸一
昭和三四年	天野政次郎	名和 建彦	清水 彰	酒井 真一	矢島 謹一	鍛冶谷政平	鍛冶谷政平	村瀬 市治	松野 勇
昭和三五年	森 喜七	安倍 重敏	野々村多蔵	酒井 真一	矢島 謹一	鍛冶谷政平	鍛冶谷政平	村瀬 市治	後藤 長一
昭和三六年	天野政次郎	丹羽 清二	安田 敏吉	酒井 真一	小川幸太郎	鍛冶谷政平	鍛冶谷政平	村瀬 市治	関谷 博明
昭和三七年	森 盛一	桑原 恒一	清水 義雄	酒井 真一	大沢 東一	鍛冶谷政平	鍛冶谷政平	村瀬 市治	川口善一郎
昭和三八年	天野 太郎	大橋 富雄	清水勝太郎	酒井 真一	大沢 東一	鍛冶谷政平	鍛冶谷政平	村瀬 市治	松野 勇
昭和三九年	森 喜七	丹羽 清二	安田 梅吉	酒井 真一	大沢 東一	鍛冶谷政平	鍛冶谷政平	村瀬 市治	宗宮 次夫
昭和四〇年	天野 太郎	田幡 彦八	安田 梅吉	酒井 真一	大沢 東一	鍛冶谷政平	鍛冶谷政平	村瀬 市治	岩田 惠亮
昭和四一年	森 喜七	梅田 太郎	安田 梅吉	酒井 真一	大沢 東一	鍛冶谷政平	鍛冶谷政平	村瀬 市治	田中 幸一
昭和四二年	天野 太郎	安倍 重敏	安田 梅吉	酒井 真一	大沢 東一	鍛冶谷政平	鍛冶谷政平	村瀬 市治	松野 勇
昭和四三年	森 喜七	梅田 太郎	安田 梅吉	酒井 真一	大沢 東一	鍛冶谷政平	鍛冶谷政平	村瀬 市治	宗宮 次夫
昭和四四年	天野 太郎	丹羽 清二	安田 梅吉	酒井 真一	大沢 東一	鍛冶谷政平	鍛冶谷政平	村瀬 市治	岩田 定雄
昭和四五年	森 喜七	丹羽 清二	安田 梅吉	羽根田十四治	大沢 東一	鍛冶谷政平	鍛冶谷政平	村瀬 市治	田中 幸一

金華校下歴代

各町広報自治会会長名

年度	町名	西材木	上大久和	中大桑	久屋	魚屋	上新	中新	大工
昭和四六年	天野	太郎	山田 勝一	安田 梅吉	羽根田十四治	大沢 東一	鍛治谷政平	村瀬 市治	松野 勇
昭和四七年	森	喜七	山田 勝一	安田 梅吉	羽根田十四治	加藤 龍三	鍛治谷政平	村瀬 市治	宗宮 次夫
昭和四八年	天野	太郎	山田 勝一	安田 梅吉	羽根田十四治	加藤 龍三	鍛治谷政平	村瀬 市治	宗宮 次夫
昭和四九年	森	喜七	山田 勝一	清水 豊	羽根田十四治	加藤 龍三	鍛治谷政平	村瀬 市治	宗宮 次夫
昭和五〇年	天野	太郎	山田 勝一	阿曾 孝祐	羽根田十四治	加藤 龍三	鍛治谷政平	村瀬 市治	宗宮 次夫
昭和五一年	森	喜七	山田 勝一	清水 彰	羽根田十四治	加藤 龍三	鍛治谷政平	村瀬 市治	宗宮 次夫
昭和五二年	天野	太郎	山田 勝一	清水 幹夫	羽根田十四治	加藤 龍三	鍛治谷政平	村瀬 市治	宗宮 次夫
昭和五三年	森	喜七	山田 勝一	清水 豊	羽根田十四治	加藤 龍三	鍛治谷政平	村瀬 市治	宗宮 次夫
昭和五四年	天野	太郎	山田 勝一	阿曾 孝祐	羽根田十四治	加藤 龍三	鍛治谷政平	村瀬 市治	宗宮 次夫
昭和五五年	森	喜七	山田 勝一	清水 彰	羽根田十四治	加藤 龍三	鍛治谷政平	細野 文七	松野 栄
昭和五六年	天野	太郎	山田 勝一	清水 幹夫	羽根田十四治	加藤 龍三	浅野 恒雄	的場 正射	松野 栄
昭和五七年	森	喜七	山田 勝一	清水 豊	羽根田十四治	加藤 龍三	浅野 恒雄	的場 正射	松野 栄
昭和五八年	天野	太郎	山田 勝一	井上 保	羽根田十四治	加藤 龍三	浅野 恒雄	関谷秀太郎	松野 栄
昭和五九年	森	喜七	山田 勝一	清水 義雄	羽根田十四治	加藤 龍三	浅野 恒雄	関谷秀太郎	八田 孝
昭和六〇年	天野	太郎	山田 勝一	霜平 嘉一	羽根田十四治	加藤 龍三	浅野 恒雄	関谷秀太郎	八田 孝
昭和六一年	森	喜七	山田 勝一	久保 鍾	羽根田十四治	加藤 龍三	浅野 恒雄	関谷秀太郎	山田 由昭
昭和六二年	天野	太郎	山田 勝一	曾我部一太	金子 鏝三	加藤 龍三	浅野 恒雄	関谷秀太郎	山田 由昭
昭和六三年	森	喜七	山田 勝一	大館 慶緑	金子 鏝三	森 幾太郎	浅野 恒雄	関谷秀太郎	岩田 好令
平成元年	天野	太郎	山田 勝一	清水 幹夫	金子 鏝三	大島 四郎	浅野 恒雄	笠原 祐司	岩田 好令
平成二年	森	喜七	山田 勝一	清水 豊	金子 鏝三	吉田 隆夫	浅野 恒雄	長屋 一嘉	山下 賢三
平成三年	天野	太郎	山田 勝一	長尾 尹一	田中 和夫	青木昭一郎	神山 修次	堀田 茂	山下 賢三
平成四年	森	喜七	山田 勝一	大館 慶緑	羽根田十四治	斉藤 茂雄	神山 修次	赤山 充成	藤吉 昇

年度	町名	甚衛	下大桑	下新	布屋	本町1	本町2	本町3	靴屋
昭和四五年	巖根	史朗	生駒 八郎	岩崎 武雄	箕浦甲子男	宮田 隆一	安達 正夫	村瀬 元一	林 三郎
昭和四四年	巖根	史朗	生駒 八郎	岩崎 武雄	田村 正敏	宮田 隆一	安達 正夫	市橋庄治郎	安井鉦治郎
昭和四三年	巖根	史朗	生駒 八郎	岩崎 武雄	川出 秀子	宮田 隆一	安達 正夫	市橋庄治郎	後藤 準一
昭和四二年	巖根	史朗	棚橋 鶴雄	岩崎 武雄	矢島 晋二	宮田 隆一	集治 幸市	村瀬 元一	井川 清一
昭和四一年	林	文吉	棚橋 鶴雄	岩崎 武雄	川出千恵子	宮田 隆一	谷口 二三	村瀬 元一	山田嘉兵衛
昭和四〇年	林	文吉	棚橋 鶴雄	岩崎 武雄	植村 嘉市	渡辺幸二郎	毛利 吉光	市橋庄治郎	江崎 省三
昭和三九年	林	文吉	棚橋 鶴雄	岩崎 力丸	国枝 雪光	加藤杉次郎	毛利 吉光	市橋庄治郎	田中 良治
昭和三八年	林	文吉	棚橋 鶴雄	岩崎 力丸	高橋 弘治	浅野弥一郎	井上 隆雄	村瀬 元一	津谷 茂
昭和三七年	林	文吉	棚橋 鶴雄	岩崎 力丸	矢島 晋二	中村源次郎	日下部盛一	村瀬 元一	井尾与三吉
昭和三六年	林	文吉	棚橋 鶴雄	岩崎 力丸	矢島 晋二	加藤杉治郎	毛利 鉄吉	市橋庄治郎	伊藤 治房
昭和三五年	林	文吉	棚橋 鶴雄	岩崎 力丸	植村 嘉市	浅野弥一郎	毛利 鉄吉	市橋庄治郎	河崎貞治郎
昭和三四年	林	文吉	棚橋 鶴雄	岩崎 力丸	植村 嘉市	中村源次郎	大塚 俊一	村瀬 元一	宇佐美宗雄
昭和三三年	林	文吉	棚橋 鶴雄	岩崎 力丸	植村 嘉市	浅野弥一郎	大塚 俊一	村瀬 元一	林 三郎
昭和三二年	林	文吉	棚橋 鶴雄	岩崎 力丸	植村 嘉市	渡辺幸二郎	平光竹次郎	市橋庄治郎	木村 重雄
昭和三一年	林	文吉	棚橋 鶴雄	岩崎 力丸	植村 嘉市	村瀬 徳蔵	野尻 一映	伏屋弥三雄	杉原 元治
昭和三〇年	林	文吉	生駒 八郎	岩崎 力丸	植村 嘉市	浅野弥一郎	野尻 一映	村瀬 元一	宇佐見宗雄
昭和二九年	林	文吉	生駒 八郎	岩崎 力丸	植村 嘉市	大野 軍治	今西利右門	市橋庄治郎	山田嘉兵衛
昭和二八年	林	文吉	山口 良作	岩崎 力丸	植村 嘉市	渡辺幸二郎	長屋 富治	市橋庄治郎	宮島助三郎
昭和二七年	林	文吉	北川 鶴雄	岩崎 力丸	松田儀三郎	浅野弥一郎	加藤甲子郎	村瀬 元一	鹿島 健一
昭和二六年	林	文吉	豊田 未政	岩崎 力丸	松田儀三郎	中村源次郎	谷口 二三	村瀬 元一	宇佐見宗雄
昭和二五年	林	文吉	豊田 未政	岩崎 力丸	松田儀三郎	神山和兵衛	村橋 武志	村瀬 元一	安藤 三郎
昭和二四年	林	文吉	豊田 未政	岩崎 力丸	松田儀三郎	浅野弥一郎	田中 豊	村瀬 元一	梅田金二郎

金華校下歴代 各町広報自治会会長名

年度	町名	甚衛	下大桑	下新	布屋	本町1	本町2	本町3	靴屋
昭和四六年	巖崎	史朗	生駒 八郎	岩崎 武雄	後藤 銀一	宮田 隆一	村橋 武志	村瀬 元一	三輪 量平
昭和四七年	巖崎	史朗	生駒 八郎	岩崎 武雄	熊野 静江	宮田 隆一	野原 辰雄	加藤 英雄	桜井 康二
昭和四八年	巖崎	史朗	生駒 八郎	岩崎 武雄	松田 儀一	宮田 隆一	野原 辰雄	加藤 英雄	安井 一郎
昭和四九年	巖崎	史朗	生駒 八郎	岩崎 武雄	松田 儀一	宮田 隆一	野原 辰雄	村瀬 元一	河田寿恵子
昭和五〇年	巖崎	史朗	生駒 八郎	岩崎 武雄	松田 儀一	宮田 隆一	野原 辰雄	村瀬 元一	柴山 正彦
昭和五一年	巖崎	史朗	生駒 八郎	岩崎 武雄	松田 儀一	宮田 隆一	後藤 道雄	加藤 英雄	福田 良夫
昭和五二年	巖崎	史朗	生駒 八郎	岩崎 武雄	松田 儀一	宮田 隆一	後藤 道雄	加藤 英雄	伊藤 治房
昭和五三年	巖崎	史朗	上田 好一	岩崎 武雄	松田 儀一	宮田 隆一	永田勝次郎	村瀬 元一	井尾 一男
昭和五四年	巖崎	史朗	村上文夫	岩崎 武雄	松田 儀一	宮田 隆一	永田勝次郎	村瀬 元一	宇佐見 弘
昭和五五年	巖崎	史朗	福井 弘	岩崎 武雄	松田 儀一	宮田 隆一	宇野 正雄	加藤 英雄	岩島 和一
昭和五六年	巖崎	史朗	上田 好一	岩崎 武雄	国枝 雪光	宮田 隆一	宇野 正雄	加藤 英雄	江崎 省三
昭和五七年	巖崎	史朗	上田 好一	岩崎 武雄	箕浦甲子男	宮田 隆一	後藤 道雄	村瀬 元一	堀 恒夫
昭和五八年	巖崎	史朗	村上文夫	岩崎 武雄	箕浦甲子男	神谷 治郎	後藤 道雄	村瀬 武夫	平井 勝
昭和五九年	巖崎	史朗	村上文夫	岩崎 武雄	箕浦甲子男	神谷 治郎	井上 隆雄	加藤 英雄	杉原 元治
昭和六〇年	巖崎	史朗	福井 弘	岩崎 武雄	後藤 銀一	神谷 治郎	井上 隆雄	加藤 英雄	梅田 博
昭和六一年	巖崎	史朗	福井 弘	岩崎 武雄	後藤 銀一	宮田 芳	宇野 正雄	村瀬 武夫	千葉 薫
昭和六二年	巖崎	史朗	上田 好一	岩崎 武雄	矢島 一雄	宮田 芳	宇野 正雄	村瀬 武夫	津谷 直彦
昭和六三年	巖崎	史朗	上田 好一	岩崎 武雄	矢島 一雄	宮田 芳	野尻 卓甫	加藤 英雄	鹿島 勝美
平成元年	巖崎	史朗	上田 好一	岩崎 武雄	森 一郎	白木 三吉	野尻 卓甫	加藤 英雄	安井 鈺治郎
平成二年	巖崎	史朗	史朗	岩崎 武雄	森 一郎	宮田 芳	服部 洋三	村瀬 武夫	野々村雅章
平成三年	巖崎	史朗	史朗	岩崎 武雄	熊野 良一	吉岡 源一	林 三郎	村瀬 武夫	桑原 義雄
平成四年	巖崎	史朗	史朗	岩崎 武雄	熊野 良一	郷 浩	林 三郎	市橋 庄介	佐久間大治

年度	町名	末広北	末広南	末広西	新桜	上竹屋	中竹屋	大和	間之
昭和四五年		坂井弥十郎	棚橋 景一	平光 勇	河合源之助	伊藤 萬作	村木久一郎	川島 兵助	杉山 一男
昭和四四年		藤井栄次郎	棚橋 景一	平光 勇	河合源之助	伊藤 萬作	村木久一郎	川島 兵助	杉山 一男
昭和四三年		藤井栄次郎	藤井 悦二	平光 勇	河合源之助	藤田 皖護	村木久一郎	川島 兵助	杉山 一男
昭和四二年		藤井栄次郎	藤井 悦二	平光 勇	河合源之助	藤田 皖護	村木久一郎	川島 兵助	杉山 一男
昭和四一年		坂井弥十郎	藤井 悦二	野村 理一	河合源之助	藤田 皖護	村木久一郎	川島 兵助	伏屋 圭一
昭和四〇年		坂井弥十郎	藤井 悦二	野村 理一	河合源之助	河口 玄昌	村木久一郎	川島 兵助	伏屋 圭一
昭和三九年		集治栄太郎	藤井 悦二	野村 理一	河合源之助	河口 玄昌	村木久一郎	川島 兵助	杉山 一男
昭和三八年		藤井栄次郎	藤井 悦二	野村 理一	河合源之助	河口 玄昌	村木久一郎	川島 兵助	杉山 一男
昭和三七年		藤井栄次郎	中川兵右工門	野村 理一	河合源之助	河口 玄昌	村木久一郎	川島 兵助	杉山 一男
昭和三六年		藤井栄次郎	中川兵右工門	野村 理一	河合源之助	河口 玄昌	村木久一郎	川島 兵助	平野 美喜
昭和三五年		集治栄太郎	中川兵右工門	野村 理一	河合源之助	河口 玄昌	村木久一郎	川島 兵助	並河 正雄
昭和三四年		集治栄太郎	河合 喜助	野村 理一	河合源之助	河口 玄昌	村木久一郎	川島 兵助	恩田 吉郎
昭和三三年		集治栄太郎	河合 喜助	野村 理一	河合源之助	河口 玄昌	村木久一郎	川島 兵助	恩田 吉郎
昭和三二年		藤井栄次郎	中川兵右工門	野村 理一	河合源之助	河口 玄昌	村木久一郎	川島 兵助	並河 正雄
昭和三一年		藤井栄次郎	中川兵右工門	野村 理一	河合源之助	河口 玄昌	村木久一郎	川島 兵助	並河 正雄
昭和三〇年		藤井栄次郎	中川兵右工門	野村 理一	河合源之助	河口 玄昌	村木久一郎	川島 兵助	並河 正雄
昭和二九年		浅井 昌雄	中川兵右工門	野村 理一	河合源之助	河口 玄昌	村木久一郎	川島 兵助	矢野 定見
昭和二八年		浅井 昌雄	中川兵右工門	小森 義雄	河合源之助	河口 玄昌	村木久一郎	川島 兵助	伏屋 圭一
昭和二七年		浅井 昌雄	奥田吉次郎	小森 義雄	河合源之助	河口 玄昌	村木久一郎	川島 兵助	矢野 定見
昭和二六年		浅井 昌雄	河合 喜助	白井 義晴	島田 政夫	河口 玄昌	村木久一郎	川島 兵助	恩田 吉郎
昭和二五年		浅井 昌雄	堀 善三郎	小森 義雄	島田 政夫	河口 玄昌	村木久一郎	川島 兵助	伏屋 圭一
昭和二四年		浅井 与七	河口 栄吉	小森 義雄	島田 政夫	河口 玄昌	村木久一郎	川島 兵助	伏屋 圭一

金華校下歴代

各町広報自治会会長名

年度	町名	末広北	末広南	末広西	新桜	上竹屋	中竹屋	大和	間之
昭和四六年	坂井弥十郎	藤井悦二	井上秀雄	河合源之助	伊藤萬作	村木久一郎	川島兵助	杉山一男	
昭和四七年	坂井弥十郎	藤井悦二	井上秀雄	河合源之助	伊藤萬作	村木久一郎	川島兵助	杉山一男	
昭和四八年	藤井栄次郎	藤井悦二	井上秀雄	河合源之助	伊藤萬作	村木久一郎	川島兵助	杉山一男	
昭和四九年	藤井栄次郎	藤井悦二	井上秀雄	河合源之助	伊藤萬作	村木久一郎	川島兵助	村瀬捨雄	
昭和五〇年	藤井栄次郎	藤井悦二	井上秀雄	河合源之助	伊藤萬作	村木久一郎	川島兵助	伏屋圭一	
昭和五一年	坂井弥十郎	藤井悦二	井上秀雄	河合源之助	伊藤萬作	村木久一郎	川島兵助	井上末男	
昭和五二年	坂井弥十郎	藤井悦二	井上秀雄	河合源之助	伊藤萬作	村木久一郎	川島兵助	宮崎進一	
昭和五三年	坂井弥十郎	藤井悦二	井上秀雄	河合源之助	伊藤萬作	村木久一郎	川島兵助	恩田秋芳	
昭和五四年	藤井栄次郎	棚橋景一	平光勇	長屋富雄	伊藤萬作	村木久一郎	川島兵助	恩田正巳	
昭和五五年	藤井栄次郎	棚橋景一	平光勇	野村貞彦	伊藤萬作	村木久一郎	川島兵助	並河雄二	
昭和五六年	林彰一郎	棚橋景一	平光勇	内田弘	伊藤萬作	村木久一郎	川島兵助	今村隆夫	
昭和五七年	林彰一郎	棚橋景一	平光勇	内田弘	伊藤萬作	村木久一郎	川島兵助	村瀬捨雄	
昭和五八年	林彰一郎	棚橋景一	平光勇	深津宗治	伊藤萬作	村木久一郎	井上幸平	野村正由	
昭和五九年	五十川清一	安藤九一	平光勇	深津宗治	伊藤萬作	村木久一郎	古田弥三郎	並河雄二	
昭和六〇年	五十川清一	安藤九一	平光勇	深津宗治	伊藤萬作	川崎作衛	小野義秋	伏屋圭一	
昭和六一年	五十川清一	堀重雄	平光勇	深津宗治	伊藤萬作	松久博志	小野義秋	伏屋圭一	
昭和六二年	五十川清一	堀重雄	平光勇	船橋聖夫	伊藤萬作	川崎作衛	小野義秋	伏屋圭一	
昭和六三年	五十川清一	堀重雄	平光勇	深津宗治	伊藤萬作	川崎作衛	小野義秋	伏屋圭一	
平成元年	坂井進	堀重雄	平光勇	河合鎮治	大塚之夫	西川正美	小野義秋	杉山一男	
平成二年	坂井進	堀重雄	坂井田清一	早川孝夫	大塚之夫	清水康司	棚橋芳男	杉山一男	
平成三年	坂井進	堀重雄	坂井田清一	内田弘	大塚之夫	川崎作衛	棚橋芳男	杉山一男	
平成四年	五十川清一	安藤九一	坂井田清一	伊藤佳久	天野晟爾	日下部泰雄	棚橋芳男	杉山一男	

年度	町名	米屋	伊奈波1	伊奈波2	万力	白木	常磐	松屋
昭和二十四年	大野 虎治	豊田 貞隆	森 碩市	真鍋 恵山	三品嘉十郎	伊藤直二郎	山田 吉蔵	
昭和二十五年	大野 虎治	豊田 貞隆	森 碩市	真鍋 恵山	三品嘉十郎	伊藤直二郎	山田 吉蔵	
昭和二十六年	山内勝太郎	豊田 貞隆	森 碩市	真鍋 恵山	三品嘉十郎	伊藤直二郎	山田 吉蔵	
昭和二十七年	山内勝太郎	説田 俊治	森 碩市	真鍋 恵山	三品嘉十郎	武山 助弥	山田 吉蔵	
昭和二十八年	山内勝太郎	説田 俊治	森 碩市	真鍋 恵山	三品嘉十郎	川田 勇	山田 吉蔵	
昭和二十九年	山内勝太郎	栗木 隆耀	加藤 善一	真鍋 恵山	牧村 信吉	伊藤直二郎	鷺見吉兵衛	
昭和三十年	小坂井英司	栗木 隆耀	森 碩市	黒部 利七	牧村 信吉	伊藤直二郎	鷺見吉兵衛	
昭和三十一年	長村 禎三	栗木 隆耀	森 碩市	黒部 利七	牧村 信吉	大洞弥兵衛	鷺見吉兵衛	
昭和三十二年	松山 清高	栗木 隆耀	森 碩市	黒部 利七	牧村 信吉	大洞弥兵衛	鷺見吉兵衛	
昭和三十三年	尾関 一郎	栗木 隆耀	森 碩市	黒部 利七	牧村 信吉	林 宇吉	鷺見吉兵衛	
昭和三十四年	尾関 一郎	説田 俊治	森 碩市	黒部 利七	牧村 信吉	林 宇吉	鷺見吉兵衛	
昭和三十五年	尾関 一郎	説田 俊治	市田 伸	黒部 利七	牧村 信吉	林 宇吉	鷺見吉兵衛	
昭和三十六年	尾関 一郎	説田 俊治	市田 伸	黒部 利七	牧村 信吉	林 宇吉	鷺見吉兵衛	
昭和三十七年	尾関 一郎	説田 俊治	市田 伸	黒部 利七	牧村 信吉	林 宇吉	鷺見吉兵衛	
昭和三十八年	尾関 一郎	説田 俊治	市田 伸	黒部 利七	牧村 信吉	林 宇吉	鷺見吉兵衛	
昭和三十九年	尾関 一郎	説田 俊治	市田 伸	黒部 利七	牧村 信吉	林 宇吉	鷺見吉兵衛	
昭和四〇年	尾関 一郎	説田 俊治	市田 伸	黒部 利七	牧村 信吉	林 宇吉	鷺見吉兵衛	
昭和四一年	尾関 一郎	説田 俊治	市田 伸	黒部 利七	牧村 信吉	林 宇吉	鷺見吉兵衛	
昭和四二年	尾関 一郎	説田 俊治	市田 伸	黒部 利七	牧村 信吉	林 宇吉	鷺見吉兵衛	
昭和四三年	尾関 一郎	説田 俊治	市田 伸	黒部 利七	牧村 信吉	林 宇吉	鷺見吉兵衛	
昭和四四年	尾関 一郎	説田 俊治	市田 伸	黒部 利七	牧村 信吉	林 宇吉	鷺見吉兵衛	
昭和四五年	尾関 一郎	説田 俊治	市田 伸	黒部 利七	牧村 信吉	林 宇吉	鷺見吉兵衛	

金華校下歴代

各町広報自治会会長名

年度	町名	米屋	伊奈波1	伊奈波2	万力	白木	常磐	松屋
昭和四六年	尾関	尾関 一郎	裁松 完道	市田 伸	西野市次郎	西川 正一	伊藤 正一	篠田喜兵衛
昭和四七年	尾関	尾関 一郎	裁松 完道	市田 伸	西野市次郎	若井 秀一	伊藤 正一	篠田喜兵衛
昭和四八年	尾関	尾関 一郎	裁松 完道	市田 伸	清水 保	宇佐見浩一	林 宇吉	篠田喜兵衛
昭和四九年	尾関	尾関 一郎	裁松 完道	市田 伸	清水 保	白木 武夫	水戸 栄一	篠田喜兵衛
昭和五〇年	尾関	尾関 一郎	裁松 完道	水野 一大	清水 保	白木 武夫	水戸 栄一	篠田喜兵衛
昭和五一年	尾関	尾関 一郎	裁松 完道	水野 一大	清水 保	西川 正一	水戸 栄一	篠田喜兵衛
昭和五二年	尾関	尾関 一郎	裁松 完道	水野 一大	清水 保	白木 武夫	水戸 栄一	篠田喜兵衛
昭和五三年	尾関	尾関 一郎	裁松 完道	水野 一大	清水 保	白木 武夫	水戸 栄一	篠田喜兵衛
昭和五四年	尾関	尾関 一郎	松波 秀顕	水野 一大	清水 保	小林 昌次	大洞弥兵衛	篠田喜兵衛
昭和五五年	尾関	尾関 一郎	松波 秀顕	水野 一大	清水 保	田辺 照夫	大洞弥兵衛	篠田喜兵衛
昭和五六年	尾関	尾関 一郎	豊田 貞隆	水野 一大	西野 洋一	白木 武夫	林 宇吉	山本佐一郎
昭和五七年	尾関	尾関 一郎	杉山 稔	水野 一大	西野 洋一	宇佐見浩一	伊藤 好忠	山本佐一郎
昭和五八年	尾関	尾関 一郎	細江 茂之	水野 一大	西野 洋一	宇佐見浩一	渡辺 定	山本佐一郎
昭和五九年	尾関	尾関 一郎	中井 教演	水野 一大	西野 洋一	田辺 照夫	渡辺 定	篠田喜兵衛
昭和六〇年	尾関	尾関 一郎	雄山 瑞年	水野 一大	西野 洋一	田辺 照夫	渡辺 定	篠田喜兵衛
昭和六一年	尾関	尾関 一郎	青木 俊孝	水野 一大	西野 洋一	白木 武夫	渡辺 定	篠田喜兵衛
昭和六二年	尾関	尾関 一郎	白木 美好	水野 一大	西野 洋一	白木 武夫	渡辺 定	篠田喜兵衛
昭和六三年	尾関	尾関 一郎	林 善次郎	水野 一大	西野 洋一	服部 醉	渡辺 定	篠田喜兵衛
平成元年	尾関	尾関 一郎	安藤 寿郎	水野 一大	西野 洋一	服部 醉	渡辺 定	篠田喜兵衛
平成二年	尾関	尾関 一郎	宇都宮 正	水野 一大	西野 洋一	鈴木 勇	渡辺 定	篠田喜兵衛
平成三年	尾関	尾関 一郎	水谷 一雄	水野 一大	西野 洋一	鈴木 勇	渡辺 定	篠田喜兵衛
平成四年	尾関	尾関 一郎	武藤 正義	青山 英男	西野 洋一	西川 長生	眞野 昭治	大橋益三郎

年度	町名	栄	扇	矢島1上	矢島1中	矢島1下	伊奈波3	本町4	本町5
昭和二四年	山田 助吉	田内領之助	長屋 文治	田中 永吉	松野利三郎	高橋 英吉	村上 義勝	神谷利三郎	
昭和二五年	山田 助吉	田内領之助	長屋 文治	田中 永吉	松野利三郎	高橋 英吉	村上 義勝	神谷利三郎	
昭和二六年	山田 助吉	田内領之助	長屋 文治	松倉 直吉	松野利三郎	高橋 英吉	村上 義勝	山田善次郎	
昭和二七年	山田 助吉	田内領之助	長屋 文治	松倉 直吉	松野利三郎	高橋 英吉	村上 義勝	佐藤 近一	
昭和二八年	山田 助吉	田内領之助	長屋 文治	松倉 直吉	松野利三郎	高橋 英吉	村上 義勝	佐藤 近一	
昭和二九年	山田 助吉	田内領之助	松倉 直吉	松倉 直吉	松野利三郎	高橋 英吉	神谷 作市	佐藤 近一	
昭和三〇年	杉山作太郎	田内領之助	寺沢 勇	松倉 直吉	松野 憲三	高橋 英吉	神谷 作市	棚橋 兼太郎	
昭和三一年	杉山作太郎	田内領之助	近藤 奥一	松倉 直吉	近藤 奥一	高橋 英吉	貝崎 準一	浅井 兼松	
昭和三二年	杉山作太郎	田内領之助	高橋 倉吉	松倉 直吉	高橋 倉吉	高橋 英吉	貝崎 準一	浅井 兼松	
昭和三三年	杉山作太郎	田内領之助	松倉 直吉	松倉 直吉	高橋 倉吉	高橋 英吉	神谷 作市	加藤 静治	
昭和三四年	杉山作太郎	田内領之助	松倉 直吉	松倉 直吉	松野 憲三	高橋 英吉	神谷 作市	加藤 静治	
昭和三五年	杉山作太郎	田内領之助	松倉 直吉	松倉 直吉	松野 憲三	高橋 英吉	神谷 作市	加藤 静治	
昭和三六年	杉山作太郎	田内領之助	松倉 直吉	松倉 直吉	松野 憲三	高橋 英吉	西村金治郎	加藤 静治	
昭和三七年	杉山作太郎	田内領之助	松倉 直吉	松倉 直吉	松野 憲三	高橋 英吉	西村金治郎	加藤 静治	
昭和三八年	杉山作太郎	田内領之助	松倉 直吉	松倉 直吉	松野 憲三	高橋 英吉	神谷 作市	加藤 静治	
昭和三九年	杉山作太郎	田内領之助	松倉 直吉	松倉 直吉	松野 憲三	高橋 英吉	神谷 作市	加藤 静治	
昭和四〇年	山田 定	山田 定	松野 憲三	松野 憲三	松野 憲三	高橋 英吉	西村金治郎	加藤 静治	
昭和四一年	山田 定	山田 定	松野 憲三	松野 憲三	松野 憲三	高橋 英吉	西村金治郎	加藤 静治	
昭和四二年	山田 定	山田 定	松野 憲三	松野 憲三	松野 憲三	高橋 英吉	西村金治郎	加藤 静治	
昭和四三年	山田 定	山田 定	松野 憲三	松野 憲三	松野 憲三	高橋 英吉	神谷 作市	加藤 静治	
昭和四四年	山田 定	山田 定	松野 憲三	松野 憲三	松野 憲三	高橋 英吉	西村金治郎	加藤 静治	
昭和四五年	山田 定	山田 定	松野 憲三	松野 憲三	松野 憲三	高橋 英吉	神谷 作市	加藤 静治	

金華校下歴代各町広報自治会会長名

年度	町名	栄扇町	矢島1上	矢島1中	矢島1下	伊奈波3	本町4	本町5
昭和四六年	山田 定	窪田 定雄	田中 永吉	松野 憲三	高橋 英吉	西村金治郎	加藤 静治	
昭和四七年	山田 定	窪田 定雄	田中 永吉	松野 憲三	高橋 英吉	神谷 作市	加藤 静治	
昭和四八年	山田 定	杉本 勇次	田中 永吉	松野 憲三	高橋 英吉	西村金治郎	加藤 静治	
昭和四九年	山田 定	杉本 勇次	田中 永吉	松野 憲三	高橋 英吉	神谷 作市	加藤 静治	
昭和五〇年	山田 定	杉本 勇次	鬼頭 茂一	松野 憲三	高橋 英吉	西村金治郎	加藤 静治	
昭和五一年	山田 定	堀田 恒吉	鬼頭 茂一	松野 憲三	高橋 英吉	神谷 作市	加藤 静治	
昭和五二年	山田 定	若園 丁二	鬼頭 茂一	松野 憲三	高橋 英吉	西村金治郎	加藤 静治	
昭和五三年	山田 定	若園 丁二	鬼頭 茂一	松野 憲三	高橋 英吉	神谷 作市	加藤 静治	
昭和五四年	山田 定	若園 丁二	足立 正勝	松野 憲三	高橋 英吉	西村金治郎	加藤 静治	
昭和五五年	山田 定	若園 丁二	足立 正勝	松野 憲三	高橋 英吉	神谷 作市	加藤 静治	
昭和五六年	山田 定	若園 丁二	鬼頭 茂一	松野 憲三	高橋 英吉	西村金治郎	加藤 静治	
昭和五七年	山田 定	今村 昭三	鬼頭 茂一	松野 憲三	高橋 英吉	神谷 作市	加藤 静治	
昭和五八年	波賀野良三	今村 昭三	鬼頭 茂一	松野 憲三	高橋 郁也	西村金治郎	加藤 静治	
昭和五九年	波賀野良三	辻 惣一	鬼頭 茂一	松野 憲三	高橋 郁也	神谷 作市	加藤 静治	
昭和六〇年	波賀野良三	辻 惣一	鬼頭 茂一	松野 憲三	高橋 郁也	西村金治郎	加藤 静治	
昭和六一年	山田 憲一	辻 惣一	鬼頭 茂一	松野 憲三	高橋 郁也	神谷 作市	堀 重吉	
昭和六二年	山田 憲一	杉本 勇次	足立 正勝	松野 憲三	高橋 郁也	貝崎 栄一	堀 重吉	
昭和六三年	山田 憲一	杉本 勇次	足立 正勝	松野 憲三	高橋 郁也	貝崎 栄一	堀 重吉	
平成元年	波賀野良三	杉本 勇次	足立 正勝	松野 憲三	高橋 郁也	貝崎 栄一	松尾 太郎	
平成二年	波賀野良三	藤沢 武治	足立 正勝	松野 憲三	高橋 郁也	貝崎 栄一	松尾 太郎	
平成三年	波賀野良三	藤沢 武治	山田 好雄	寺沢 勇	片桐 豊	貝崎 栄一	武山 媾	
平成四年	波賀野良三	藤沢 武治	山田 好雄	寺沢 勇	片桐 豊	貝崎 栄一	武山 媾	
						貝崎 栄一	佐藤勲一郎	

年度	町名	本町6	本町7	矢島2	啓運	木造東	木造西
昭和二四年	浅野 菅二	丸毛 正男	松井勝太郎	河野 利明	伊藤 寿一	野田 円一	
昭和二五年	浅野 菅二	丸毛 正男	松井勝太郎	河野 利明	塩谷 栄二郎	野田 円一	
昭和二六年	松尾敬一郎	細江 鎌次	松井勝太郎	山村 清	若染 一雄	栗田 勘一	
昭和二七年	松尾敬一郎	杉山金次郎	松井勝太郎	山村 清	若染 一雄	栗田 勘一	
昭和二八年	多賀 末吉	杉山金次郎	松井勝太郎	山村 清	若染 一雄	栗田 勘一	
昭和二九年	多賀 末吉	杉山金次郎	松井勝太郎	山村 清	若染 一雄	栗田 勘一	
昭和三〇年	多賀 末吉	杉山金次郎	林 菊太郎	山村 清	若染 一雄	栗田 勘一	
昭和三一年	多賀 末吉	羽田野国太郎	林 菊太郎	山村 清	若染 一雄	野田 円一	
昭和三二年	多賀 末吉	稲葉 一兵	林 菊太郎	山村 清	若染 一雄	野田 円一	
昭和三三年	飯田 留一	稲葉 一兵	林 菊太郎	山村 清	若染 一雄	野田 円一	
昭和三四年	飯田 留一	杉山金次郎	林 菊太郎	垣田 利雄	若染 一雄	野田 円一	
昭和三五年	飯田 留一	杉山金次郎	林 菊太郎	垣田 利雄	水野 後八	野田 円一	
昭和三六年	飯田 留一	稲葉 一兵	林 菊太郎	垣田 利雄	水野 後八	野田 円一	
昭和三七年	棚橋竹次郎	稲葉 一兵	林 菊太郎	垣田 利雄	水野 後八	野田 円一	
昭和三八年	飯田 留一	石神国太郎	小林 嘉美	山村 清	水野 後八	野田 円一	
昭和三九年	高見 利一	石神国太郎	小林 嘉美	山村 清	若染 一雄	野田 円一	
昭和四〇年	高見 利一	石神国太郎	小林 嘉美	山村 清	若染 一雄	野田 円一	
昭和四一年	高見 利一	石神国太郎	小林 嘉美	山村 清	若染 一雄	野田 円一	
昭和四二年	吉田 豊	石神国太郎	小林 嘉美	山村 清	若染 一雄	中野 広吉	
昭和四三年	吉田 豊	稲葉 一兵	小林 嘉美	山村 清	若染 一雄	中野 広吉	
昭和四四年	飯田 留一	稲葉 一兵	小林 嘉美	山村 清	若染 一雄	田中 嘉一	
昭和四五年	細野 利吉	稲葉 一兵	小林 嘉美	山村 清	若染 一雄	栗田 勘一	

金華校下歴代

各町広報自治会会長名

年度	町名	本町6	本町7	矢島2	啓運	木造東	木造西	ユ一ハウス岐阜
昭和四六年	細野 利吉	稲葉 一兵	小林 嘉美	山村 清	若染 一雄	栗田 勘一		
昭和四七年	多賀 末吉	細田 乙一	小林 嘉美	山村 清	若染 一雄	栗田 勘一		
昭和四八年	矢島 清	稲葉 迪男	小林 嘉美	山村 清	若染 一雄	鈴木太一郎		
昭和四九年	渡辺重三郎	溝口 勇吉	小林 嘉美	山村 清	若染 一雄	小野木正隆		
昭和五〇年	田中 文一	溝口 勇吉	船戸 茂雄	山村 清	若染 一雄	中野 広吉		
昭和五一年	鷺見 雄吉	石神 千尋	高城 義之	桜井 政雄	若染 一雄	若染 達男		
昭和五二年	佐々木 太郎	石神 千尋	小林 嘉美	桜井 政雄	若染 一雄	小野木正隆		
昭和五三年	藤井 義明	羽田野 寛	小林 嘉美	桜井 政雄	若染 一雄	中野 広吉		
昭和五四年	石山 一男	羽田野 寛	小林 嘉美	桜井 政雄	若染 一雄	山田 邦夫		
昭和五五年	三井 信平	細田 乙一	小林 嘉美	桜井 政雄	若染 一雄	野田 孟		
昭和五六年	山本 美芳	細田 乙一	小林 嘉美	桜井 政雄	若染 一雄	若染 達男		
昭和五七年	浅野 芳和	細田 乙一	小林 嘉美	桜井 政雄	若染 一雄	小野木正隆		
昭和五八年	三井 信平	細田 乙一	小林 嘉美	桜井 政雄	若染 一雄	中野 広吉		
昭和五九年	平田 直也	細田 乙一	小林 嘉美	桜井 政雄	若染 一雄	野田 孟		
昭和六〇年	田中 睦	細田 乙一	小林 嘉美	桜井 政雄	伊藤 泰雄	河田 光幸		
昭和六一一年	三井 信平	細田 乙一	小林 嘉美	桜井 政雄	伊藤 泰雄	若染 達男		
昭和六二年	三井 信平	細田 乙一	小林 嘉美	酒井 照峯	伊藤 泰雄	野田 孟		
昭和六三年	三井 信平	細田 乙一	小林 嘉美	酒井 照峯	伊藤 泰雄	小野木正隆		
平成元年	鷺見 雄吉	細田 乙一	小林 嘉美	酒井 照峯	伊藤 泰雄	河田 光幸		
平成二年	加藤 元重	細田 乙一	小林 嘉美	酒井 照峯	伊藤 泰雄	若染 達男		
平成三年	田中 郁雄	細田 乙一	小林 嘉美	酒井 照峯	伊藤 泰雄	野田 孟		
平成四年	浅野 芳和	細田 乙一	小林 嘉美	酒井 照峯	伊藤 泰雄	河田 光幸		
								石井 輝雄

年度	役職名	知事	市長	顧問	相談役	会長	副会長	副会長
昭和二四年	武藤 嘉門	東 前豊	森瀨 鋼一	後藤 喜八	国島 継男	豊田 貞隆		
昭和二五年	武藤 嘉門	東 前豊	水野 後八	後藤 喜八	若染 一雄	村上 義勝		
昭和二六年	武藤 嘉門	東 前豊	松倉 直吉	後藤 喜八	若染 一雄	村上 義勝		
昭和二七年	武藤 嘉門	東 前豊	森瀨 鋼一	後藤 喜八	若染 一雄	村上 義勝		
昭和二八年	武藤 嘉門	東 前豊	松倉 直吉	後藤 喜八	若染 一雄	村上 義勝		
昭和二九年	武藤 嘉門	東 前豊	森瀨 鋼一	後藤 喜八	若染 一雄	村上 義勝		
昭和三〇年	武藤 嘉門	松尾 吾策	森瀨 鋼一	後藤 喜八	浅井 昌雄	村上 義勝		
昭和三一年	武藤 嘉門	松尾 吾策	松倉 直吉	後藤 喜八	浅井 昌雄	村上 義勝		
昭和三二年	武藤 嘉門	松尾 吾策	松倉 直吉	後藤 喜八	若染 一雄	村上 義勝		

金華校下歴代

広報自治会連合会役員名

昭和二二年	昭和三二年	昭和三三年	昭和三四年	昭和三五年	昭和三六年	昭和三七年	昭和三八年	昭和三九年	昭和三九年	昭和四〇年	昭和四一年	昭和四二年	年度	役職名
平野 三郎	平野 三郎	松野 幸泰	松野 幸泰	松野 幸泰	松野 幸泰	松野 幸泰	松野 幸泰	松野 幸泰	松野 幸泰	松野 幸泰	松野 三郎	平野 三郎	昭和二二年	知事
松尾 吾策	松尾 吾策	松尾 吾策	松尾 吾策	松尾 吾策	松尾 吾策	松尾 吾策	松尾 吾策	松尾 吾策	松尾 吾策	松尾 吾策	松尾 吾策	松尾 吾策	昭和四二年	市長
水野 後八	水野 後八	水野 後八	水野 後八	水野 後八	水野 後八	水野 後八	水野 後八	水野 後八	水野 後八	水野 後八	水野 後八	水野 後八	昭和四二年	顧問
														相談役
後藤 喜八	後藤 喜八	後藤 喜八	後藤 喜八	後藤 喜八	後藤 喜八	後藤 喜八	後藤 喜八	後藤 喜八	後藤 喜八	後藤 喜八	後藤 喜八	後藤 喜八	昭和四二年	会長
							河口 玄昌	河口 玄昌	河口 玄昌	河口 玄昌			昭和四二年	
高橋 英吉	高橋 英吉	高橋 英吉	高橋 英吉	高橋 英吉	高橋 英吉	高橋 英吉	高橋 英吉	高橋 英吉	高橋 英吉	高橋 英吉	高橋 英吉	高橋 英吉	昭和四二年	副会長
村木久一郎	村木久一郎	村木久一郎	村木久一郎	村木久一郎	村木久一郎	村木久一郎	村木久一郎	村木久一郎	村木久一郎	村木久一郎	村木久一郎	村木久一郎	昭和四二年	副会長
杉山 勝治	杉山 勝治	杉山 勝治	杉山 勝治	杉山 勝治	杉山 勝治	杉山 勝治	杉山 勝治	杉山 勝治	杉山 勝治	杉山 勝治	杉山 勝治	杉山 勝治	昭和四二年	副会長

昭 和 五 六 年	昭 和 五 五 年	昭 和 五 四 年	昭 和 五 三 年	昭 和 五 二 年	昭 和 五 一 年	昭 和 五 〇 年	昭 和 四 九 年	昭 和 四 八 年	昭 和 四 七 年	昭 和 四 六 年	昭 和 四 五 年	昭 和 四 四 年	昭 和 四 三 年	年 度 役 職 名
上松陽助	上松陽助	上松陽助	上松陽助	上松陽助	平野三郎	平野三郎	平野三郎	平野三郎	平野三郎	平野三郎	平野三郎	平野三郎	平野三郎	知事
蒔田浩	蒔田浩	蒔田浩	蒔田浩	蒔田浩	上松陽助	上松陽助	上松陽助	上松陽助	上松陽助	上松陽助	上松陽助	松尾吾策	松尾吾策	市長
										松倉直吉	松倉直吉	松倉直吉	松倉直吉	顧問
村木久一郎	村木久一郎	窪江辰雄	窪江辰雄	窪江辰雄	窪江辰雄	窪江辰雄	窪江辰雄	窪江辰雄	村木久一郎	鍛治谷政平	杉山勝治	村木久一郎	鍛治谷政平	相談役
後藤喜八	後藤喜八	後藤喜八	後藤喜八	後藤喜八	後藤喜八	後藤喜八	後藤喜八	後藤喜八	後藤喜八	後藤喜八	後藤喜八	後藤喜八	後藤喜八	會長
若染一雄	若染一雄	若染一雄	若染一雄	若染一雄	若染一雄	若染一雄	若染一雄	若染一雄	若染一雄	若染一雄	若染一雄	若染一雄	若染一雄	副會長
山田定	高橋英吉	高橋英吉	高橋英吉	高橋英吉	高橋英吉	高橋英吉	高橋英吉	高橋英吉	高橋英吉	高橋英吉	高橋英吉	高橋英吉	高橋英吉	副會長
河合慶太郎	河合慶太郎	河合慶太郎	河合慶太郎	河合慶太郎	河合慶太郎	河合慶太郎	河合慶太郎	河合慶太郎	河合慶太郎	河合慶太郎	河合慶太郎	村木久一郎	村木久一郎	會長
尾関一郎			村木久一郎									杉山勝治	杉山勝治	

金華校下歴代 広報自治会連合会役員名

年度	役職名	知事	市長	顧問	相談役	会長	副会長	副会長	
昭和五七年		上松 陽助	蒔田 浩		村木久一郎	後藤 喜八	山田 勝一	河合慶太郎	尾関 一郎
昭和五八年		上松 陽助	蒔田 浩		高橋 英吉	後藤 喜八	山田 勝一	河合慶太郎	尾関 一郎
昭和五九年		上松 陽助	蒔田 浩		村木久一郎	後藤 喜八	山田 勝一	河合慶太郎	尾関 一郎
昭和六〇年		上松 陽助	蒔田 浩			後藤 喜八	山田 勝一	河合慶太郎	尾関 一郎
昭和六一年		上松 陽助	蒔田 浩			後藤 喜八	山田 勝一	河合慶太郎	尾関 一郎
昭和六二年		上松 陽助	蒔田 浩	河合慶太郎		河合慶太郎	山田 勝一	河合慶太郎	村瀬 武夫
昭和六三年		上松 陽助	蒔田 浩	河合慶太郎		河合慶太郎	山田 勝一	河合慶太郎	村瀬 武夫
平成元年		梶原 拓	蒔田 浩	河合慶太郎		小林 嘉美	山田 勝一		岩崎 武雄
平成二年		梶原 拓	蒔田 浩	河合慶太郎		小林 嘉美	山田 勝一		岩崎 武雄
平成三年		梶原 拓	蒔田 浩		吉田 好成	小林 嘉美	山田 勝一		岩崎 武雄
平成四年		梶原 拓	蒔田 浩		吉田 好成	小林 嘉美	山田 勝一		岩崎 武雄

年度	役職名	會計		會計		監査		常任理事	
昭和四五年	若染一雄	河合源之助	川島兵助	山村清	加藤静治	山村清	山田定		
昭和四四年	若染一雄	河合源之助	林隆敏	山村清	加藤静治	加藤静治	山田定		
昭和四三年	若染一雄	堀隆二	林隆敏	山村清	加藤静治	加藤静治	鍛冶谷政平		
昭和四二年	若染一雄	堀隆二	林隆敏	浅野久蔵	加藤静治	加藤静治	鍛冶谷政平		
昭和四一年	若染一雄	野村理一	林隆敏	河口玄昌	加藤静治	加藤静治	鍛冶谷政平		
昭和四〇年	若染一雄	野村理一	林隆敏	河口玄昌	加藤静治	加藤静治	鍛冶谷政平		
昭和三九年	若染一雄	野村理一	林隆敏	河口玄昌	加藤静治	加藤静治	鍛冶谷政平		
昭和三八年	浅野久蔵	野村理一	林隆敏	河口玄昌	加藤静治	加藤静治	鍛冶谷政平		
昭和三七年	杉山勝治	野村理一	林隆敏	堀隆二	村木久一郎	村木久一郎	鍛冶谷政平		
昭和三六年	高橋美吉	野村理一	林隆敏	丹羽清二	村木久一郎	村木久一郎	鍛冶谷政平		
昭和三五年	浅野久蔵	野村理一	牧村信吉	田代良三郎	村木久一郎	村木久一郎	鍛冶谷政平		
昭和三四年	牧村信吉	野村理一	宇佐美宗雄	野々垣国男	村木久一郎	村木久一郎	鍛冶谷政平		
昭和三三年	牧村信吉	村木久一郎	栗本孝曜	川島兵助	山村清	山村清	鍛冶谷政平		
昭和三二年	牧村信吉	河口玄昌	林隆敏	岩崎力丸	山村清	山村清	鍛冶谷政平		
昭和三一年	浅野久蔵	河口玄昌	林隆敏	田代良三郎	林隆敏	林隆敏	田代良三郎		
昭和三〇年	若染一雄	河口玄昌	林隆敏	村瀬元一	神谷作市	神谷作市			
昭和二九年	若染一雄	浅野弥一郎	田内領之助	村瀬元一	說田俊治	說田俊治			
昭和二八年	若染一雄	浅野弥一郎	田内領之助	村瀬元一					
昭和二七年	若染一雄	河口玄昌	田内領之助	村瀬元一					
昭和二六年	若染一雄	村上義勝	田内領之助	村瀬元一			稲葉寿一		
昭和二五年		田内領之助	田内領之助				神山謙治		

金華校下歴代 広報自治会連合会役員名

年度	役職名	会 計	会 計	監 査	常 任 理 事
昭和四六年	山田 定		川島 兵助	山村 清	加藤 静治
昭和四七年	山田 定		伊藤 正一	山村 清	加藤 静治
昭和四八年	山田 定			山村 清	加藤 静治
昭和四九年	山田 定	河合源之助		山村 清	加藤 静治
昭和五〇年	山田 定	河合源之助		山村 清	加藤 静治
昭和五一年	山田 定	河合源之助		山村 清	加藤 静治
昭和五二年	山田 定	河合源之助		山村 清	加藤 静治
昭和五三年	山田 定	河合源之助		山村 清	加藤 静治
昭和五四年	山田 定	村瀬 市治			加藤 静治
昭和五五年	山田 定	加藤 龍三	永井 忠雄		加藤 静治
昭和五六年	山田 定	加藤 龍三	永井 忠雄	吉田 清吉	加藤 静治
昭和五七年	山田 定	加藤 龍三	永井 忠雄	吉田 清吉	加藤 静治
昭和五八年	山田 定	加藤 龍三	永井 忠雄	吉田 清吉	加藤 静治
昭和五九年	長屋 季雄	加藤 龍三	高橋 郁也	吉田 清吉	加藤 静治
昭和六〇年	長屋 季雄	加藤 龍三	高橋 郁也	吉田 清吉	加藤 静治
昭和六一年	長屋 季雄	加藤 龍三	藤井 保	篠田喜兵衛	加藤 静治
昭和六二年	長屋 季雄	加藤 龍三	西野 洋一		岩崎 武雄
昭和六三年	長屋 季雄	加藤 龍三	西野 洋一		岩崎 武雄
平成元年	長屋 季雄	塩谷 義雄	西野 洋一		高橋 郁也
平成二年	長屋 季雄	塩谷 義雄	西野 洋一		高橋 郁也
平成三年	長屋 季雄	塩谷 義雄	村瀬 武夫		山口 行夫
平成四年	長屋 季雄	塩谷 義雄	村瀬 武夫		山口 行夫

金華校下歴代各町広報自治会会長名

年度	役職名	常任理事	
昭和二四年	豊田 貞隆	村瀬 元一	天野 太郎
昭和二五年		説田 俊治	
昭和二六年			
昭和二七年			
昭和二八年			
昭和二九年	山村 清		
昭和三〇年			
昭和三一年			
昭和三二年			
昭和三三年	高橋 英吉	木村 市造	
昭和三四年	高橋 英吉		
昭和三五年	高橋 英吉		
昭和三六年	杉山 勝治		
昭和三七年			
昭和三八年	河合慶太郎		
昭和三九年	河合慶太郎		
昭和四〇年	河合慶太郎		
昭和四一年	河合慶太郎		
昭和四二年	河合慶太郎		
昭和四三年	河合慶太郎		
昭和四四年	河合慶太郎		
昭和四五年	河合慶太郎		

年度	役職名	常任理事	
昭和四六年	村瀬 元一	西野 洋一	村瀬 市治
昭和四七年	藤井 悦二	加藤 英雄	村瀬 市治
昭和四八年	藤井 悦二	加藤 英雄	村瀬 市治
昭和四九年	藤井 悦二	加藤 英雄	村瀬 市治
昭和五〇年	藤井 悦二	加藤 英雄	村瀬 市治
昭和五一年	山田 勝一	三井 僖平	村瀬 市治
昭和五二年	山田 勝一		村瀬 市治
昭和五三年	山田 勝一		村瀬 市治
昭和五四年	山田 勝一		村瀬 市治
昭和五五年	山田 勝一		村瀬 市治
昭和五六年	山田 勝一		村瀬 市治
昭和五七年	山田 勝一		村瀬 市治
昭和五八年	山田 勝一		村瀬 市治
昭和五九年	山田 勝一		村瀬 市治
昭和六〇年	山田 勝一		村瀬 市治
昭和六一年	山田 勝一		村瀬 市治
昭和六二年	山田 勝一		村瀬 市治
昭和六三年	山田 勝一		村瀬 市治
平成元年	加藤 英雄		村瀬 市治
平成二年	西野 洋一		村瀬 市治
平成三年	西野 洋一		村瀬 市治
平成四年	西野 洋一		村瀬 市治

岐阜市金華自治会連合会規約

(名称及び事務所)

第一条 本会は、金華自治会連合会と称し、事務所を連合会長宅に置く。

(目的)

第二条 本会は、自治精神の高揚並びに校下住民の生活・福祉の向上を図り、県・市政の普及と民意の反映に努めることを目的とする。

(事業)

第三条 本会は、前条の目的を達成するため、次の事業を行なう。

(一) 自治活動に関する計画及び実践並びに校下住民の福祉に関する事項。

(二) 自治資料の収集及びその周知徹底に関すること。

(三) 県・市政への協力と住民意志の把握反映に関すること。

(四) その他必要と認めること。

(組織)

第四条 本会は、金華校下の自治会をもって構成し、各町の自治会長（以下「自治会長」という）をもって組織する。

(役員)

第五条 本会に次の役員を置く。

連合会長 一名 副会長 若干名 会計 一名
常任理事 若干名 理事 若干名 監査 二名

二 役員は、総会において選任するものとする。

第六条 本会には顧問、相談役を総会の決議により置くことが出来る。

第七条 本会の役員の任期は一年とする。ただし、再選を妨げない。

二 役員は、任期終了後であっても後任者の就任するまではその職務を行なうものとする。

三 役員が欠けた場合における、補欠役員の任期は前任者の残任期間とする。

第八条 会長は、本会を代表し、会務を統括する。

二 副会長は、会長を補佐し、会長事故あるときはその職務を代行する。

三 会計は、財産の管理、金銭の収支の計理を担当する。

四 常任理事及び理事は、会長の指示に従い会務を執行する。

五 監査は、会務並びに会計を監査する。
(会議)

第九条 本会の総会並びに役員会は、自治会長を以て構成し、全ての会議は会長が議長となり、二分の一以上の自治会長が出席しなければ開催することができない。

二 議事の決議は、自治会長の出席者の過半数の賛成をもって成立し、可否同数の時は議長が決定する。

第一〇条 本会は、毎年四月に定期総会を開く。

二 総会は、役員を選任・会務報告・決算の承認・事業の計画及び予算の審議その他必要なる事項を審議・議決する。

三 会長が必要であると認められた時は、臨時総会を開くことができる。

第一一条 役員会は、必要に応じ随時開催することができる。

岐阜市金華自治会連合会規約

きる。

二 役員会は、事業の計画及び予算・決議など総会に提出する議案を審議するほか本会に必要な各種事項について審議・処理に当たる。

(会計)

第一二条 本会の経費は、会費その他の収入をもって充てる。

第一三条 本会の会計年度は、毎年四月一日から翌年三月三十一日までとする。

(その他)

第一四条 本会には次の帳簿を備え処理するものとする。

一 会員名簿 二 役員名簿 三 金銭出納簿

四 規約・規定綴 五 予算・決算綴 六 会

議録 七 その他の必要なる書類

第一五条 本会の運営に関して必要な事項は、別に内規を定める。

第一六条 この規約は、総会の議決によらなければ改正することができない。

この規約は、昭和六三年一月二日から施行する。

各
種
団
体
育
教
育
機
関



金華公民館

●設置に至るまで

昭和二十一年（一九四六）一月三日、現在の日本国憲法が公布され、翌二十二年（一九四七）五月三日施行された。その憲法第二六条に「すべての国民は、法律に定むるところにより、その能力に応じて、ひとしく教育を受ける権利を有する」とあり、それによって教育基本法が定められた。昭和二十四年（一九四九）六月には社会教育法が作られ、社会教育、生涯学習について市町村が公民館を設置することが義務づけられ、岐阜市においては、岐阜市公民館条令が定められた。

公民館は法によって定められる各種行事を行なうとともに、地域住民の生涯学習に対する意欲に応じて、その時代々に即応した活動をし、公民館の必要性と存在について認識を高めるよう義務づけられている。

岐阜市には中央公民館の他に各校下に一公民館が設置され、校下公民館には館長、主事、公民館審議会委員を教育委員会が委託し、その運営については

定められた規定に基づき公民館活動として十分な配慮を図り維持管理に努めることになった。

●金華公民館の活動

生涯学習が叫ばれる時代になり、公民館では、住民の心のふれあいを大切にするために、様々な講座や学習、あるいは講演、文化祭、公民館文庫の活用、趣味、レクリエーション、サークル活動等の場としての活用、さらに校下の各種団体機関の連絡や集会等に使用されている。

金華公民館は現在、種々の団体、クラブ、サークルによって各種講座、同和学習、手芸、茶華道、俳句、書道、民踊、歌謡曲、健康体操、フォークダンス、大正琴などが開かれており、幼児から高齢者の方々に至るまで生き生きとした眼で学習時間を過ごし、年間二万五〇〇〇人程の方が使用している。

金華校下の文化祭については、昭和五十一年（一九七六）一〇月二三日、金華公民館創設一〇周年記念大会の折りに、第一回の文化祭を行い、平成三年一〇月には第一六回文化祭を開催することが出来るま



金華公民館●各種団体

文化祭（金華小学校4年生）
（平成3年10月20日）



文化祭（芸能の部）
（昭和61年10月27日）
文化祭（詩吟の部）
（平成3年10月20日）

文化祭（金華小学校4年生合奏）
（平成3年10月20日）



文化祭（展示の部）
（平成3年10月20日）



文化祭（書道の部）
（平成3年10月20日）



文化祭（手芸の部・友愛チーム）
（平成3年10月20日）

でに成長した。当初はささやかな出演者と参加者であったが、次第に校下民の理解と認識を得ることができ、最近では四〇〇人以上の入場者ならびに多数の出演者を得、関係団体の協力もますます力強いものとなってきた。

今後は、創設の精神を大切にして、高齢化、学校週五日制、青少年・婦人問題、成人の健康と生き甲斐等について研究を重ね、人間関係の円滑化を図りつつ未来に向かっていかねばならない。

創立から今日に到る間の主たる事項は次の通り。

昭和二十六年（一九五二）四月 岐阜市の記録では金華公民館設置とあるが、実態はない。

昭和三七年（一九六二）二月五日 市民の集いの

折り、松尾市長に婦人の部屋新設を陳情。

昭和三八年（一九六三） 金華小講堂に婦人の部屋完成。

昭和四一年（一九六六）五月 金華公民館組織委員会結成。

昭和四一年六月 岐阜市当局に各種団体設置陳情。

昭和四一年七月 金華公民館運営委員会創立総会。

昭和四一年十二月 金華公民館開館式（但し建築物は無く、講堂に設置され婦人の部屋、和室を利

用）。

昭和四五年（一九七〇） 独立建物としての公民館

新設を校下全域の署名を添えて市当局へ陳情。

昭和四五年二月二三日 金華公民館新築落成式を行う。

昭和五一年（一九七六）一〇月二三日 金華公民館

創設一〇周年大会開催（当日功労者感謝状贈呈

市長感謝状後藤喜八他一〇名 館長感謝状若染

一雄他二五八名。併せて第一回文化祭を行う）

昭和五四年（一九七九）五月 金華公民館増築工

竣工。

平成三年二月 金華公民館其他改築問題につき

懇談のため校下関係者関係団体が教育委員会へ

出向く。

○歴代公民館長、主事

館長

主事

昭和四一年～四三年

後藤喜八

加藤静治

昭和四三年～五六年

高橋英吉

加藤静治

昭和五七年～五八年

若染一雄

長屋季雄

昭和五九年～平成三年

河合慶太郎

長屋季雄

平成四年～現在

牧野 潔

小森昭三

金華公民館●各種団体

岐阜中地区交通安全協会金華支部

●金華分会設立までのいきさつ

昭和初期における岐阜市内の交通機関は、市内電車、馬車、人力車、そして、少しのタクシー、貨物自動車であった。自動車は、貴重品であり、岐阜市内にバスが一部に運行されるようになったのは昭和七年（一九三二）頃からと思われる。

その頃の道路は舗装されておらず、神田町通りは砂利敷の道路で、平和通り（金華橋通り）も昭和一〇年（一九三五）頃ようやく舗装されて通称「凱旋道路」と言われ、多くの出征兵士を送ったが、戦後拡幅されて今日に至っている。

戦前は交通事故は皆無に等しく、日中戦争、太平洋戦争突入の頃になるとガソリン等の統制が厳しくなり、一般自動車は使用不可能の状態となり、殆ど軍並びに軍需関係のみの更生車が街を走る状態であった。

昭和二〇年（一九四五）八月の終戦と共に廃墟からの復興が始まり、軍関係から貨物自動車やガソリンが放出されて民需が活力を得るようになった。昭

和二五年（一九五〇）頃には原付自転車、オート三輪の姿が目立ち始め、スクーター、単車、そして各メーカーの自動車が走るようになり、年毎に当時岩戸にあった自動車免許試験場には取得のために多くの人が訪れるようになった。

昭和三九年（一九六四）に東京オリンピックが開催されることになり、名神高速道路の開通をはじめとして道路事情も良くなり、急速にモータリゼーションが進行していった。このため、交通事故が急激に増加し始め、年間一人を越す憂慮すべき状態となった。警察、行政当局だけでは事故防止は困難となり、交通安全に対する認識を高め交通安全に対するボランティア団体が全国各地に結成される様になった。

岐阜市内では、昭和四〇年（一九六五）に芥見校下を含む八校下に岐阜中地区各校下分会が結成され、金華校下では、翌年当時の金華広報連合会会長後藤喜八らが中心となって金華分会設立に努力し、校下運転免許所持者に対し会員への入会の勧誘に努めた。

七月一七日金華小学校講堂（昭和八年竣工）において盛大に発会式が行われた。

そして、役員・理事と各町より選出された評議員が交通事故防止のために各種行事をおこなった。

昭和五十一年（一九七六）一〇月九日には金華小体育館において、法令講習会と併せて創立一〇周年式典を開催し、功労者に対し岐阜中署長、金華分会長連名の表彰を行った。

●金華支部へ名称変更

その後全国的に交通安全団体が結成され、金華分会も昭和五七年（一九八二）には「岐阜県岐阜中地区交通安全協会金華支部と名称変更された。上部組織としての協力団体には、岐阜県交通安全協会、中部交通安全協会、全日本交通安全協会等があり、一丸となって事故防止に努力を重ねてきたが、平成時代に至って事故は増加の一途をたどり、自動車の高性能化、道路事情、行政の対応、運転者の運転に対するマナー等多くの問題を抱えている。

●金華支部の活動

金華支部は現在（平成三年）三五〇〇人の会員を擁し、年間行事として春、夏、秋、年末の全国並びに県民の交通安全運動への協力、毎月交通安全日の

岐阜中地区交通安全協会金華支部●各種団体

街頭指導の実施、岐阜市交通安全大会への参加、岐阜中地区交通安全協会の行事参加、校下法令講習会の開催、金華交通安全全婦人の会、婦人対策部、金華交通安全少年団等との連携・協力、そして毎年行われる優良運転者、功労者に対する申請等、多数の行事を抱え、交通安全の一助に努力している。

優良運転者の表彰については、校下で緑十字銀章、中部管区表彰、緑十字銅章、県、地区の各種の表彰を受彰されて、事故防止に努力されている。今後多数の方々が受彰されることが望まれる。

尚、校下に於いては、行政側と協力して事故防止に当たるため、岐阜県公安委員会より地域交通安全推進委員として市原昭一郎、河合慶太郎の二名が委嘱されている他、岐阜中署長より無謀運転モニターとして一名が委嘱されている。

金華支部歴代支部長は次の通り。

後藤喜八（昭和四一年～昭和六〇年）

河合慶太郎（昭和六一年～現在）

岐阜市金華校下消防の沿革

●第一期 火消時代（江戸期）

徳川家康が慶長五年（一六〇〇）岐阜城を攻落してから、岐阜は幕府直轄の支配地となり、その後尾州領地となった。この時、宿殿の警備や火の番のために火消し組合が組織され、火災時には奉行所役人が指揮監督消火に努めてきたが、明治四年（一八七二）の廃藩置県断行により、火消組合は解散になった。

当時の火消組合は次の通りであった。

- 一、役所抱火消、役所付火消、本市消防組
- 二、長良川役所、八川組又は小揚組、文久二、三年（二六六一〜六二）頃（火消頭・桑原善吉）
- 三、町火消

一文字組 明和七年（一七七〇）四月大仏付近

大文字組 創立不明大工を以てする

水之手組 創立不明伊奈波付近

竹栄組 寛政初年（一七八九ごろ）町方商人

にて

三堅組 天明七年（一七八七）茶屋町付近

町火消組は、今日の様に一定の法規の下に設立されたのではなく、それぞれが独立した単独の存在であり、庶民の子弟によって成立していたが、おおむね奉行所の監督下になっていた。

古い資料によると「三堅組」には、細定・町火消の規律等が定められ、小は家庭の事より、大は火災



昭和26年10月当時の役員一同

場所に於けるまで、細かな定めがあり、出火にさいしては先陣を争ってかけつけた。現在の様な消火器具もなく、肉弾を以て消火や人命救助にとめたとあり、その活動は豪胆かつ勇敢なるものであった。この時代は、任侠に富んだ勇敢な働きをする一方で、火消組合同士で優劣を争う風潮が強く、消火に当たったの乱闘もあった。岐阜市火消闘争史上最も有名



岐阜市消防団出初め式の一斉放水
(昭和25年頃)



金馬簾表彰受賞伝達式
(昭和26年10月1日)

なのは、三堅組と小之字組との大乱闘で、両方に死傷者が出たことは、この間の消息を雄弁に物語っている。

●第二期 私設消防時代（明治期）

明治四年（一八七二）七月廢藩置県と共に火消組合が解散し、明治二四年（一八九一）に、「水防組」が成立した。

明治六年（一八七三）十一月一日、中竹屋町で全焼四〇戸の大火が発生し、その教訓から明治一〇年（一八七七）二月に、い・ろ・は・に・の四組が編成され、岐阜市最初の統一消防の結成となった。しかし、明治二四年（一八九一）一〇月二十九日午前六時三七分、根尾谷を震源地として濃尾を襲った大地震のため、岐阜市はほとんど全滅状態となり、しかも大火災が発生して大半が消失した。（添付図参照）

この火災は午前六時四五分から始まり、翌日の午後二時頃によく鎮つたが、この時消防組員も家庭の整理に忙しくて、防火活動をするどころでなく、水防組は何の役にも立たなかつたことから、自然消滅してしまつた。

明治二五年（一八九二）、岐阜市制施行により岐

阜市に四組とポンプ組が組織された。金華校下は、第一・第二火防組となり、組頭一、副組頭二、小頭八、火防吏六九名で構成された。

第一火防組 組頭・本町・矢野嘉右エ門
第二火防組 組頭・小能町・岡本太右エ門
（註 明治一八年（一八八五）～二二年（一八八八）十一月五日、消防組を以て、岐阜公園を開墾し、公園内に消防組のクラブとして萬松館を造る）

●第三期 公設消防時代（大正～昭和期）

明治二七年（一八九四）二月の勅令によつて火防組は解散となり、翌年一〇月の勅令及び県令によつて、「岐阜消防組」が組織された。金華校下は第一部に属し、松原嘉兵衛他がその任にあつた。

大正一二年（一九二三）、岐阜市においては、これまで消防組員は水防組員を兼ねていたが、この年に改正して消防組を分離し、「岐阜市水防組」が組織化された。

大正一三年（一九二四）、岐阜市常設消防（部員一七名）が設置され、昭和一四年（一九三九）四月一日に岐阜市警防団が設置されたのに伴い「金華警防団」が発足し、団長には山崎丈一が就任した。

以下の歩みは次の通り。



岐阜市金華校下消防の沿革 ● 各種団体

昭和十五年（一九四〇）四月一五日

岐阜市警防団金華分団設立

初代分団長 松井三治郎

二代分団長 松井三郎

三代分団長 浅野真一

昭和十八年（一九四三）八月一〇日

岐阜市警防団金華分団防空協力会設立

会長 浅野久蔵

昭和二〇年（一九四五）七月九日

岐阜市空襲。米軍の空爆により、市内の主要部

を消失（り災面積五六・一平方キロメートル、

市街地の七八%焼失。り災戸数二万四二七戸。

り災者八万六一九七人。死者八六三人。負傷者

五一五人）。金華校下で爆焼したのは、常盤町

栄扇町、矢島町二丁目、白木町、木造町、湊町

の一部。当時の団員数は九九名で分団長、尾藤

喜平治応召後任指揮者、副分団長山田嘉一、部

長（救護）鷺見喜七、（消防）富成澤二、（警

備）浅野真一、（本部）奥田利雄 の指揮のも

と、懸命に消火作業に当たった。

● 戦後のあゆみ

昭和三二年（一九四七）一〇月 岐阜市消防団金華

分団と改称

昭和二十三年（一九四八）一月 機構改革により岐

阜市金華消防団に改組（団員定数六〇名、初代

団長・尾藤喜平治）

昭和二十五年（一九五〇）五月五日 岐阜市金華消防

会館及び車庫物置新設

五月一日 開館式

昭和二十五年（一九五〇） 二代目団長 堀隆二

昭和四〇年（一九六五） 三代目団長 島兼吉

昭和四二年（一九六七） 四代目団長 今村昭三

昭和五四年（一九七九） 一月三日 金華消防団の

再結成と新人団員二五名による入団式が挙行さ

れ、金華校下に再び設置された

昭和五四年 五代目団長 河合慶太郎

昭和五五年（一九八〇）四月一日 岐阜市消防組織

の改革によって、岐阜中消防団、岐阜市南消防

団、岐阜市北消防団の三団制に統合し発足。従

来の三七団はそれぞれ分団となり、「岐阜市中

消防団金華分団」の名称となる初代分団長河合

慶太郎

昭和五八年（一九八三）二月六日 中消防団金華分

団本部竣工式が挙行された。（鉄骨造平家建延

岐阜市金華校下消防の沿革●各種団体

七五・八九平方メートル）

昭和五九年（一九八四）四月一日 二代目分団長・

杉山周三

平成三年四月一日 岐阜市消防団員定員を一一九〇

に減員される。岐阜市中消防団金華分団定員二

〇名に改定（分団長・杉山周三以下一九名）



岐阜市中消防団金華分団本部竣工式（昭和58年2月6日）

金華水防団あゆみ

●金華水防団誕生

金華校下は山水に恵まれ、風光明媚な岐阜市の観光地として、市民に親しまれている地域であるが、一旦洪水となれば大災害が発生する危険性をはらんでいる。水防団結団以前も幾多の洪水があつたが、地元住民の力でそれを防ぎ、被害を最小限に食い止めることができた。

昭和三四年（一九五九）七月、市当局から当校下に水防団設立の要請があり、当時の金華広報連合会長の後藤喜八氏、同副会長の若染一雄氏の尽力によつて「金華水防団」が誕生し、若染一雄を初代団長に選任した。団員は二五名で、結団式を金華小学校講堂で挙行了た。

●伊勢湾台風水害

同年九月の伊勢湾台風の来襲によつて、長良川は大洪水となった。しかし、結団されたばかりであり水防団員も要領がわからず、成すすべもなかった。濁流が大宮町通りから市街地へ流れ込み、梶川町から伊奈波神社までの山麓地帯は水浸し状態になつて

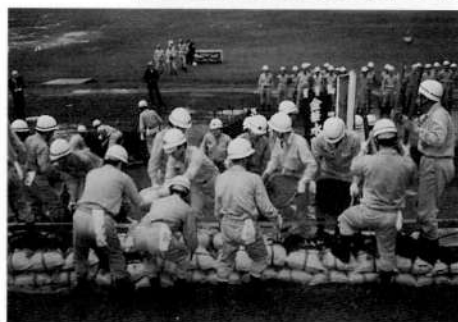
しまった。市民に多大な被害を与え、水防団の使命の重大さを痛感させられた。

●大宮陸閘の完成

当時から陸閘はあつたが、全て角材の落とし込みによる方法であつたため、大宮陸閘の角材は陸閘付近に保管し、その他の陸閘の角材は町内毎に保管して



大宮陸閘締め切り演習
(平成3年6月)



岐阜市連合水防演習における土のう積み
(平成3年7月)

金華水防団あゆみ●各種団体

頂いた。このため、角材調達がうまくいかずに、洪水を押しとどめることができなかつたのである。

昭和三七年（一九六二）三月、建設省によって大宮陸閘は待望の本格的な陸閘に生まれ変わり、以後、他の一三か所の陸閘も順次改良されて現在に至っている。

昭和三五年（一九六〇）の台風一一・一二号による集中豪雨、昭和三六年（一九六一）の梅雨前線豪雨によって三年続きの大洪水となり、特に湊町、玉井町、元浜町はその度に床上浸水となった。このため建設省と話し合いによって「景観を多少損なう事があつても、生命、財産にはかえられず」として、川沿いをコンクリート壁で固めた。また、昭和四二年（一九六七）一月には、湊町、玉井町、元浜町の住民を守るために、岐阜県によって「忠節橋用水逆止樋門」が設置された。

昭和五一年（一九七六）九月の「九・一二災害」と呼ばれる大洪水時には、洪水継続時間が長くかつたために、二日間にわたる警戒体制を取り、不眠不休で従事した。

●伊奈波貯水槽の完成

金華校下は金華山を控えており、山からの流水が

金華水防団あゆみ●各種団

意外に多く、大雨の時などは想像以上の流水となり、特に伊奈波神社参道からの流水で、近くの町内はまたたく間に床上浸水となっていた。

そこで昭和五六年（一九八一）一二月に、神社前広場の地下に「伊奈波貯水槽」を造り、貯水槽で水量を一時に緩和してから、用水路へ放出することになった。以後、その目的が十分達せられ、床上浸水がなくなつて、住民に大変喜ばれている。

当団の水防担当区域は長良川左岸二三〇〇メートルで、岐阜市の要である重要な地域である。毎年六月に実施している大宮町を中心とする陸閘の開閉点検訓練には、夜間にもかかわらず、市当局はじめ関係官庁の方々も立合われ、当団の責任の重大さを痛感している。

●団員数維持に苦慮

当団は現在六五名の団員で編成されているが、毎年定年退職される団員も多く、団維持に苦慮している状態である。水防の重要性を再認識して、若い人達が一入でも多く入団することが求められている。

金華水防団歴代団長はつぎの通り。

若染 一雄（昭和三四年～昭和五八年）

齋場 孝彦（昭和五九年～現在）

金華婦人会

●沿革

戦前に愛国婦人会（会長 渡辺八重子）、戦時下には国防婦人会（会長 渡辺八重子）があったが終戦により解散した。

昭和二二年（一九四七）に岐阜市婦人同盟金華分会が発足。会長は日下部初子で、小学校に事務室があった。会計は渡辺一江、記録は酒向敏子が担当した。戦後、荒廃の中から立ち上がり、昭和二三年（一九四八）一〇月に、「金華婦人会」が発足し、会長に日下部初子が就任した。

以下 歴代会長は次の通り。

日下部初子 昭和二三年成立～昭和二九年度
村上也と 昭和三〇年度、昭和三一年度
後藤幾枝 昭和三二年度～昭和五八年度
丹羽和歌子 昭和五九年度～平成元年度
見並貞子 平成二年度～現在

●運営と活動

1 目標

① 青少年を理解し愛の一声運動の展開に努めましょ

金華婦人会 ● 各種団体

う。

② かしこい主婦として省エネルギー、省資源生活の工夫に努めましょ。

③ 生きがいのある生活をするため、進んで活動に参加ましょ。

④ 祝祭日には国旗をあげましょ。

2 行事

○ 地区長会（毎月一回）

○ 交通事故ゼロの日（毎月一五日）

○ 家庭の日（毎月第三日曜日）

○ 茶道、華道、書道、民踊、フォークダンスの各クラブ（月二回） 手芸、料理（随時）

○ 華影（月一回発行）

3 活動

交通安全に年四回協力、分別回収年六回、ゴミブリ殺虫剤作り、牛乳パック回収、校下運動会に協力、研修旅行、婦人学級年六回、校下防災訓練に参加、敬老会、文化祭に参加、老人家庭健康食実習に協力、独居老人慰問の会、新年互礼会、初釜、県婦人会連

合会、市婦人会連合会の大会、ブロック研修会、市政懇談会、消防署指導者講習会、歳末たすけ合い、クリーンシティぎふの日に参加

4 記念事業

昭和三四年 元金華小学校長鷺見臣一郎先生作詞



婦人部が参加した岐阜国体公開演技マ
スゲーム（昭和40年10月24日）



「クリーンシティー岐阜」に参加し場
缶拾い



会旗

（一九五九）作曲、会歌制定

昭和三八年 創立一五周年記念総会

（一九六三）

昭和四八年 創立二五周年記念会（小学校体育館、

（一九七三）誌名「華影」二五周年を記念して上松

元市長より賜る。篆刻は元金華小学校

長田中利雄先生。記念誌「華影」を発

行し会員に配布。

昭和五三年 創立三〇周年記念の会（伊奈波神社参

（一九七八）集殿）三〇周年記念号「華影」発行会

員に配布、記念茶会開催（中部電力サ

ービスセンター）。

昭和五八年 創立三五周年記念の会（伊奈波神社参

（一九八三）集殿）「華影」三五周年のあゆみを発

行し会員に配布。書道、華道、展開催

（中部電力サービスセンター）。時計

塔が金華橋東三差路に九月一〇日完工

昭和六三年 創立四〇周年記念の会（歴史博物館）

（一九八八）四〇周年記念号「華影」を発行し会員

に配布。記念茶会開催（青翠庵）。記

念書道華道展開催（中部電力サービス

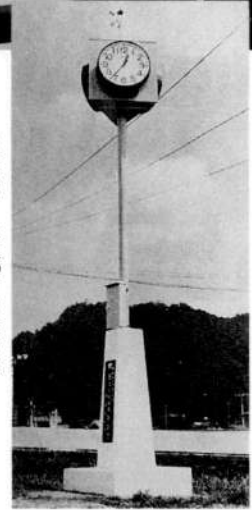
センター）。



第一回研修旅行（東京・日光の旅、昭和36年）



第31回研修旅行（北九州の旅、平成3年5月）



金華婦人会35周年記念の時計塔

金華婦人会 ● 各種団体

5 国体に参加

第二〇回岐阜国体（昭和四〇年一〇月二四日）の公開演技”マ스ゲーム婦人部会郷土のかおり”に参加し、明るく伸びゆく婦人部会を表現。校下から二四名が出演。総勢一四四〇名が前年九月から一一三回の練習を重ね、郡上の春駒にはじまり岐阜のおおばで終わる濃飛の民謡、歌謡をアレンジした曲にあわせてそろいのゆかたで熱演。開会式のマスゲームを披露した。

6 委員会活動

① 青少年委員会

青少年の非行が増加し、しかも時代を追って低年齢化してきた。これ等の非行を防ぐため、婦人会は他の団体と連携をとりながら活動している。

② 消費生活委員会

○年六回の分別回収を行い、岐阜市提唱の資源保護運動に協力。

○年二回、市の美化運動に協力。校下全域や河川敷に投げ捨てられたビンカンを回収。

○ゴキブリ殺虫剤づくり。

③ 健康生活委員会

○年一回の子宮ガン、乳ガン検診を行う。

○校下市民運動会で民謡、フォークダンスを披露。

④広報委員会

昭和四七年（一九七二）五月設けられ、月一回「華影」を発行。

7 婦人学級

生涯学習をめざして、年六回活動している。（平成元年度実施学習例）。

○学習目標 校下の歴史、文化、福祉を女性の立場から学習する。

場から学習する。

①校下の史蹟をたずねて（第一部）

講師 金華小学校長 加納宏幸

②校下の史蹟をたずねて（第二部）

講師 金華小学校長 加納宏幸

③他校下の福祉施設一日研修

サンビレッジ、光の園、ホーム見学

④校下の福祉について

講師 市老人福祉課 古田南海男

⑤古い町並見学一日研修

有松鳴海絞館 エネルギー館

⑥女性の立場から同和問題について

地区に在住女性二人と話し合い

※①②は金華の町づくりの一環として校下の史蹟

をたずね、講師加納先生の指導でテキストをもとに探索。奉行所跡、市役所跡、長良川役所、松尾芭蕉の句碑、大仏、寺院など、校下の古い歴史の勉強をした。

8 交通安全

○中地区交通安全協会金華支部婦人部として活動。

○市より交通安全婦人（交通ママさん）に一四名委嘱。

○愛の一声運動に参加。

○交通安全運動期間に街頭指導を行う。

○交通法令講習会に参加しマスコットを作る。

9 防火クラブ

昭和五三年（一九七八）四月二五日に設立。

○校下防災訓練、救護、初期消火参加。

○消防署本部にて指導者講習。

○婦人防火全国大会に出席。

○岐阜市消防出初式に参加。

10 生活学校

岐阜市婦人連合会に参加（二名）

（年間学習内容）

○資源環境問題について

○販売業者との懇談会

- ゴミ減量と生活環境について
 - 輸入食品と日本の食料事情について
 - 商品表示について
 - リサイクル施設等の見学
 - 農業生産者との懇談会
 - お米の消費拡大に関する意見交換
- 11クラブ活動(月二回)
- 茶道(月) 松尾流 祖下宗昌
 - フォークダンス(火) 杉山昌子
 - 華道(水) 池之坊 奥田春翠
 - 手芸(木) 大谷容子
 - 民踊(金) 日本民踊研究会 大野豊岐
 - 書道(土) 千葉芳翠
 - 料理 季節の家庭料理 宮地由紀子
- 12研修旅行
- 昭和三六年(一九六一)第一回東京・日光の旅より、平成四年第三二回の東北の旅に至るまで、毎年一回行っている。
- 13婦人会と地域のかかわり
- 市民運動会 フォークダンスと民踊で参加。バザー開催。
 - 大仏フェスティバル 実行委員会に協力、夜の部

金華婦人会●各種団体

- の盆おどりとバザーの手伝い。
- 敬老会 自治会に協力、式典、リクレーションと役員一体となって出席者の接待をする。
 - 文化祭、華道、書道、手芸、料理各クラブが出品展示。フォークダンス、民踊クラブが出演。茶道クラブが接待する。
 - 老人家庭健康食実習 社会福祉協議会に協力して老人と一緒に料理実習をする。
 - 独居老人慰問の会 ひとり暮らしの老人を招待し、健康についての話、役員手作りの料理による昼食会、食後、抹茶の接待で慰問をする。
- 14婦人会の今後の展望
- 地域のコミュニケーションが崩壊する中で、まず私達お互いがしっかりと手を組んで、若い方を仲間にするように啓発活動に努める。
 - 母として、妻として、婦人としての生きがいを求めて、生涯学習や地域婦人としてのボランティア活動に参加する。
 - 物の豊かさの中にあって、金華山、長良川の自然の美しさを大切にし、心豊かに生きがいを持って校下の歴史や文化を学び、住みよい町づくりに一人でも多く参加する。

岐阜市社会福祉協議会金華支部

岐阜市社会福祉協議会が地域福祉活動推進の目的で各校下に支部をおくことになり、昭和五四年（一九七九）四月に金華支部が設立された。

組織は支部長一名、副支部長一名、主事一名、会計一名、監査二名、理事一〇名、評議員六五名にて運営されている。事務局委員は支部長主事会計他八名。

毎年、独居老人、寝たきり老人、高齢者所帯（六五才以上の夫婦姉妹等二人で生活している方）等に対し、民生児童委員、婦人会の協力により慰問品の贈呈や老人向健康食の実習、ねたきり老人の介護講習会開催、歩行不自由な方に対し車椅子二台を常備、養護老人ホームの慰問と研修、新入学児童に黄色い帽子を贈る（四月）等の事業を行っている。

全国的に高齢化が進んでいる中、当校下も次に示すように、独居老人が増加している。

独居老人 ねたきり老人

昭和五四年（一九七九）六八年 三二二名



金華支部事務局委員研修（平成2年10月、岐阜県高齢者総合相談センター）



老人家庭料理実習会（平成3年11月）

昭和五八年（一九八三） 八四名 一三名
 昭和六〇年（一九八五） 一〇八名 二〇名
 昭和六三年（一九八八） 一二〇名 一九名
 平成四年（一九九二） 一九七名 一五名

急速に高齢化、核家族化が進行している現在、公
 的福祉施設や在宅福祉サービスを拡充し、地域住民
 の積極的な理解と協力を得て、誰もが安心してくら

岐阜市社会福祉協議会金華支部●各種団体



独居老人の集い（平成4年11月）

せる、町づくりを推進する必要がある。
 歴代支部長と会員数は次の通り。
 後藤喜八 昭和五四年～昭和六〇年
 河合慶太郎 昭和六一年
 小林嘉美 昭和六二年～現在
 平成四年度 普通会员 二、一六二名
 特別会員 八二五名

金華民生児童委員協議会

生活保護制度としては、江戸時代には「お助け米」「お救い金」制度があり、前者は庄屋、公舎は代官所陣屋等より、慣行として生活困窮者あるいは災害飢饉の際に交付されていたようである。

全国的に公的な生活保護制度が施行されたのは、大正一〇年（一九二一）であり、金華校下にも「奉仕委員」が任命されている。昭和一〇年（一九三五）には「方面委員」と改称され、地域住民の福祉向上と民生安定のために行政に協力していた。

戦後、新しい民生委員制度が発足し、一八名の委員が就任した。生活保護法、児童福祉法、老人福祉法をはじめ福祉八法に基づく福祉行政に関する校下の協力機関として協議会を組織し、機能している。昭和五〇年代になり、特に高齢者福祉対策の充実強化を重要施策として進められている。

代表者として総務が選出されており、初代総務から現在までの総務は次の通り。

初代	栗本 孝耀	四代目	村瀬 元一
二代目	河口 玄昌	五代目	後藤 幾枝
三代目	山村 清	六代目	中村 貞三

（平成四年現在）

金華民生児童委員協議会 ● 各種団体



民生委員会（平成4年11月例会）

金華小学校とPTA

●沿革

本校は岐阜発祥の地として古い歴史と伝統をもつ地域にあり、金華山と長良川の美しい自然環境に恵まれている。校下の人々は伝統を重んじ、学校教育に対して関心が強く、協力的である。

長年にわたって金華山・長良川の自然愛護につとめ県野鳥愛護の指定校になっている。また、岐阜市の姉妹都市、イタリアのフィレンツェ市のソルガネ小学校と姉妹校となり、国際理解教育の推進校となっている。

明治六年（一八七三）二月 米屋町の尾張藩の旧役所を仮校舎にして開校、「大観舎」と称す。（

明治六年二月七日御手洗に「有道義校」開校）

明治七年（一八七四）四月 校舎二階建二棟新築、一つは男子を収容して「金華学校」一つは女子を収容して「伊奈波学校」と称す。

明治十一年（一八七八）七月 校舎一棟を二階建に改築。金華・伊奈波の名称を廃して「岐阜学校」と称す。

金華小学校●各種団体

明治十三年（一八八〇） 有道義校の名称を廃し「富茂登学校」と称す。

明治十九年（一八八六）十一月 小学校令公布により岐阜尋常小学校（現本校）と岐阜高等小学校（現京町小）とに分立す。

明治四四年（一九一一）四月 富茂登小学校を合併し分教場をおく。六学年をおく。（一〇月二六日大工町新校舎一棟竣工し、第三学年以上の児童を収容）。

明治四四年五月二七日 新校舎落成式を挙行す。

大正一二年（一九二三）四月 高等科を併置し「岐阜尋常高等小学校」と改称す。九月一日南舎改築竣工。二月一四日中舎竣工。

大正一四年（一九二五）一〇月 「金華尋常高等小学校」と改称

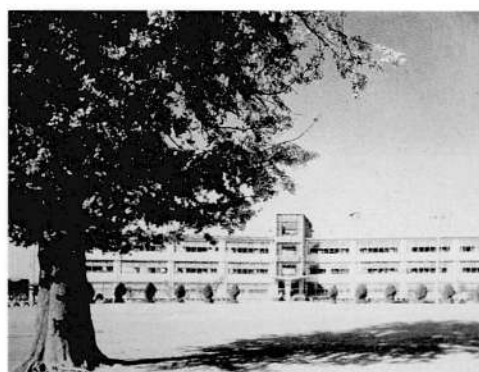
昭和一六年（一九四一）四月 国民学校令発布により「岐阜市金華国民学校」と改称。

昭和三二年（一九四七）四月 「岐阜市立金華小学校」と改称。



金華小学校全景

金華小学校のシンボル
イチョウの木



児童に愛され立派に育った
クジャク



児童の人気の的・ウサギ

● 歴代校長

平成	現在	幅一三
三	三	加納宏幸
六三	二	永田保
六〇	六二	福田信
五七	五九	田中利雄
五三	五六	三浦義明
四九	五二	吉岡勲
四六	四八	居波重邦
四四	四五	松田善逸
四三	四二	太田武夫
三九	四二	林 貞二
三六	三八	鷺見臣一郎
二八	三五	後藤弥三
二二	二七	梅沢英造
一一	一一	加藤氣作
昭 六	一一	関谷国治
明四五	昭和六	

金華小学校PTAの歩み

年度	PTA会長	概 要	児童
22	浅野 久蔵	4月1日 岐阜市立金華小学校と改称 11月30日育友会結成	1,783
23	〃		1,757
24	松井 太郎		1,735
25	〃		1,737
26	浅野 久蔵	8月26日給食室新築落成	1,746
27	桑原 善吉	1月25日同窓会結成 3月1日創立80周年記念式典を挙	1,699
28	中川好太郎	4月2日図書館落成、校歌制定	1,682
29	〃		1,740
30	〃		1,772
31	〃	5月金華児童愛護会結成	1,693
32	〃	3月21日鉄筋4教室完成	1,645
33	〃	6月5日 運動場撤水施設完成 2月15日鉄筋5教室完成	1,686
34	〃	1月16日鉄筋6教室と中央玄関完成	1,605
35	〃		1,417
36	〃	4月8日鉄筋9教室完成 3月20日鉄筋6教室完成	1,264
37	丹羽 清二	7月15日プール完成、校門改築 12月10日グリーンベルト完成	1,179
38	〃	4月1日育友会を P・T・Aと改称 11月16日創立90周年記念式典を挙	1,117
39	〃	3月18日PTA文部大臣表彰を受け 3月はん登棒完成	1,041
40	船戸 茂雄		1,016
41	〃	5月14日愛護会県知事賞表彰を受け 1月19日仲よしの丘竣工	1,015
42	林 義栄		985
43	〃	12月1日教室にテレビ設置 1月8日給食室竣工、3月27日岩石園完成	952
44	岩井 秀一	12月1日教室に石油ストーブ設置 2月20日花壇完成	955
45	〃	12月15日グリーンベルト改造完成	947
46	〃	9月20日校舎東半分に金網フェンス完成	920
47	〃	金華小創立百周年記念各種行事	876
48	平井 照二	4月1日学校無人化(宿直廃止) 7月2日体育館完成感謝の会挙 12月25日ジャングルジム 平行棒 完成	817
49	〃	夏休みのP・T・Aによるプール開設 放送器具及び図書館用具充実 校舎西側金網フェンス完成	799

年度	PTA会長	概 要	児童
50	〃	カラーTV設置 スプリンクラー設置	781
51	説田 信義	ファックス設置 校舎うらスピーカー取つけ	733
52	佐藤 守男	考える人の像 全国小学校道徳会全国大会協力	722
53	山岡 常男	VTRの設置	691
54	〃	環境整備(グリーンベルト、玉つげ植樹)	682
55	〃	放送室の冷房設置、教室の時計設置	658
56	小坂井純一	郷土読本 「私たちの金華」創刊	620
57	川島 右	110周年記念誌発刊	589
58	関谷 勝博	図書館充実と文化的環境づくり 「金華の教育」「よい子の暮らし」作成	565
59	〃	教育機器の充実 パソコン4台、ワープロ1台、その他付属品	539
60	後藤 直剛	新教育機器導入研究奨励校 理科室床張替、図工室水道施設完備	509
61	〃	道徳教育推進校(61・62年度) 「金華の教育」見直し作成 川合玉堂先生「富士の絵」修復と 額新調	461
62	山本佐七郎	道徳教育発表会に協力、教育機器の充実 (ワープロ 1台、パソコン5台)、 体育館渡り廊下環境整備	458
63	田代 俊久	中部未来博見学に協力 環境整備 日本PTA全国岐阜大会に協力	430
平成 元年	〃	セントリス野球少年団を迎えて サマーフェスティバルを主催 8ミリビデオセット整備	414
2	田中 廣定	・ミズリー州少年野球団を迎えて サマーフェスティバルを開催 ・同和教育の観点をふまえた道徳 年間指導計画作成	392
3	〃	・10月20日金華のまちづくり協議 会 主催の「ワイワイ広場」に参加 ・創立120周年記念実行委員会発 足	364
4	金森喜久雄	・10月18日創立120周年記念各種 行事 創立120周年記念誌発刊 ・「富士の絵」に強化ガラスケー ス設置	360

伊奈波中学校とPTTA

●沿革

本校は昭和二二年（一九四七）五月、戦後の新制度のもとに「岐阜第一中学校」として開校された。しかし校舎がなく、金華小学校に併置された。校下は金華小学校、京町小学校の二校下でのスタートだった。

翌二三年（一九四八）、現在地の則武新家敷地内に校舎の建築が開始された。この年の四月校区変更により、明徳小学校区が合併され、生徒数も一五〇〇余名を数えるにいたり、一・二年生は則武小学校に、一・三年生は金華小学校において授業を行う状態であった。さらに九月には再度校区変更があり、明徳小学校区は明郷中学校に編入され、新しく、島の早田と、則武の新田区が加わり、校名も「金華中学校」と変更された。

この間、校舎建築が着々と進められ、二年生一〇クラスが則武校舎に入ることができたが、まだ一・三年は金華小学校と女子商業学校に間借りするという状態が続いていた。



重層式中央渡り廊下
(平成4年3月完成)

シンボルである金ペンの校章
(北門扉、昭和38年卒業生寄贈)

二四年（一九四九）一月、女子商業学校教場の六教室も則武校舎に移転。二月二一日には、校名も「岐阜市立伊奈波中学」と改められた。続いて四月の始業時には、金華教場も則武校舎に移転され、全校生徒がはじめて一つの校舎で授業がうけられるようになり、伊奈波中学校の真の第一歩が始まった。六月には新校舎落成記念式典が盛大に行われ、学校教育計画、ピーティーエー活動研究発表会が記念行

伊奈波中学校とPTA

年度	生徒数	代	校長名	代	PTA会長名	沿革内容
昭和22	703名	初	深浦泰平	初	井上英一	5月「岐阜市立第一中学校」として開校
23	1,521	〃	〃	〃	〃	8月「金華中学校」と校名を変更
24	1,547	2	福手政雄	〃	〃	2月「岐阜市立伊奈波中学校」と校名を変更
25	1,682	〃	〃	2	土川修三	
26	1,560	〃	〃	〃	〃	2月新校舎竣工
27	1,571	〃	〃	3	岩本藤吉	3月理科室、音楽室竣工
28	1,599	〃	〃	〃	〃	
29	1,773	〃	〃	〃	〃	
30	1,903	〃	〃	〃	〃	7月南舎新築校舎竣工
31	2,002	〃	〃	〃	〃	4月新校舎竣工、放送室完成、西校舎竣工
32	1,879	3	松田 充	4	藍川徳成	2月校門、正門竣工、西門竣工
33	1,831	〃	〃	〃	〃	
34	1,789	〃	〃	〃	〃	
35	1,962	〃	〃	〃	〃	5月体育館竣工
36	2,319	〃	〃	5	桜井多市	4月新築校舎鉄筋3階建竣工
37	2,411	〃	〃	6	永井忠雄	3月文化誌「いなば」創刊
38	2,158	4	林 弘司	〃	〃	2月第10回東海三県学校図書館コンクールで県下最優秀賞を受賞
39	1,906	〃	〃	7	加藤永三	12月本館北側庭園完成
40	1,717	〃	〃	〃	〃	9月正面玄関の校門竣工「母子像」完成
41	1,552	5	横山栄助	8	毛利義光	
42	1,522	〃	〃	9	藤田完護	7月プール竣工（7コース、25m）
43	1,498	〃	〃	〃	〃	
44	1,496	6	野田 満	10	杉山甚逸	
45	1,445	〃	〃	〃	〃	
46	1,440	7	加藤義勝	11	梶浦 寛	
47	1,473	〃	〃	12	瀬川和郎	6月野球用バックネット完成
48	1,508	〃	〃	〃	〃	6月新体育館竣工
49	1,527	〃	〃	13	岩井秀一	
50	1,518	8	神谷福次郎	14	鈴木秋田郎	
51	1,498	〃	〃	15	山吉二郎	11月音楽室、理科準備室、更衣室竣工
52	1,504	〃	〃	16	白井 進	
53	1,463	〃	〃	17	中島忠雄	
54	1,334	〃	〃	18	加藤昌弘	6月新校舎竣工（校長室、職員室等）
55	1,288	〃	〃	〃	〃	
56	1,275	9	住積二郎	19	横山鉄三	
57	1,345	〃	〃	20	河村 昇	8月校舎改築工事完了（技術棟、管理棟）
58	1,335	〃	〃	21	小坂井純一	1月体育館への渡り廊下完成
59	1,350	10	内田英夫	22	川上善之	
60	1,348	〃	〃	23	田中三郎	
61	1,302	〃	〃	24	関谷勝博	1月第1回「雲のつどい」を実施
62	1,247	〃	〃	25	山口 実	3月格技棟、部室7室竣工
63	1,176	11	林喜八郎	26	杉原和彦	5月第1回岐阜市少年自然の家宿泊研修実施
日1	1,055	〃	〃	27	八田和彦	
2	962	〃	〃	28	増田義明	8月北舎改修工事竣工
3	909	〃	〃	29	村地俊美	3月北舎と南舎重層度り工事竣工
4	869	12	尾崎和美	30	日比野攻	3月中庭改修工事完成

事として行われた。

当時の伊奈波中学校周辺はまさに荒地そのものであったが、この荒地を「凌雲台」と名付け、雲を凌ぐような高い理想と不撓不屈のパイオニア精神、そ

して絶ゆまぬ文化の創造をめざす伊奈波中学の教育理念が確立されたと言われている。「凌雲」と刻まれた記念碑や校章の金ペンが今も伊奈波中学の象徴として、大切にされている。

新正門（昭和62年6月竣工）より前庭、運動場を望む



岐阜市立
伊奈波中学校

玄関脇につけられた校名

水はけ工事の済んだ運動場から見た格技棟（左）と南舎（右）



創立以来の不撓不屈の高い教育理念を今に伝える「凌雲の碑」

金華青少年育成市民会議

●育成市民会議の歩み

昭和四三年（一九六八）頃から、全国的に青少年問題が取りざたされるようになり、行政提唱指導の元に、昭和四八年（一九七三）に校下にも青少年健全育成に極めて重要な意義を持つ「青少年育成会議」が結成された。

校下自治会役員が中心となって組織されて以来、特に青少年育成と育成組織の充実促進、運営方法等の諸問題について、初代会長山田定、副会長河合慶太郎、当時校下広報連合会長後藤喜八等の各氏を中心として、多くの諸先輩役員が苦勞を積み重ね、校下各種関係団体の協力と参加も得られる様になって、健全な地域づくり・郷土づくりを目標とした会として発展してきた。

昭和五七年度には、懸案の「家庭・少年・青年・非行対策・推進委員」の各専門部会が確立され、一層充実した実践活動進められるようになった。

●育成市民会議事業活動

校下青少年の健全な育成を図るため、各部会が計

金華青少年育成市民会議●各種団体

画した事業の実践方法と具体的な手だてを、会全体会議で話し合い、「明るい家庭と町づくり」を呼びかけ、校下集会・ミニ集会の推進を基本事業とした活動を行っている。

〈育成市民会各部会の主な活動〉

○家庭部会

「明るい家庭づくり」を推進するために、「家庭の日」の定着と「子育て講座」を、校下子ども会育成役員会・校下公民館各種団体長運営委員会会議等の席をかりて推進運動をつづけている。

○少年指導部会

年間事業では、校下の大人と子供達のふれあい広場として「子ども創作みこし大会」を四月の岐阜祭に、その他「校下少年ラジオ体操大会」「校下少年ソフトボール大会」等の事業を主催・後援して援助と環境づくりをし、ふる里創成の推進を行っている。

○青年育成部会

昭和六三年（一九八八）三月、部会長を努められていた江崎勉氏が、校下自治会、関係団体に協力を求



子供創作みこし大会（昭和58年4月4日、岐阜公園ロープウェー前広場）



子供創作みこし大会（昭和62年4月4日、岐阜公園野外音楽堂）

め、「金華青年団」を再結成された。昭和六三年度と平成元年度の二年間にわたり、市より青年団組織強化育成事業モデル校下に指定を受け、青年団育成援助、青年団員加入促進が行われている。校下での「市民運動会」「防災訓練」「市一斉清掃」等の地域事業にも労力奉仕参加し、校下民に頼られる青年団の育成がなされてきた。又、青年団員は市民会議主催の諸行事にも積極的に参加し、岐阜市のなか

金華青少年育成市民会議●各種団体

で好成绩をあげている。県の一大事業の一つ「岐阜県青年海外派遣研修生」（岐阜市の年間推選六名）として、平成元年、平成三年に各一名が金華青年団員が選ばれ、ヨーロッパ派遣されている。

○非行対策部会

有害環境、問題少年をなくすために校下少年補導員と共に、街頭巡回補導・非行化防止集会の開催等を行っている。

○推進部会

各部会・育成事業の推進と活動を高めるために、二名の副会長が兼務し、担当を「家庭部会と少年指導部会」「青年育成部会と非行対策部会」に分け、助言と事業活動の環境づくり等を行っている。

複雑多様化していく社会情勢のなかで、今後、家庭・学校・地域関係各団体との連携を一層密にし、校下住民に青少年の健全育成活動趣旨内容の理解を求め、一人でも多くの参加協力者を得て、推進することが求められている。

初代会長 山田定

（昭和四八年四月～平成元年三月）

二代目会長 杉山周三

（平成元年四月～現在）

金華子ども会育成連合会

●金華子ども会育成連合会の歩み

昭和三三年（一九五八）頃、文部省の委嘱事業として「子どもの集団に親達が結びついて行う社会教育活動」を主目的として、全国的に「子ども会」が組織された。金華校下ではPTAの「親子の会」として発足し、育成世話人もPTAの役員（校外生活委員会）がPTA活動として子ども会を育成指導していた。

その後、昭和五五年（一九八〇）に「子ども会活動」のあり方について「PTA依存を脱して、地域一般社会人の参加をふくめた子ども会を育成するように」との市の行政指導があり、当時育成活動に参加した多くの先人達の英知と努力により、本来の子ども会活動のできる会へと発展成長することができた。

昭和五五年～五六年頃には、子ども会活動の重要性が、校下の多くの人達に認められるようになり、理解も深まり、校下自治会連合会（旧広報連合会）、学校、PTAの指導協力も得られ、校下各種団体か

金華子ども会育成連合会●各種団体

らも「子ども会育成会」と「子ども会指導者」への協力支援が得られるようになった。

特に校下自治会連合会に子ども会が、社会活動団体として認められ、育成活動助成費を校下全所帯より、自治会連合会を通じて受けられるようになり、いわば校下民全員が、子ども会の育成者となった。それにより、従来の子ども会会員の会費納入制度を廃止することができ、組織も各町内単位で子ども会を強化するため、校下自治会連合会と同じ組織に編成し、地区、ブロック、連合会方式がとられ、健全な育成活動が推進されていった。

こうして、各関係団体との協調、特に学校、PTAとの連携を深めながら、「地域の子どもは、地域で守り、健全育成する」ことがなされるように地域の理解ある人達の暖かい指導と日々の努力の積み重ねにより現在に至っている。

今後は、児童数が減少し、価値観が変化していく中で、活動内容の見直し、時代にあった新しい事業の創造、組織の再編成、子ども会の重要性を地域の

人達により理解を深めてもらおう努力など、育成者、指導者の一層の資質向上を図ると共に、関係諸団体との連携を密にすることが望まれている。

●子ども会とは？

子ども会は、同じ地域に住む子ども達が、学校や家庭を離れて、地域の人々の指導と援助を受けながら、自分達で計画した集団的な活動を通して、次のような資質を身につけることを目的とした子ども達の集団である。

- 一、自分から進んで行動し、責任をもって務めを
はたすこと
- 二、友達と仲良く力を合わせて仕事をする事
- 三、色々なものを工夫して作り出す力を伸ばすこ
と
- 四、子ども会の一員であることを自覚し、規則正
しい生活態度を身につけること
- 五、進んで奉仕を行い、社会のために尽くす態度
を身につけること
- 六、自分の住んでいる町を愛する心をやしなうこ
と

●平成三年度子ども会事業

四月 岐阜まつりみこし広場



「みんなでワッショイ！」岐阜
祭りみこし広場（平成3年4
月4日）



「さあ、がんばれ！」金華綱引
き大会（平成4年2月16日）

インリーダー開講式

五月 交通少年団入団式

校下市民運動会参加

第三ブロック子どもフェスティバル参加

六月 少年消防クラブ上進式

七月 大仏フェスティバル参加

子ども会生産活動（廃品回収）

八月 早起き登山（PTAに協力）

地区別子ども会開催

一〇月 金華ワイワイ広場開催

校下文化祭参加

一二月 市環境美化運動参加

一二月 地区別子ども会開催

一月 市新年子ども会大会参加

二月 金華綱引き大会参加

三月 地区子ども会総会

●歴代会長

昭和四一年～四五年 奥田利雄

四六年～五三年 村瀬準市

五四年～六二年 杉山周三

六三年～平成二年 神戸史郎

平成 三年～現在 山本佐七郎

金華子ども会育成連合会●各種団体



サマーフェスティバルでアメリカのセントルイス少年野球団と交歓
(平成元年8月)



金華クラブスポーツ少年団

昭和四五年（一九七〇）に江崎勉氏らによってソフトボールクラブとして男子のソフトボールチームが設立され、昭和四八年（一九七三）には堀江一英、関谷国安氏らによって女子バレーボールチームが設立された。これを母体として、昭和五一年（一九七六）に「金華クラブスポーツ少年団」として正式に金華クラブスポーツ少年団ソフト部・野球部（男子チーム）、バレーボール部（女子チーム）の三部が設立された。

部員は小学校三年生より六年生までの生徒からなり、二〇〇名前後の部員数を持っていた。幾多の市大会、県大会に良い成績をおさめてきたが、その後、生徒数の減少や女子ソフトボールチームが加わり、昭和六三年（一九八八）から、金華クラブスポーツ少年団男子部野球チーム、金華クラブスポーツ少年団女子部バレーボールチーム、ソフトボールチームとして現在に至っている。

「金華クラブスポーツ少年団」

（役員） 団長一名、副団長二名、理事六名、事務局



卒団式（昭和63年3月23日）



卒団式（平成元年3月23日）

一名、顧問一名で組織されている。
（目的）少年団はスポーツを通じて児童の健康及び体位の向上、並びに団体生活によって協調、奉仕、友愛の精神を養う事を目的とする。

歴代団長は次の通り。

山吉 二郎（昭和五一年～昭和六〇年）

後藤 直剛（昭和六一年～平成二年）

関谷 勝博（平成三年～現在）

金華老人クラブ連合会

●現在までのあゆみ

時代の要請によって老人クラブ結成の気運が岐阜市において芽生えたのは昭和三五年（一九六〇）頃である。種々の経過の末、ようやく昭和三七年（一九六二）に、一七クラブ、一〇九三人の会員で「岐阜市老人クラブ連合会」が結成された。

金華校下においては、これより少し遅れて、昭和四〇年（一九六五）四月に、四クラブ、約二五〇人の会員で「金華老人クラブ連合会」が結成され、岐阜市老人クラブ連合会に加入した。

以来発展を重ね、平成四年現在は一四クラブ、会員一二〇〇人を擁する会となった。連合会長は加藤静治、坂井弥一郎、尾関一郎を経て、現在は野村利信が務めている。

会の運営は自らの会費に加えて、国、県、市等よりの助成金、補助金、篤志者よりの寄付金等の恩恵に浴して維持されており、健康管理に励むと共に、お互いに楽しみながら種々の行事に参加したり、老人の成し得る社会奉仕に努めている。

金華老人クラブ連合会 ● 各種団体



金華老人クラブの健康体操（月3回）

●現在の主な行事

- 福祉大会 (年一回)
- 物故者慰霊法要 (年一回)
- 旅行会 (年五、六回)
- 健康体操 (月三回)
- 清掃奉仕 (月一回)
- 講演会、映画会 (適宜)
- 友愛活動 友愛チーム(月一回)
- 独居老人、寝たきり老人の慰問 (適宜)
- ゲートボール、ペンタク、グラウンドゴルフ、囲碁、将棋、各種の手芸等 (適宜)

●問題点

現在金華校下には会員有資格者(六〇才以上の人)が約二〇〇人いるが、老人クラブへの加入率は五〇%に過ぎない。老人クラブを毛嫌いせずに、進んで入会され、種々の行事に楽しみながら参加される事を願っている。

金華老人クラブ連合会 ●各種団



平和の折鶴
友愛チーム

金華体育振興会

現在の金華体育振興会は昭和三九年（一九六四）

八月三〇日、「金華体育委員会」として創立された。今の消防会館にて来賓者に金華広報連合会会長後藤喜八氏並びに岐阜市保健体育課長沢田文吉氏を迎えて総会が開かれた。

体育委員会は、校下住民の健康的にして明朗なる生活をモットーに、社会体育全般の振興に寄与し、併せて地区発展に貢献する事を目的に設立された。行事内容は、自治連合会主催の市民大運動会をはじめ、青壮年ソフトボール大会、少年ソフトボール大会、体力テスト、カラオケ親睦会、校下綱引大会、グランドゴルフ、卓球教室、健康体操教室、金華小学校校庭夜間開放運営等である。

また、市保健体育課よりの要請により、各校下に各種競技運動等で指導的役割をはたす体育指導員を置くことになり、当校下では現在二名の指導員が活躍されている。

歴代会長は次の通り。

河合慶太郎（昭和三九年～昭和六〇年）

金華体育振興会●各種団体

江崎 勉（昭和六一年～昭和六三年）
加藤 重光（平成元年）
河崎 恒治（平成二年）



市民体育祭でラジオ体操
（平成3年5月）



市民体育祭振興会
（平成3年5月）

金華母子福祉会

昭和二六年（一九五一）に会が発足し、会長に高木一枝が就任、その後昭和三〇年（一九五五）から昭和五九年（一九八四）まで松枝悦子、昭和六〇年（一九八五）から現在まで小野静子が務めている。児童が健全に成長していくためには、正常な家庭環境のなかで育てられることが最も望ましいことであるが、病气その他の不幸のために夫を失った方や、児童をかかえて離婚した母子家庭は、児童の教育と生計の維持という二重責任を負わされ、不安な状態に置かれることが少なくない。

そのためにいろいろな援助活動が必要としており、その援助活動をしているのが母子福祉会連合会である。

●事業活動内容

- ① 母子寡婦福祉大会
- ② 新入学児童激励会
- ③ 母子及び父子家庭等の中学卒業の激励会
- ④ 一日親子のつどい
- ⑤ 校下母子福祉の総会

母子福祉会 ● 各種団体

⑥ 「和裁教室」（母子寡婦家庭の母及び子女を対象。教室は岐阜市端詰町福祉事務所分庁舎三階）



母子福祉の1日親子のつどい“汐干狩”

赤十字奉仕団金華分団

●「金華善行会」から「赤十字奉仕団金華分団」へ

金華奉仕団の発祥は、奉仕精神旺盛な方々の善意から始まり、昭和三五年（一九六〇）に一三名のグループで発足し、「善行会」と命名された。今でいうボランティアの走り、協力の輪が広がっている現代と違い、人数は少なく、花火大会後の清掃や年末助け合い運動の協力等に一日がかりの重労働の奉仕活動をした。現在では発足当時活躍された人々の多くは故人となっている。

金華善行会発足より三年目の昭和三七年（一九六二）五月、日赤県支部直属赤十字奉仕団として、金華、京町、白山、梅林、加納西の五分団が結成され、昭和三九年（一九六四）には「岐阜市赤十字奉仕団」が発足した。それから三〇年、現在三四名の団員は、赤十字奉仕団信条である「全ての人の幸せを願い、影の力となって奉仕する」に基づいて、先輩の方々の志を受けつぎ、奉仕活動を続けている。

●事業活動内容の一例

平成二年 四月 役員会

赤十字奉仕団金華分団●各種団体

- | | |
|-----|--|
| 五月 | みやこ授産所奉仕
校下市民運動会
市赤十字奉仕団総会
分団総会 |
| 六月 | 寝たきり老人用ねまき製作
講演会（講師篠田雄介）
在宅寝たきり老人慰問
長良川清掃 |
| 七月 | 分団役員会 |
| 八月 | 国立長良病院洗濯物たたみ
ふれあい広場 |
| 九月 | みやこ授産所奉仕・清掃奉仕
岐阜市老人体育大会 |
| 一〇月 | 独居老人励まし運動
クリンシティー清掃奉仕 |
| 十一月 | みやこ授産所奉仕
歳末助け合い運動募金
人権擁護シンポジウムパレード |
| 十二月 | みやこ授産所奉仕 |

三月 長良病院洗濯物たたみ

みやこ授産所奉仕・清掃奉仕

赤十字奉仕団金華分団役員

○善行会

創設 昭和三五年（一九六〇）

会長 船戸寛海

○赤十字奉仕団

創設 昭和三七年（一九六二）五月

団長 初代 河合ひで 昭和三七年五月～昭和

四五年三月

二代 宇野静子 昭和四五年四月～昭和

六二年五月

三代 松野廣子 昭和六二年五月～現在

役員 団長→副団長→会計→書記→会計監査

●今後の課題

高齢化社会を迎え、独居老人・寝たきり老人がますます増加すると言われている。福祉が多様化されつつあるなかで、お手伝いの奉仕を越えて、自分づくり、自己研修を混えた奉仕が求められている。力を合わせて小さな奉仕から、大きな奉仕の輪に広げて行く努力をしつつ、人と人との和を大切にして、奉仕を通じて自己の生活を見直し、反省し、一層参

赤十字奉仕団金華分団 ●各種団

加の意義を深めねばならない。



校下防災訓練における応急処置訓練



財団法人岐阜県身体障害者福祉協会金華支部

●沿革

岐阜県身体障害者福祉協会は、昭和二五年（一九五〇）四月、身体障害者福祉法の施行に伴って設立された。当時は終戦直後の荒廃のなかで、経済的にも社会的にも大きな痛手を被った、まさに混沌とした時期で、福祉施策など皆無に等しく、しかも通信網も交通手段も今日から想像も出来ない程悪条件にありながらも、一人、二人と声を掛け合って仲間を増やしながら、この会が結成された。

昭和五六年（一九八一）の国際障害者年を契機として、ノーマライゼーション理念の普及等により、「障害者が、障害のない人とともに家庭や地域において通常に生活し、社会参加が促進されるようになるための条件整備を行うこと」であることが広く認識されるようになり、金華支部は県を参考にしてさまざまな事業を展開してきた。

しかし、障害をもつ人々が他の健常者と同様に社会の構成員としてあらゆる分野に参加していくには、残された課題も少なくなく、当支部のより一層の活

動が期待されている。

●平成三年度事業活動

- 五月一三日 岐阜A・B体育大会（伊奈波中）
- 五月上旬 岐阜市連合会ゲートボール大会
- 五月二三～二五日 日身連全国福祉大会（仙台市）
- 六月一七日 県身障体育大会（大垣陸上競技場）
- 七月一五日 県身障福祉大会（岐阜市民会館）
- 八月五日 県青年部主管水泳大会（大垣市）
- 八月 岐阜市連合会 研修旅行
- 九月二日 岐阜市連合会福祉大会（市民会館）
- 九月 県ゲートボール大会、県福祉展、友愛の集い
- 九月二三日 ふれあい広場（文化センター）
- 九月三〇日 岐阜市連合会なかよし運動会
- 一〇月 県ソフトボール大会、卓球大会、ゲートボール大会等
- 十一月、十二月 全国スポーツ大会、啓蒙運動、フェスティバル等

財団法人岐阜県身体障害者福祉協会金華支部●各種団体

金華児童愛護会

登下校時の児童の交通安全活動は、昭和二九年（一九五四）四月頃から始まった。先生方と六年生の生徒が、赤旗を上げ下げして交通指導している姿を見て、先生方に負担をかけてはいけないと考えた有志数名が、自分達の手で交通指導を行い始めたのである。二、三名が交替で毎朝交通指導をした。当時は信号機がなく、道路の中心に出て車を止め、児童の安全を確かめてから児童を誘導した。

この活動に加わる人が次第が増えて一五、一六名になった時、当時の鷺見校長先生が、この会の名を「金華児童愛護会」と名付けられた。その後、岐阜中署から手信号の講習を受け、会員の身分証明証とユニホームができて、一人前の会らしくなった。

その後、当会の要望や関係各位の努力、それに篤志家の寄付によって、材木町と本町に信号機が取り付けられ、児童の交通安全に大いに貢献することになった。

このような当会のささやかな活動が認められ、岐阜中署からはたびたび表彰を受け、県の表彰、全国

金華児童愛護会●各種団体



金華児童愛護協会総会（昭和32年5月）

の表彰も受けることができた。
現在も児童の登校時に交通安全を願い、PTAのお母さん方が当番制にて初期の目的を受け継ぎ、四〇年近く奉仕活動を続けている。

金華のまちづくり協議会



機関誌 まちづくりニュース

金華のまちづくり協議会●各種団体

岐阜市の発祥の地である金華の歴史と文化を大切にして、金華らしい魅力あるまちづくりをすすめることにより生活環境を整え、自然と活力に満ちた個性ある豊かなまちづくりをめざして地元市議会議員吉田好成氏らの提唱により平成元年に「金華のまちづくり協議会」が発足しました。

自分たちが、自分たちのまちをどのように考え、住んでいくのか、より潤いのある住み方ができないか、誰でも自分の意見を言えるまちにするために、人づくり、まちづくりに取り組み、誰もが、金華のまちのために、何か自分で出来ることで参加していくよう努めています。

協議会は、二年一期で、年会費一口三千円の支援会費で運営されています。初代会長三井僖平、二代目吉田豊会長のもと、校下全世帯にアンケートを二回実施し、六課題二十三テーマに問題点をまとめ平成三年自分たちで出来ることから積極的に取り組む組織に改めました。

新しい町家づくりに取り組む「住まいづくり部会」

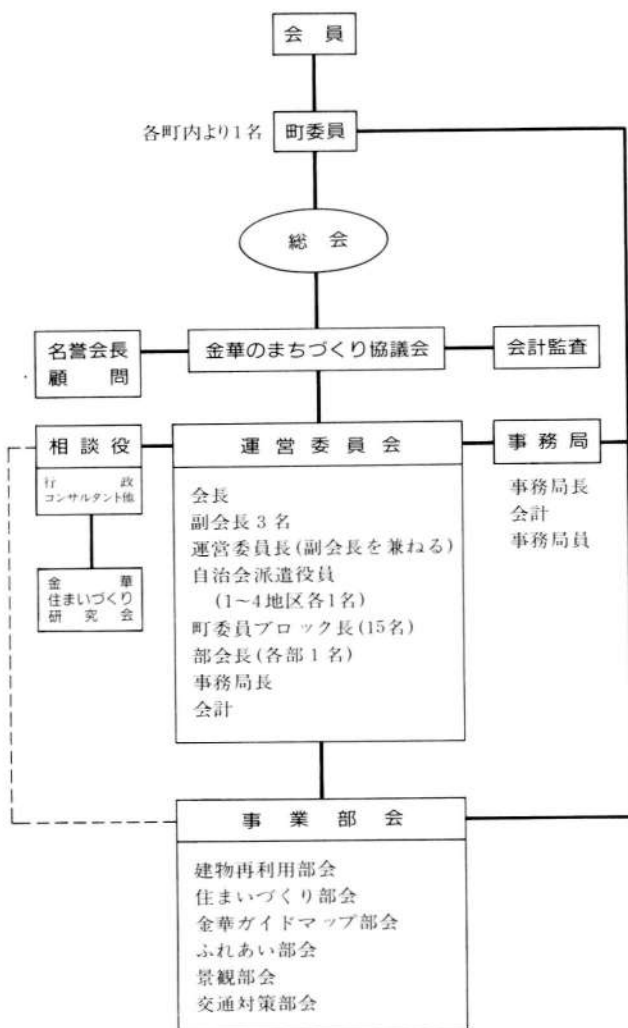
部会長柴田行康、コミュニケーションの活性化をはかる「ふれあい部会」部会長船戸喜太郎、古い蔵を整備し文化の拠点づくりに取り組む「建物再利用部会」部会長田代俊久、一方通行の見直しや駐車場問題に取り組んでいる「交通対策部会」部会長高木幹雄、景観形成に関わる「景観部会」部会長金森喜久雄、金華をもっと知ってもらうためにガイドマップづくりの「ガイドマップ部会」部会長河崎良史の五部会と審議機関である運営委員会と決定機関である総会で組織されています。広報は「金華のまちづくりニュース」を発行し全世帯に配布しています。

平成四年の成果は、

①住まいづくり八つの約束の制定

金華のまちづくり協議会組織

平成3年10月24日改正



②金華のガイドマップ・一万部発行

③拠点「蔵」のオープン

名
所
●
旧
跡



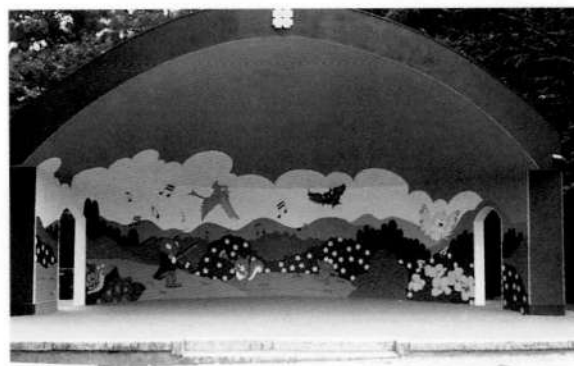
岐阜公園



明治大帝聖像



女神の像



音楽堂 春、秋には色々な催しでにぎわった



若き日の信長像



杭州門から岐阜城を望む



滝庭園



杭州湖 鯉がたくさん放流されている



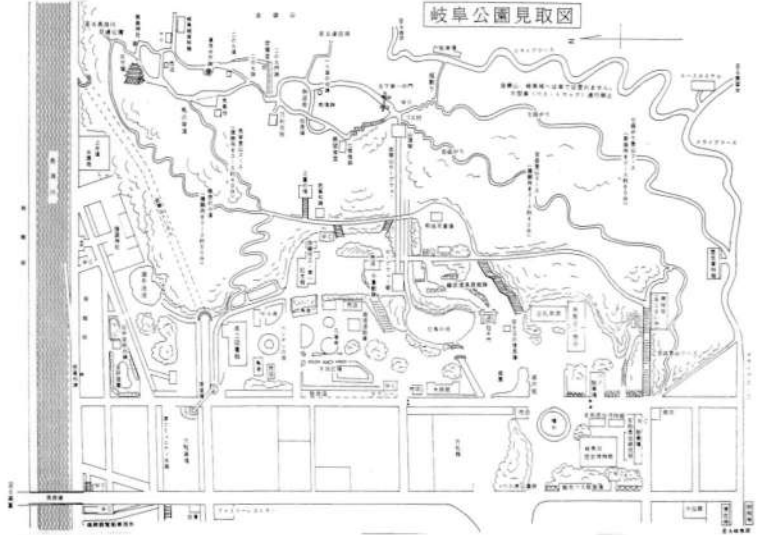
菊人形 道三と義龍



菊人形 信長と濃姫



小公園 花見客でにぎわった所
(現在は友好庭園)



岐阜公園見取り図

岐阜公園●名所、旧跡



三重の塔
大正六年十一月建立

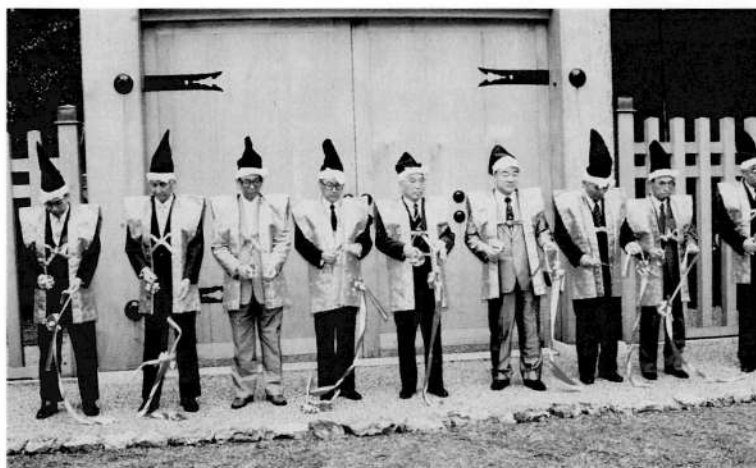


子供達に夢を与えた児童科学館



平成の瀧

織田信長居館跡冠木門全景



織田信長居館跡冠木門完成式セレモニー



織田信長居館跡完成式セレモニー鉄砲隊



完成式セレモニー自作のヨロイカブトで参加



加藤記念館



完成式セレモニー横綱千代ノ富士土俵入り



来園者休憩所 完成テープカット



来園者休憩所全景



来園者休憩所 華松軒庭園

来園者休憩所 身障者用車イスでも楽
に出入り出来る様に舗装道路が完成

岐阜公園●名所、旧跡

歴史博物館



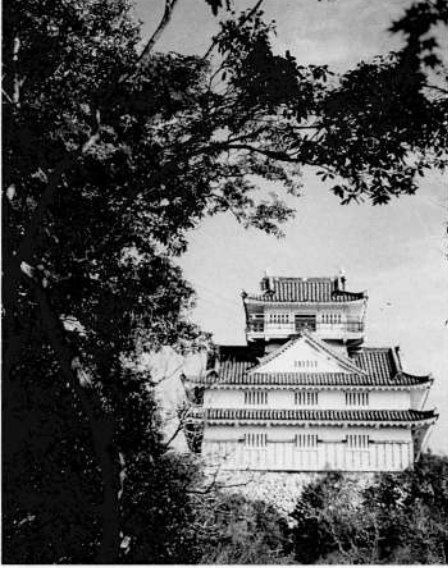
岐阜城・ロープウェイ



昭和18年焼失した岐阜城の石垣



岐阜城（模擬城）
明治43年建設 昭和18年2月焼失



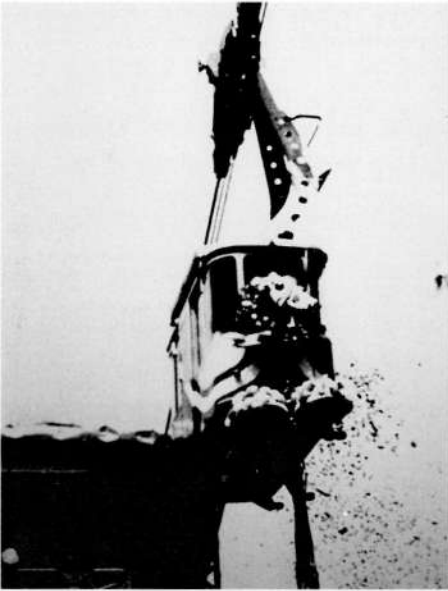
秋の岐阜城 一年間の内、紅葉で金華山が一番美しい季節である。



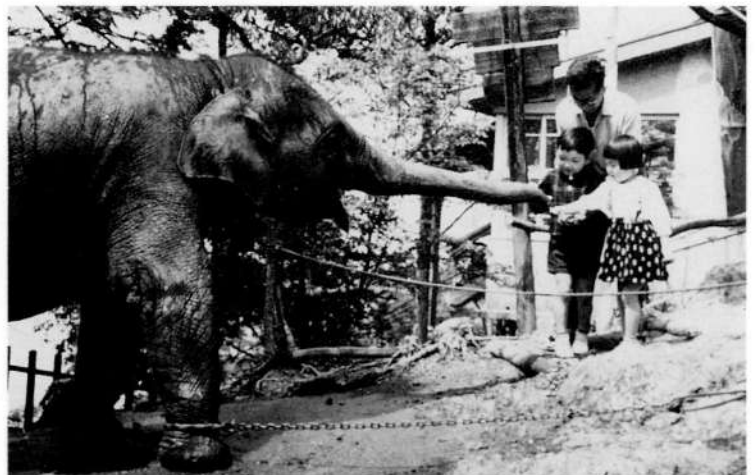
春の岐阜城
シイの花の群生



冬の岐阜城 雪に覆われた金華山山頂の力強い雄姿は、戦国城主の姿を連想させる。



昭和30年 金華山ロープウェイの開通式
当時のゴンドラは21人乗り

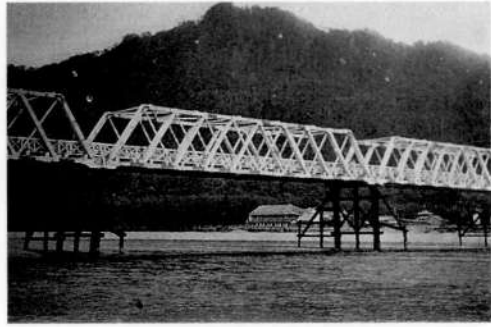


昭和35年5月 金華山ロープウェイ開通5周年記念行事として、象の金華山登山所要時間を当てるクイズがあった。約、20日間山頂に滞在した。

長良橋・金華橋



長良橋 新橋と取り壊される旧橋を上空より撮影



長良橋 明治17年架橋のものと思われる。明治33年、県が架橋するまでは有料であった。



昭和31年10月 地元とのトラブルも多かった、新旧長良橋



長良橋 昭和32年竣工
橋長272m 幅・車道12m 歩道3m
事業費11億2000万円 基礎は圧搾空気潜函工法で施工



新しく架設された長良橋 (昭和32年架設)



長良橋南側の拡幅のための住宅の取り壊し作業



長良橋旧橋 大正4年架設 板張り鋼構橋

岐阜城・ロープウエー●名所、旧跡
長良橋・金華橋



金華橋 修景照明 昭和63年6月30日設置 施工費1360万円 ランプ20灯 日没に点灯、午後10時消灯



金華橋 昭和39年10月竣工 橋長301.6m 幅15m 事業費4億6000万円

夏期マルチ、ハロゲンランプ
緑色の涼しい色

コミュニティ水路



第一期工事完成式後の市長他来賓の初渡り



昭和62年 第一期工事前の用水路



第一期工事完成式 テープカット



第一期工事完成式にて金華小児童のお礼のことば



コミュニティ水路にて鮎のつかみ捕り



コミュニティ水路にて鮎のつかみ捕り



岐阜城ライオンズクラブより寄贈されたブロンズ像



私もつかまえた見て



平成元年 第二期工事完成セレ
モニー 鯉の放流

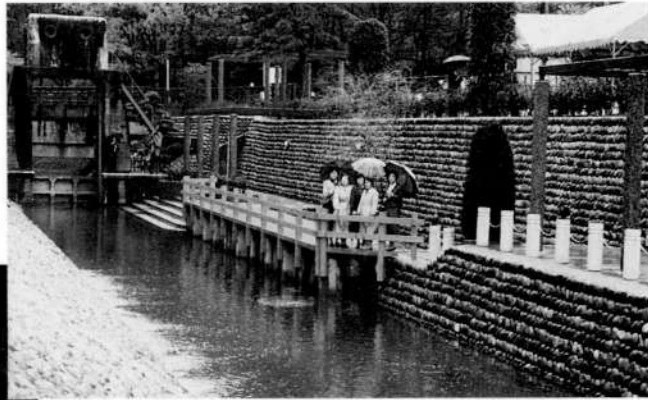


平成元年 第二期工事完成セレモニー



昭和62年 第二期工事着工前の用水路

コミュニティ水路●名所、旧跡



第二期工事完成後の全影



長良川ロータリークラブより寄贈されたライトア
ップ



岐阜城ライオンズクラブより寄贈されたブロンズ像

鵜飼納涼台・金華山トンネル

昭和37年頃の納涼台
日野と、市内を結ぶ最短距離であ
り、利用者も多い。

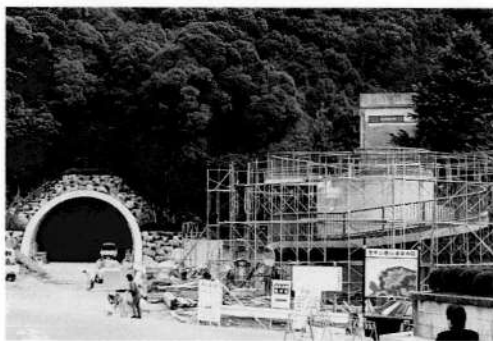


納涼台付近の景観 拡幅
工事前（年代不明）

リバーサイドウエーとして道路
も拡幅出来て、更に利用者が多
くなった。納涼台の現在道路。



昭和58年頃 長良川リバーサイドウェイ計画が立案され、金華
山の美しい自然も破壊され、トンネルが掘られる事になった。



最新式螺旋型渡道橋の工事中（昭和61年）



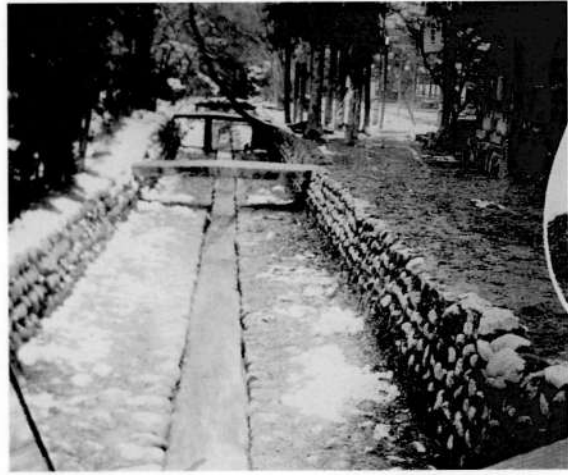
リバーサイドウェイの開通金華山トンネル西口



長良川リバーサイドウェイ開通記念式典
（昭和62年4月）

鶉飼納涼台
金華山トンネル●名所、旧跡
忠節用水

梶川町妙照寺境内開渠原況



忠節用水



市内水路（萬松館東附近）



水門（通称ロボット）

岐阜公園 友好庭園南水門附近



末広町 西組附近

岐阜祭り・大佛フェスティバル



岐阜祭りに奉納された金華子供会のみこし

安宅車の弁慶富樫の操り人形



村上健一氏 岐阜市歴史博物館へそろばん神輿を寄贈に対する蒔田市長より感謝状 戸田精吉、吉田好成市議同席



村上健一（本町4丁目-3）昭和4年～13年まで10年間全国珠算競技大会で連続優勝 珠算歴70有余年と卒寿を記念し、そろばん神輿を製作



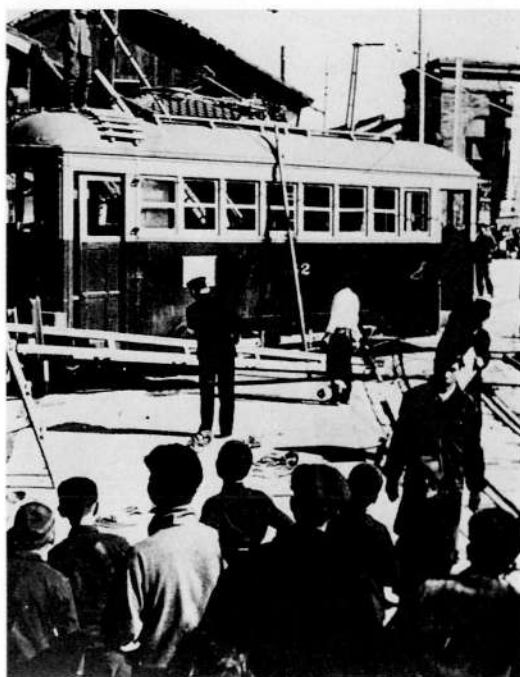
大佛フェスティバル 小学生が書いたあんどん



大佛フェスティバル盆踊り大会

岐阜祭り
大佛フェスティバル●名所、旧跡
市内電車

市内電車



材木町のカーブを曲がり切れずに脱線し、復旧工事中の市内電車。右奥に見えるのが十六銀行材木町支店（昭和30年ごろ）

大宮町 旧公園前電停あたりを行き交うありし日の市電
街並みに金華山麓に赤い電車がとけこみ美しい情景を描き出している



昭和63年5月1日北町線廃止日無料乗車、さよなら電車の光景市民 別れ惜しみつつ乗車される

伊奈波神社由緒

祭神

主神 五十瓊敷入彦命 垂仁天皇の第一皇子

配祀神 日葉酢媛命 主神の御母

淳熈斗媛命 主神の御妃

彦多都彦命 主神の外祖父

物部十千根命 主神の功臣

神徳

主神は英邁勇武に坐し、日本書紀によると「垂仁天皇から弓矢を賜い武事を統べ、勅命により美濃、尾張、河内、大和、和泉の国等を初め、諸国に開拓された池溝の數実に八百に及び、そのため産業は発達し天下は太平であった。」と記されてゐる。又鍛河上を喚して劍一千口を作り之を石上神宮に納めて有事に備え、治安維持に任じ給うた。国土開拓はその當時として將に画期的な大事業でその恩沢は燦として輝き、産土神として又氏神様として崇敬は弥々加わり、そのご神徳は年と共に殷盛を極む。

鎮座



伊奈波神社正面

景行天皇十四年（命の薨去の翌年）命の偉徳を偲び武内宿祢をして椿原（今の岐阜公園丸山の地）に鎮斎せしめ給うたのが始まりで、天文八年斎藤秀龍（道三）稲葉山を居城とするに当り、現在地に遷し奉った。

社格

龜山天皇弘長元年正一位の極位陞叙、明治四年県社、昭和十四年国幣小社に列格仰出さる。

社殿造営

社殿造営について往古の事歴を詳にすることは出来ないが、王朝時代叙位の恩典のあった頃は勿論社殿も完備してゐたと推定される。国主土岐氏の支援、貞享年間尾張藩主の造営により社殿整備し宏壯典雅輪奐の美を盡したとある。明治に至り濃尾江越の大震災により神輿庫一棟を残し悉く焼盡したが直ちに復工、昭和に入り本殿幣殿の上葺、神域の拡張、樓門、社務所、儀式殿等の新築し、之等の建物は凡て總檜材素木造りで整然たる配置を占め、莊重の中に優雅な趣を示し、三方を繞る翠巒に包擁され、賽者をして自ら敬虔の念を深からしめる。

伊奈波神社●名所、旧跡

祭儀

当社例祭を「岐阜まつり」という。四月四日の神幸祭は鳳輩を中心とし威儀を整え、金神社（主神の妃神を祀る）檀森神社（主神の御子を祀る）へ渡御。夜は宵宮祭として山車屋台を曳き廻し「からくり人形」の奉芸、満開の桜花に電飾を施し仕掛火花と共に祭り情緒は最高に達す。翌五日は本殿にて厳肅なる例祭が斎行される。

境内地

境内は三方を桜檜を中心に都市に稀な原始林に包まれ、約一五〇〇〇平方米、春は桜 初夏は新緑 夏は涼風 秋は紅葉 冬は雪景色と定評あり、しかも莊嚴なる社殿がその間に完備し、林相の自然美と共に輪奐の美を形成し、そのご神徳は弥々照り輝いている。



岐阜護国神社

社殿が竣工したのは昭和一五年一月。当時は長

良川河川敷の鬱蒼たる竹藪林であったが、宮野岐阜
県知事と松尾岐阜市長を先頭にして、県下各市町村
団体の奉仕団が開拓に当たった。金華小学校の生徒た
ちも、川原の赤石を拾い、内玉垣の玉石とした。

明治維新の勤王の志士・西山謙之助をはじめ、二
度にわたる大戦での戦没者三万八千柱を祀っており、
昭和三七年には昭和天皇皇后両陛下の御親臨も仰い
でいる。

外苑には岐阜県慰霊塔があり、境内には結婚式場
を主とする「ホテルせいらん」もある。春秋の大祭
には薪能や野外音楽祭、夏の河童まつりなど、多才
なイベントで市民に親しまれている。

境内の桜と庭園は、つとに有名で、市内有数の観
光地にもなっている。

岐阜護国神社



岐阜護国神社正面

権現山鐘・鏡岩水源地



権現山の鐘樓



権現山の鐘

権現山鐘



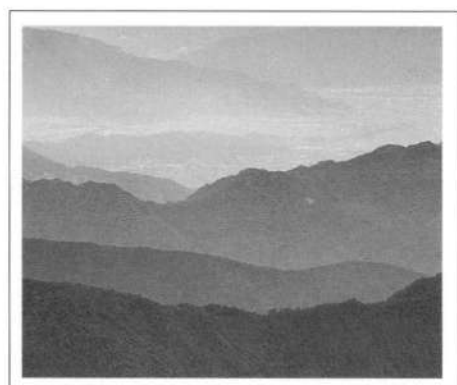
S20.7.9 岐阜空襲の日・平和の鐘（第1回）



鏡岩水源地の名水百選

年

譜



年譜

明治7	(1875)	4月12日中竹屋町米屋町に涉り63戸焼失す
明治15	(1882)	2月共進会を岐阜で開催
"	(1882)	4月6日板垣退助中教院で刺される
"	(1888)	6月岐阜公園開園される
"	(1891)	10月28日濃尾大震災2817戸焼失死者248名
"	(1896)	名和昆虫研究所が設立される
大正4	(1915)	11月長良橋が鉄橋となり電車が通る
"	(1917)	岐阜公園に三重の塔が創設される(撤去された長良橋の廃材使用)
"	(1925)	共進会が開かれる
昭和3	(1928)	3月鏡岩水源地工事始まる
"	(1930)	3月鏡岩水源地完成通水開始される
"	(1931)	10月忠節用水工事起工される
"	(1933)	12月21日工事完成通水式挙行される
"	(1936)	4月躍進博覧会開催される(岐阜公園を中心に躍進日本大博覧会)
"	(1945)	7月9日B29岐阜市を空襲死者818名焼失2万余戸
"	(1945)	8月15日太平洋戦争が終る
"	(1949)	9月30日金華広報委員会が出来る
"	(1950)	9月岐阜公園に水族館が出来る
"	(1955)	3月新長良橋完成する(橋高が問題となつた)
"	(1955)	4月金華山ロープウェイ完成する
"	(1956)	6月金華山に岐阜城完成する
"	(1959)	9月26日伊勢湾台風被害全市に及ぶ
"	(1963)	3月金華山ドライブウェイ完成する
"	(1964)	10月金華橋完成する
"	(1960)	10月12号台風により長良川大洪水
"	(1960)	12月大仏殿修復落慶法要
"	(1965)	10月第20回国民体育大会 両陛下万松館に泊られる 他県選手民泊協力
"	(1971)	12月金華公民館落成
"	(1971)	46
"	(1971)	40
"	(1960)	35
"	(1960)	35
"	(1964)	39
"	(1963)	38
"	(1959)	34
"	(1956)	31
"	(1955)	30
"	(1955)	30
"	(1950)	25
"	(1949)	24
"	(1945)	20
"	(1945)	20

平成2	(1990)	3月金華小学校百周年記念式典举行される	平成2	(1990)	2月岐阜公園外苑に杭洲門友好庭園完成開園
"	(1988)	9月台風17号により長良川大洪水安八で堤防決壊 金華校下にも浸水家屋が出た	"	(1990)	10月岐阜公園にて第1回菊人形展開催される
"	(1988)	12月洪水から街を守る 伊奈波貯留槽完成	"	(1991)	5月岐阜公園の一角に加藤栄三、東一記念館オープン
"	(1988)	広場地下にコンクリート 箱型縦51・2m 横36・2m 深さ5・8m設置される			
"	(1984)	2月24日金華山トンネル起工式 西口			
"	(1984)	11月2日" 東口			
"	(1985)	10月31日岐阜市歴史博物館オープン			
"	(1987)	3月1日金華山長良川リバーサイド開通式			
"	(1987)	4月1日広報会が自治会と改称される			
"	(1988)	4月3日コミュニティ水路第1期完成			
"	(1988)	6月12日岐阜公園に信長居跡完成			
"	(1988)	6月8日、9月18日73日間未来博開催される			
"	(1988)	5月名鉄市内線徹明町、長良北町間廃線となる			
平成2	(1990)	6月県道白鳥線本町1丁目大宮町2丁目間名鉄軌道撤去 道路改修し歩道完成ハナミズキ植栽される			

金華自治会連合会四〇周年を記念して、校下史誌発行が計画されました。平成2年2月、「金華史誌」の編

纂目的が「金華の伝統ある歴史や自然を明らかにし、現在までの生活の歩みを記録することによって、先人たちの努力に対し敬意を表し、さらに明日への糧として21世紀に生きる意欲をもちたてたい」と示されました。

私たち素人ばかりの編集委員は、前金華小学校長（元岐阜県歴史資料館長）、加納宏幸先生のご指導をいただき、何回かの会合を重ね、読みやすく、わかりやすい、目で見ると記念誌となるように努力いたしました。

自治会、各種団体、また校下のみなさんに広くご協力をお願い致し、ここによくやく発刊の運びとなりました。貴重な資料、原稿など快くご提供くださいました多くの方々に厚くお礼申し上げます。

また本紙作成にあたり東京在住金華出身の漫画家服部みちを氏及び写真撮影にご協力頂いた吉田委員、印刷のサンメッセ株式会社、編集委員の皆さんに感謝し心よりお礼申し上げます。

山田 勝一



安宅山車・からくり人形

編集委員会



吉田 尚弘
田代 俊久
浅野 尚子
見並 貞子
村上 艶子
貝崎 榮一
伊藤 泰雄

岩崎 武雄
長屋 季雄
小林 嘉美
加納 宏幸
山田 勝一
河合 慶太郎
牧野 潔

編集委員会風景



金華史誌

●発行編集 平成五年三月発行

金華史誌編集委員会

岐阜市大工町一番地(金華公民館内)

代表 小林嘉美

●印刷 サンメッセ株式会社

〒五〇〇 岐阜市須賀一十一

